

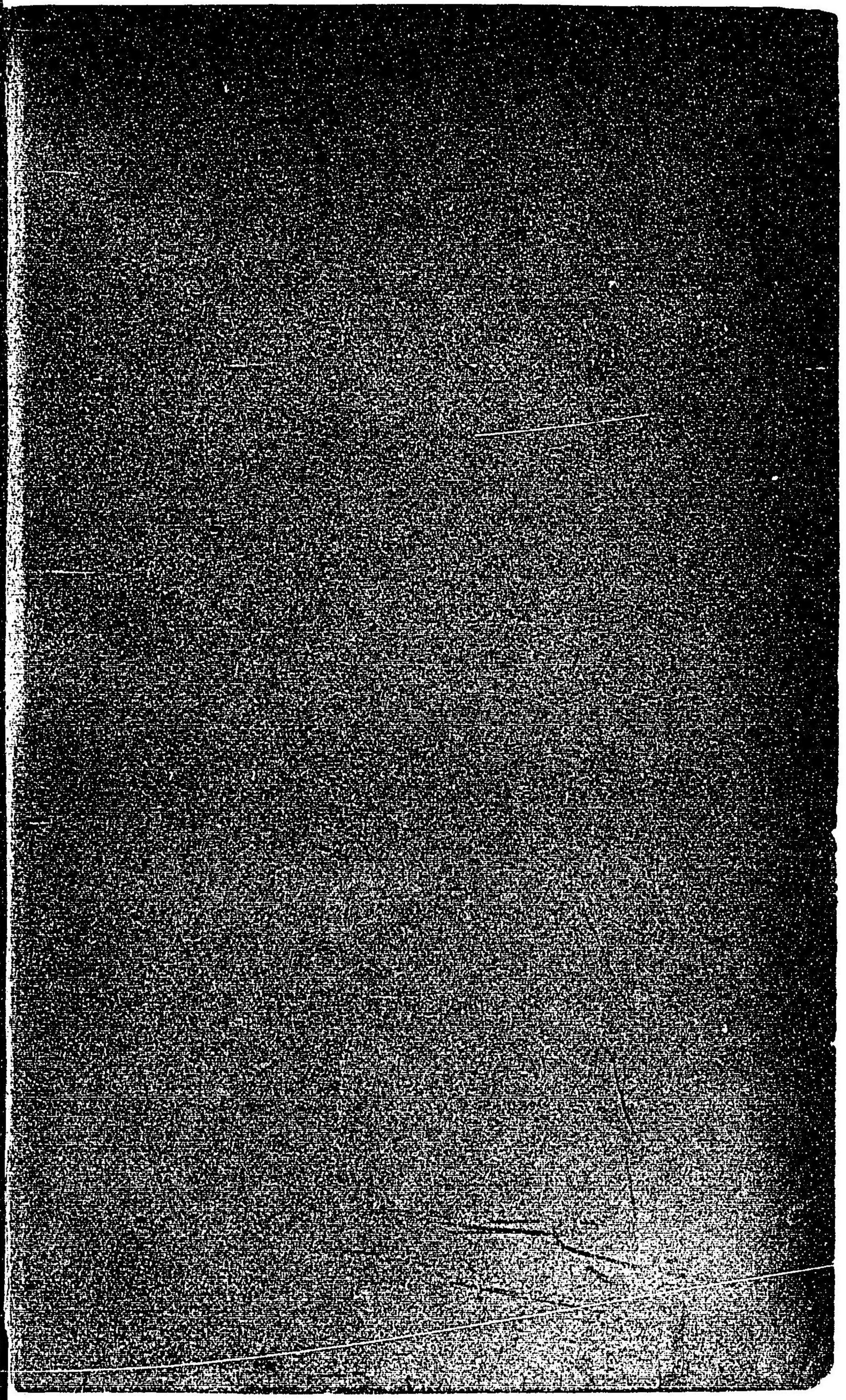
中江萬介著

第六版



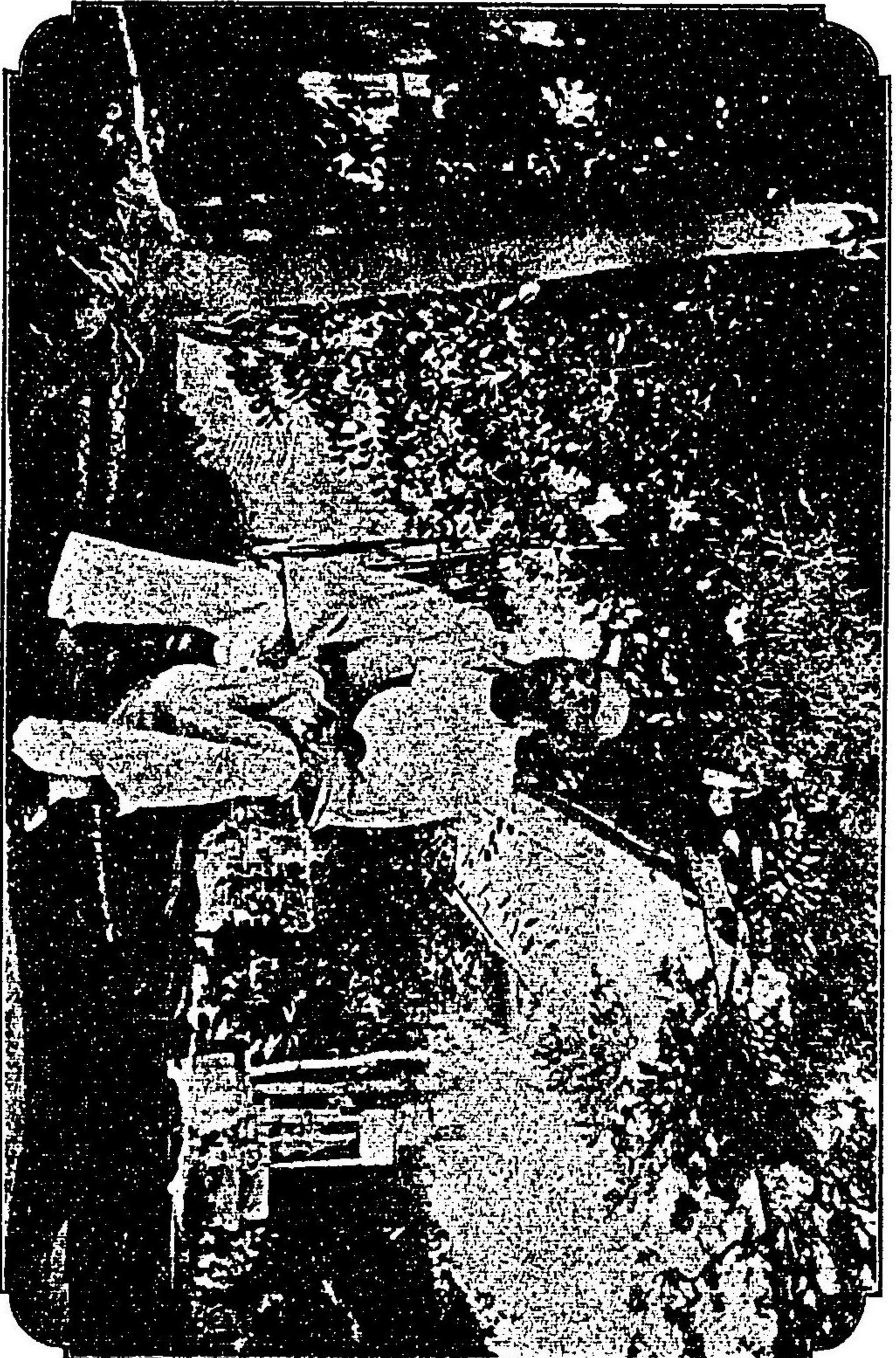
一年有半

東京博文館藏版





息令及士居民兆の中放福市堺州泉



士居民莞るけ於に邸本川石小京東

(昭和十四年九月十五日撮影)

引

續一年有半、一名無神無靈魂は、兆民先生が、其哲理的所見の一
斑を説示せられたものである

先生の哲學は、實に古今東西の學說以外、宗教以外に一步を拔て、
別にナカエニズムとも名くべき一家のシステムを持して居られた
のである、而して之れを詳密に論述して一大著作を成さうといふ
のが、哲學者としての先生が、多年の志願で有つたらしい、夫に
は數年の糧を貯へねばならぬ、萬卷の書を備へねばならぬ、全く
俗累を斷たねばならぬ、其上で思ふ存分に書くつもりだと、屢ば
余等に語られたことがあつた、併し哀い哉、先生が是れならばと滿
足して筆を下すの機會は、遂に今日まで來なかつた

今歳の四月から大阪で病に臥され、餘命は一年半と限られた、夫
から近年罕れな淫雨の鬱陶しさに、續いて焼くが如き酷熱で、健

二
廉の者さへ堪へ難いのに、況して不自由がちの旅先で、迎も大部の物を組織的に書くといふのは、重患の人には出来る譯でない、残念ながら前の『一年有半』を絶筆として哲學の方は果し得ないであらうと思はれた、秋涼の候になつて書ければ書きたいけれども、是も當時話された所である

先月即ち九月十日に漸く歸京するを得られたが、無論病勢は益々進んで居る、猶ほ進みつゝある、言ふとは出来なくなつた、腫物は追々痛み出した、談話は總て筆談といふ有様で、一年半の約束期限は大分短縮されさうになつた、到底不治の疾だから療養するの必要もないけれど、少しでも時間があれば、責めて哲學の大要だけでも書遣したい、一日に五ページも書けば、二十日から一月も生きてれば澤山だ、活きるといふなら取掛るといふので、淺川博士が主治醫となり橋本、岡田、兩博士の診察を煩したら、二月餘りは大丈夫で有るとの事だ、夫ならと言つて書き初められた

のが、此書である

切開した氣管の呼吸は奄々として、四支五體は鶴の如く瘦て居るが、一たび筆を取れば一瀉千里の勢ひである、令閨始め一同が、そんなにお書きなさると一倍病氣に觸りまじやう、お苦しんでしやうと言つても、書なくても苦しきは同じだ、病氣の療治は、身體を割出してなくて、著述を割出してある、書ねば此世に用はない、直くに死ても善いのだと答へて、セッセと書く、疲れれば休む、眠る、目が覺めれば書くといふ風であつた、病室は廊下つゞきの離れて、二室の奥の方に、夜も一人で臥されて居る、半宵夢醒て四顧寂寥として人影なく、唧々たる四壁の蟋蟀の聲を聞くと、既に墓場にでも行てるやうで、心が澄渡つて哲理の思考には尤も妙だから、大抵は半夜に書くとのとであつた、而して日に一時間か二時間か、病氣の悪い時には二三日も續けて休まれたが、九月十三日から初めて僅かに十日ばかりで、二十二三日には早や完結

を告げて居た、今更ながら其健筆實に驚くべきである。但だ數年の糧と万卷の書をも具へて組織的大著作をとの多年の希望が、今や其日に追はれる貧乏の中で、一冊の参考書もなく、僅か十日か二十日の間に、病苦を忍んで大急ぎで書き上げねばならぬとなられたは、思へば實に情けなさの限りである、本書も固より書き放しの其儘で、一字の推敲も一句の鍛練もせられる暇はない、書けば限りがない、病氣も餘程進んだから是れ位ひにして置かう、と言て渡されたので、余は其發行を是非とも生前の間に合したいと思つて、草々に持て來て胡亂に附した。夫れ千萬の瓦礫よりも一粒の金剛石で、縱令長月日を費さずとも、大部でなくとも、先生の哲學の神髓骨子は、正に此書に依て傳へらるゝであらう、余等固より能く先生の學の萬一を覗ふとは出来ないが、若し後人先生の學を表章せんとする者あれば、此書に資すると、蓋し多いであらうと信する、唯た是丈けが不幸中の幸である。

ある

此書を「一年有半」の續とされたのは外ではない、事項は全く異つても、其日月は矢張一年半の限内で、且つ先生の境遇は少しも變らないから、特に斯く題したのである。

卷末に、先生の舊著「理學鈞玄」二冊を附して置いた、是は古來の哲學諸派の學說を網羅して、能く其綱を提げ要を撮り、一讀容易に泰西哲學の何物たるを解するを得て、大に本書を看る人の參考と爲るのみならず、其文章も亦蒼勁精練、優に後進の模範となるであらうと信じたからである。

以上本書發行に至つた次第を明かにするの必要ありと感じて、長々しくも卷端に引するに至つた、其僭越の罪は、深く先生と江湖とに向つて謝する所である。

明治三十四年九月

門人 幸徳 傳 拜識

續一年有半(無神無靈魂)

目次

第一章 總論

(一) 靈魂	六
(二) 精神の死滅	一三
(三) 軀殼の不滅	一五
(四) 未來の裁判	二〇
(五) 多數神の説	二八
(六) 唯一神の説	三一
(七) 神佛同體説	三三
(八) 主宰神の説	三五
(九) 造物の説	三八

(一)

次

目

(十) 神に遇ふ……………四六

第二章 再論……………五〇

(一) 世界……………五二

(二) 無始……………六一

(三) 無終……………六四

(四) 無邊無限……………六六

(五) 精神の能……………六八

(六) 空間……………七二

(七) 時……………七五

(八) 主観……………七九

(九) 客観……………七九

(十) (再)主観客観……………八三

(十一) 意象……………八五

(十二) 無形の意象……………八七

(十三) 神の意象……………九〇

(十四) 記憶……………九五

(十五) 意象の联接……………九七

(十六) 断行、行爲の理由、意思の自由……………一〇〇

(十七) 自省の能……………一〇八

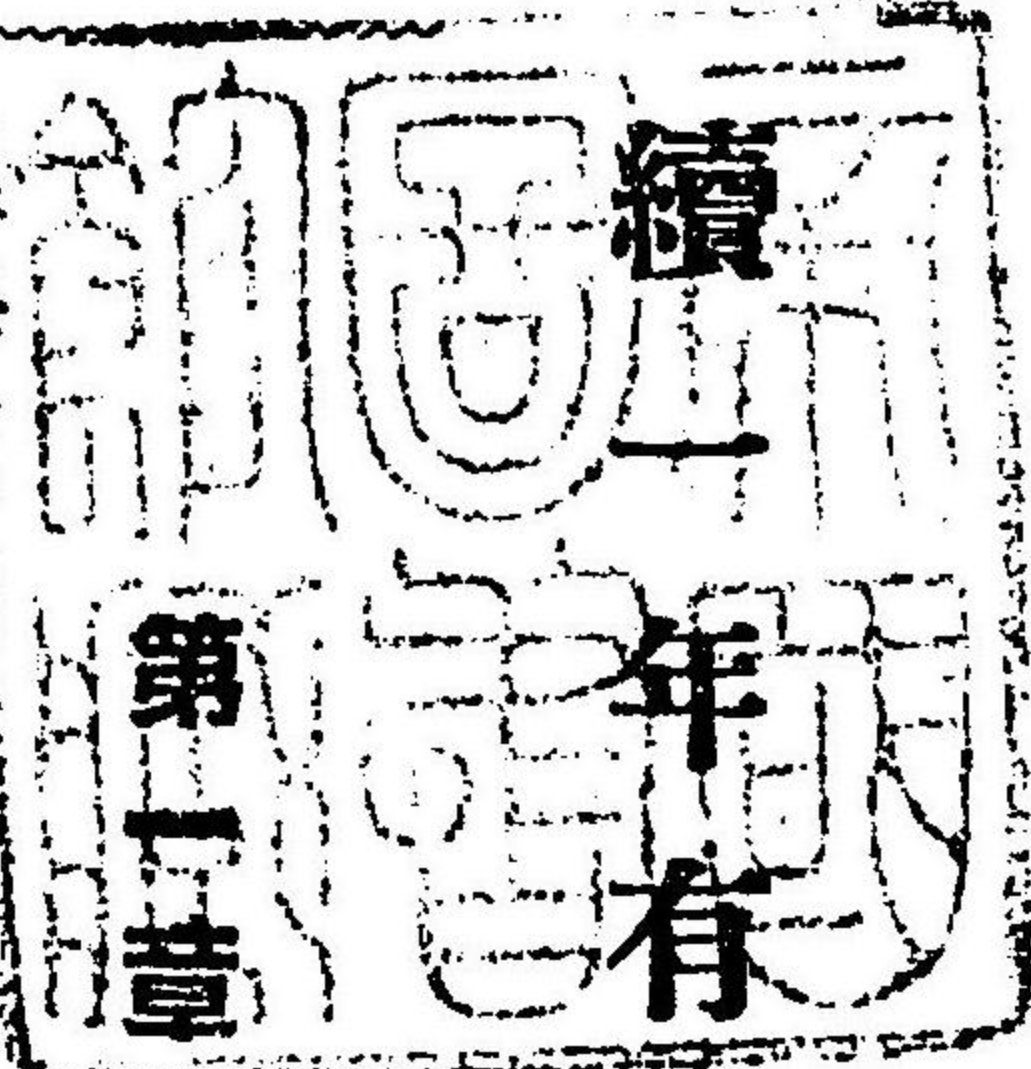
(十八) 歸納演繹……………一一四

第三章 結論……………一二六

附 録

理 學 鈎 玄……………一

續一年有半目次終



續一年有半

「一名無神無靈魂」

中江篤介著

總論

理學即ち世の所謂哲學的事條を研究するには、五尺の軀の内に局して居ては到底出來ぬ、出來ることは出來ても、其言ふ所ろが、知らず識らずの間皆没交渉と成るを免れぬ、人類の内に局して居てもいかぬ、十八里の霧圍氣の内に局して居ても、大陽系天體の内に局して居てもいかぬ

元來空間と云ひ、時と云ひ、世界と云ひ、皆一つ有りて二

(二)

續一年有半

つ無きもの、如何に短窄なる想像力を以て想像しても、此等空間時、世界てふ物に、始めの有るべき道理が無い、又上下とか東西とかに、限極の有る道理が無い、然るを五尺軀とか、人類とか、十八里の雰圍氣とかの中に居して居て、而して自分の利害とか希望とかに拘牽して、他の動物即ち禽獸蟲魚を疎外し輕蔑して、唯た人と云ふ動物のみを割出しにして考索するが故に、神の存在とか、精神の不滅、即ち身死する後猶ほ各自の靈魂を保つを得るとか、此動物に都合の能い論説を并べ立て、非論理極まる、非哲學極まる嘸語を發するとに成る
プラトニヤ、プロタノヤ、デカルトヤ、ライプニツトヤ、皆

(三)

第一章總論

宏遠達識の傑士で有りながら、知らず識らずの間己れの死後の都合を考慮し、己れと同種の動物即ち人類の利益に誘はれて、天道、地獄、唯一神、精神不滅等、煙の如き否な煙なら現に有るが、此等の物は唯言語上の泡末で有ることを自省しないで、立派に書を著はし、臆面も無く論道して居るのは笑止千萬で有る、又歐米多數の學者が、孰れも母親の乳汁と共に吸収して、身軀に血管に浹洽して居る迷信の爲めに支配せられて、乃ち無神とか無精魂とか云へば大罪を犯したるが如く考へて居るとは笑止の極で有る
成程人の肉を肝にして恣睢暴戾を極めた盜跖が長壽

して亞聖とも云はるゝ顔回が夭死し、其他世上往々逆取順守を例とせる盜賊的紳士が榮へて、公正の行を守る人物が糟糠だにも飽かずして死するを見ると、未來に眞個公平の裁判所が有ると云ふが如きは、多數人類に取りて都合の好い言ひ事である、殊に身大疾に犯され、一年、半年と日々月々死に近づきつゝ有る人物等に在ては、深仁至公の神が有り、又靈魂が不滅で有て、即ち身後猶ほ独自の資を保ち得るとしたならば、大に自ら慰むる所が有るであらう、併し夫では理學の莊嚴を奈何せん、冷々然唯道理是れ視る可き哲學者たる資格を奈何せん、生れて五十五年、稍や書を讀み理義を解して

居ながら、神が有るの靈魂が不滅と云ふやうな嘔語を吐くの勇氣は、余は不幸にして所有せぬ。余は理學に於て、極めて冷々然として、極めて剝出して、極めて殺風景に有るのが、理學者の義務否な根本的資格で有ると思ふので有る、故に余は斷して無佛、無神、無精魂、即ち單純なる物質的學說を主張するので有る、五尺軀、人類、十八里の霧圍氣、太陽系、天體に局せずして、直ちに身を時と空間との眞中(無始無終無邊無限の物に眞中有りとせば)に居いて、宗旨を眼底に置かず、前人の學說を意に介せず、茲に獨自の見地を立て、此論を主張するので有る。

(一) 靈 魂

第一靈魂より點檢を始めやう、靈魂とは何物ぞ
 目の視るや、耳の聽くや、鼻口の嗅食するや、手足の捕捉
 し行歩するや、一考すれば實に奇々妙々と謂はねばな
 らぬが、誰か之を主張するので有る、想像の力、記憶の力
 に至つては、其奇なるとは更に甚しい、乃至今日國家社
 會を構造するは誰の力ぞ、諸種學科を開發し推進し、蠻
 野を出て、文明に赴く者、皆所謂精神の力と云はねば
 ならぬ、若夫れ體軀は唯五尺とか六尺とかに限極せら
 れて、十三元素とか十五元素とかを以て捏ね固められ

て、畢竟一の頑肉で有る、然れば靈妙なる精神が主と爲
 りて、頑肉なる體軀は之れが奴隸で有らねばならぬ云
 々

此言や是れ正に大謬戾に陥いる第一起頭で有る、精神
 とは本體ではない、本體より發する作用で有る、働きて
 有る、本體は五尺軀で有る、此五尺軀の働きが、即ち精神
 てふ靈妙なる作用で有る、譬へば猶ほ炭と焔との如き
 て有る、薪と火との如きで有る、漆園叟は既に此理を觀
 破して居る、夫れ十三若くは十五元素の一時の抱合た
 る軀殼の作用が、即ち精神なるに於ては、軀殼が還元し
 て即ち解離して即ち身死するに於ては、之が作用たる

精神は同時に消滅せざるを得ざる理で有る、炭が灰に成り薪が燼すれば、焰と灰とは同時に滅ゆると一般で有る、軀殼既に解離して精神猶ほ在りとは背理の極、苟も宗教に癡微せられざる、自己死後の勝手を割出しとせざる健全なる腦髓には、理會され可き筈でない、唐辛は無くなりて辛味は別に存するとか、大鼓は破れて鑿々の音は獨り遺つて居るとか、是れ果て理義を思索する哲學者の口から眞面目に言はるゝ事柄で有るふか、十七世紀前の歐洲では、若し無神無精魂の説を主張すれば、或は水火の酷刑に處せられたので、已むを得ぬ事情も有つたかは知らぬが、言論の自由なる道理に支配

せられ可き今日に在て、猶ほ此囁語を發するとは何たる事ぞ
故に軀殼は本體で有る、精神は之れが働らき即ち作用で有る、軀殼が死すれば精魂は即時に滅ぶるので有る、夫れは人類の爲めに如何にも情け無き説では無いか、情け無くても眞理ならば仕方が無いでは無いか、哲學の旨趣は方便的では無い、慰諭的では無い、縱令殺風景でも、割出しでも、自己心中の推理力の厭足せぬ事は言はれぬでは無いか
若し宗旨家及宗旨に魅せられたる哲學者が、人類の利益を割出したる言論の如く、果て軀殼の中に、而かも

軀殼と離れて、軀殼より獨立して、所謂精神なる者が有つて、恰も人形遣が人形を操る如く、之れが主宰と成つて、軀殼一日解離しても、即ち身死しても、此精神は別に存するとすれば、軀殼中に在る間は、孰れの部位に坐を占めつゝ有るか、心臓中に居るか、腦髓中に居るか、抑も胃腸中に居るか、是れ純然たる想像では無いか、此等臟腑は孰れも細胞より成立ちて居るからは、彼れ精神は幾千萬億の細片と成つて、此等細胞中に寓居しつゝ有るか

曰く、精神は無形なり、實質有るに非ずと、此言や正に意味なき言語で有る、凡そ無形とは吾人の耳目に觸れな

い、否、な觸れつゝ有ても吾人の省しないものを謂ふので、即ち空氣の如き、科學の目にのみ有形で、顯微鏡にのみ有形で、肉眼には正に無形で有る、凡そ無形とは皆此くの如く、實質は有ても極めて么微で、吾人之れが觸接を覺へないでも、其實は矢張形有るものを謂ふので有る、彼れ精神の如き、若し此くの如くて無く、純然無形で、實質が無いとすれば、是れ虚無では無いか、虚無が軀殼の主宰なりとは、果て穩當なる言ひ事て有るか

凡そ無形と云ふものは、皆今日迄の學術で未だ捕捉し得ないか、又は學術では捕捉されても、肉體に感得せられないもので有る、即ち光、温、電等の如きでも、學術益々

進聞した後は、果て顕微鏡で看破し得るかも知れない
ては無いか、彼れ精神の如きでも、灰白色脳細胞の作用
で以て、其働らく毎に極めて微の細分子が飛散しつゝ
有るかも知れないは無いか、凡そ學術上未解の點に
就て想像の一説を立るには、務めて理に近いものを擇
ふが當然で有る、即ち精神の如きも、軀殻中の腦神經が
網縷し摩蓋して、茲に以て視聽嗅味及ひ記憶、感覺、思考、
斷行等の働らきを發し、其都度瀑布の四面に潰沫飛散
するが如くに、極々精微の分子を看破し得るに至るだ
らうと臆定し置ても、必ずしも理に悖りて人の良心を
怒らすが如き事は無いでは無いか、之れに反し、分子も

形質も無き純然たる虚無の精神が、一身の主宰と成り
て諸種の働らきを爲すと云ふが如きは、如何にも悖理
では有るまいか、人の良心を怒らす可き性質では有る
まいか

(二) 精神の死滅

且つ生産の一事に就て一考せよ、剩除の大りに就て思
索せよ、凡そ懷生の物は、皆己れの身後に兒孫を留むる
ので有る、而して其兒孫には、之れが親たる者が、己れの
軀體と此軀體より發す可き精神とを分與して、即ち兒
は親の分身で有つて、而して親は死し兒は留まりて、剩

除の數理に副ふので有る
看よ蠶蛾が既に卵を生んだ後は、間もなく死滅するて
は無いか、若し彼の卵が蛾の軀體と精神とを授かりて、
而して彼の蛾も亦軀體のみ亡びて、其精神は獨存すと
云はゞ、理に於て穩當で有らうか、即ち季四張三各々兒
子を遺して、而して其季四張三も死後靈魂獨存して滅
びないとすれば、是れ靈魂國の人口は非常の滋息を爲
して、乃ち十億、百億、千々、萬々、十萬億と無限に蕃殖して、
一箇半箇も滅するところが無いであらう、是れ果て剩餘の
數理に合すると云はれやうか
凡そ生氣有るもの、即ち草木と雖も人獸と異らぬので

有る、都て父祖たる者は、兒孫を以て始めて不朽なるを
得るもので有る、然るに既に兒孫を以て不朽なるを得
て、猶ほ其上に自身も別に不朽なるを得るとは、餘り勝
手過ぎたる言ひ事である、非哲理極まるので有る、半死
の田舎媪の口から云へば兎も角も、哲學者を以て自ら
標榜する人物にして、此くの如き非哲理極まる言を吐
くとは、直ちに人間羞耻の事を知らぬので有る

(三) 軀殼の不滅

是故に軀殼は本體である、精神は軀殼の働き即ち作用
である、左ればこそ軀殼一たび絶息すれば、其作用たる

視聽言動は直に止むので有る、即ち軀殼死すれば精神は消滅する、恰も薪燼して火の滅ふると一般で有る。此道理から云へば、所謂不朽とか不滅とかは精神の有する資格では無く、反對に軀體の有する資格で有る、何となれば、彼れ軀體は若干元素の抱合より成れるもので、死とは即ち此元素の解離の第一歩で有る、併し解離はしても元素は消滅するものではない、一旦解離して即ち身腐壞するときには、其中の氣體の元素は空氣に混入し、其液體若くは固體のものは土地に混入して、要するに各元素相離れても、各々此世の孰れの處にか存在して、或は空氣と共に吸嘘せられ、或は草木の葉根に攝

取せられ、啻に不朽不滅なる而已ならず、必ず何かの用を爲して、轉輾窮已無しと云ふので有る。故に軀體、即ち實質、即ち元素は、不朽不滅で有る、之れが作用たる精神こそ、朽滅して跡を留めないもので有る、是れは當然明白の道理で、大鼓が敗るれば鑿々の音絶へる、鐘が破るれば鉤々の聲は止まる、而して其破敗した大鼓や鐘は、其後如何なる形狀を爲しても、如何に片々毀壞せられても、一分一厘消滅すると無く、何處かで存在して居る、是れが物の本體と、働らき即ち作用との別で有る。

春首路上南風に吹揚けらるゝ黄埃、彼れ如何に疎末に、

如何に墓無く見られても、是れ又不朽不滅のもので有る。或は河水に混し、或は塵頭の物品に附着し、時に随ふて處を變しても、必ず存在して決して消滅しないので有る。彼れ如何に疎末でも、矢張若干元素の抱合に成つて、吾人の軀體と類を同くして居る。宗旨家若くは宗旨に癡徴せられたる哲學者の云ふ所ろの虚無なる精神、又は吾人の云ふ所ろの軀體の一作用なる精神とは、科を同くせぬので有る。故に塵埃は不朽不滅なるも、精神は朽滅す可き資格のもので有る。

釋迦耶蘇の精魂は滅して已に久しきも、路上の馬糞は世界と共に悠久で有る。天満宮即ち菅原道眞の靈は身

死して輒ち亡ひても、其愛した梅樹の枝葉は幾千萬に分散して、今に各々世界の何處にか存在して、乃ち不朽不滅である。

不朽不滅の語は、宗旨家の心に於ては如何に高尚に、如何に靈妙に、如何に不可思議かは知らないが、冷澹なる哲學者の心には、是れは凡そ實質皆有する所ろの一資格で、實物中不朽不滅で無いものは一も無い。眞空に等しい虚無の靈魂は、啻に不朽不滅で無い而已ならず、始より成立て居無いので有る。虚靈派哲學者の言語的泡沫で有る。

(四) 未來の裁判

宗旨家及び宗旨に魅せられたる哲學家、往々言ふ、此世界は洵に不完不粹のもので、善を爲すも必しも賞せられず、惡を爲すも必ずしも罰せられず、甚きは惡人榮耀榮華に飽いて、善人は或は寒餓死を免れ無い、是れ丈けれども吾人の良心は如何にも満足するところが出來ぬ、是れ必ず未來の世界の存する證據で有る、故に未來の世界に於て、完粹整備なる裁判の在る有りて、善の大小、惡の輕重に従ふて、夫れ夫れ賞罰して、寸分も權衡を錯まらず、而して此世界の不公平を償ふて、以て不平なる良心

を満足させるので有る、然るに人若し身死して精魂即ち滅するに於ては、此最後の裁判を受くるとが出來ない、萬能なる神の所爲は斯の如き不完全なるものではない、善人必ず賞を得て、惡人必ず罰を蒙むりて、幸に道るゝとを得無いとに成つて居る云々、夫れには精魂の不朽不滅が必要で有る云々
嗚呼此言や非道理非哲理の極、意義益々糾紛し錯雜し、宛かも古昔の迷室の中に足を容れたる如くに成り了はる外は無、意義無き語句を聯結して、些の意義を發せんと欲する故に、愈々益々淆亂を致すので有る
夫れ此世界の裁判が不完全で有るとは、正に五尺軀に

局しての言ひ事て有る、人類の中に局しての議論て有る、善人或は賞に漏れ悪人多く罰を免るゝは、果て誰れの所爲ぞ、吾人々類の自業自得ては無いか、誰れに赴愬しても、是れ汝等自ら作せる孽なり、汝等自ら改むる外他に道無し」と一言に刎ね付られ可きもので有る、十八里の霧圍氣外には不通の訴訟て有る、否な十八里の霧圍氣中でも、特に横目縦鼻の動物にのみ通用する議論て有る、盜蹠が榮へて顔回が窮したとて、鮒や鯉には少も關係は無い、一時の風雲に乗して僥倖に顯達の地を得てる不義の徒が、天下の大柄を弄したとて、豕や牛の爲めには利害俱に頓着無して有る

夫れ無始無終無邊無限の世界に立ちて、芥子粒にも比す可らざる人類間の出來事を把りて、此世の裁判の、未來の裁判の、神の靈魂の、善人の、悪人のと喋々して、而して人類中の事は人類中で遣て除け、不正は追々と避け、正義は追々、近寄るとを勗めて、乃ち自己脚跟下の事は、自己の力で料理する様做し、將ち去らずして、世界有る可らざる神を影撰し、事理容るす可らざる靈魂の不滅を想像して、辛うして自己社會の不始末を片付けんとするのは、寧ろ生地無しと謂はねばならぬ
見よ社會の現状は、此輩の囁語に管せず、人類中の事は人類中で料理して、古昔に比すれば悪人は多くは罰を

免れず、善人は世の稱賛を得て、乃ち社會の制裁は漸次に力を得つゝ有るては無いか、法律制度漸次改正せられて、蠻野より文明に赴き、大數に於て進歩しつゝ有るては無いか、何ぞ必ずしも未來の裁判を想像し、神を想像し、靈魂の不滅を想像するの必要はないので有る、宗教及び宗教に魅せられたる哲學の囁語を打破しなければ、眞の人道は進められぬのだ。

此輩輒ち言ふ、未來に於ての至嚴至密の裁判を畏るればこそ、吾人々類の過半數否を殆ど全數が幾分か自ら戒慎して善に就き惡を避くる様勗むるので有る、夫れ此畏れが有りてすら、刑辟に觸れる者が有るのに、況し

て此世は此世限り、榮耀をすれば、夫れ丈けの利益、刑罰を道るれば、夫れ丈けの幸福、公正にして貧窮に陥いるは愚の極と言ふ事に成たならば、道德風俗は如何に壞亂するか測られないのだ、即ち歐米人が、無宗旨の人を忌むと、盜賊も管ならざる姿で有るのは、此處の道理で有る云々

吁、是れ何たる卑陋の言ぞ、凡そ善の爲めに善を爲し、惡の爲めに惡を避け、一切身外の利害を眼底に措かず、即ち些の爲めにする所ろ無くしてこそ、善稱す可くして、惡罰す可きで有る、若し他は爲めにする所ろ有るときは、善も善に非ず、惡も惡に非ず、善惡混亂し、邪正淆雜し

て適從する所を知らなく成る、且つ宗教の道德に於けるのは、其力實に微弱て有る、其證據は歐洲に在て宗教の尤も盛なのは中古の時て有つた、然るに此時諸國皆封建制度に循つて、君主と諸侯と常に相軋し、刑罰の如き實に苛酷を極めたもので、爾來科學が漸く盛に赴いて、宗教の信仰漸く減退に向つた十七八世紀が、却て人道に於て復に多くの進歩を爲し、中古の時の比て無かつたではないか、更に支那日本に觀よ、二國俱に宗教には極めて冷澹なに拘らず、人民の溫和で、人をして酸鼻せしむる惡事を敢行する者は、古昔歐洲諸國に比して大に罕て有るではないか、故に未來の裁判の畏れが

巨惡大慙に對して銜轡の功を奏し居ると云ふことは、吾人の信せざる所ろて有る、且つ此世界で善を勧め惡を懲らす爲めに、未來の裁判を想像し、神を想像し、靈魂を想像するのは、是れ方便的て有る、決して哲學的では無い、哲學的は縱令ひ一世に不利て有ても、苟も眞理ならば之を發揮すること本旨と云ふ可きて有る、今や英、佛、獨、即ち科學の最も盛なる歐洲の第一流國に在て、其中心學術を信するので、辻褃の合はない宗旨の事條に關しては、竊に冷澹を極めつゝ、有る輩が隨分寡くない、乃ち舊教擅越の尤も多い佛國の如きでも、精進

日たる水曜日にて、公々然牛仔を食して憚からざる者極めて衆いので有る、而かも一般道徳は、中古に比して頗る進めりと謂ふ可きで有る、宗教の方便的信條が道徳の實際に力の無いとは、他にも證據を擧げやうと思へば澤山有る

(五) 多數神の説

神に至ては、其唯一たると多數たるとに論なく、其非哲學的なる尤も甚しと曰はねばならぬ
先づ多神から點檢しやう、即ち太陽、太陰、其他山川、雲物等を神として、之を崇拜し之を祭祀する等の如きは、一

噓にも値ひせぬ、論破する價值は無いので有る、若し夫れ古昔豪傑、及び國家に功有つた人物、又は一宗派の開山たる祖師の如きも、之を祭りて自己敬虔の意を致すとは別に不便なとは無いが、禱祠して靈驗を求むるが如きは、尤も謂れ無いので有る、此等の人物も、身死すると同時に其神は滅したもので、之を禱祠しても些の應驗の有る可き筈が無い、所謂淫祠たるを免れない、三家村里の翁媪が、此等雲物又は古人既滅の泡沫を拜禱するの猶ほ恕す可きも、讀書し理義を辨する五尺軀の大男子にして、眞面目に此等の物を拜するに至ては、實に言語に絶するので有る

而して此れ啻に悖理笑ふ可きのみならず、人事の實際に害すると甚きものが有る、即ち疾病有るに方つて、醫師に頼り適當の治を施すとは爲ないで、叨に禱祠祈誓して自ら得たりとし、竟に癒す可らざるに至る者が往々有るので有る、又一日一刻を争ふ商工事業に關して、行旅しやうとする者が、此等神祠の告示に由て、俄に逡巡し延期して、期を逸し了はる者も往々有るので有る、甚きに至ては禱祠に藉口して、男女懇懃を相通するの媒をして、以て利を博し、阿芙蓉、莫爾比涅の毒藥を菓餅の中に入れて、一時の効驗を示し、若くは止痛の功を誇つて、信徒を蠱惑する者も往々有るので有る、此等は哲

學者に在ては之を言ふさへ慙づ可きで有る、哲學を題目とした書には、之を筆するさへ厭ふ可きで有る、而かも靈魂不滅の嘸語の弊は、正に此に迄至るので有る、而して牛矢の不滅馬糞の不滅は、科學的眞理なるが故に絶て其弊を見ぬので有る

(六) 唯一神の說

唯一神の說は、多數神の說に比すれば、數層進歩した痕迹が見える、けれども其源頭は多數神の說に胚胎し、時世と共に幾分か進歩し、幾分か學術的と成つたので、其間高華雄深の才を負ふて、當世を風靡し後代を壓倒せ

んとする者が、其想像の能力を思ふ儘に馳騁して、凡を厭ひ平を嫌ひ奇を衒ひ新を耀かすの餘に出たのと、並に彼等も人生限り有りて朝夕を圖らざるに、心竊に憂愁し、身後に憑頼する所る有るを願ふと同時に、己れ既に此弱點が有るので、人も亦同しかる可きとを料り、縦説横説其詭辯を弄して、茲に一神の説を稱ふるに至つたものと見ゆるので有る。波羅門教、佛教、猶太教、基督教、回々教及古昔プラトン、プロタゴラの徒より、デカルト、マルブランシ、ライブニッツの屬、皆唯一神説を皇張するに於て、基督教僧侶と其説を上下し、人をして恍然是れ恐くは推理を本とする哲學者ではなくて、妄信を基と

七 神物同體説

(三三)

する僧人なる可しと想はしむる度に至て居る。惟ふに其説、飄々然塵寰の表に抜き大に俗紛を脱した如くて有るが、實は死を畏れ生を戀ひ、未來に於て尙猶ほ獨自一己の資格を保たんと都合好き想像、即ち自己一身に局し、人類に局したる見地より起つたのである。其卑陋なのは靈魂不滅の説と全く同一て有る。唯一神説には二種有る、一は余之を名けて主宰神の説と曰ひ、一は之を名けて神物同體説と曰ふ。

(七) 神物同體説

古昔希臘の學士中、及び後世和蘭スピノザ、獨逸ヘー

ゲルの徒、皆神物同體説の一派に屬して居る。神物同體とは、世界の大理即ち神で、凡そ此森羅萬象は、皆唯一神の發現で有る、即ち吾人々類の如きも神の段片で有る、故に神は、世界萬有を統べたるもの即ち神で有る云々、但此説に在ては、唯一神とは曰ふけれど、實は殆ど無神論と異らぬので有る、何となれば此神や無爲無我で、實は唯自然の道理と云ふに過ぎないので有る、故に宗旨家及び宗旨に癡微せられたる哲學者は、神物同體説を以て邪説として痛く之を排斥して居る、夫れは其筈で有る、宗旨家の唯一神説は正さに主宰神の説で、即ち左の如くである。

(八) 主宰神の説

曰く、神は智徳圓滿豊備で、知らざる莫く、能はざる莫く、眞の獨立不倚の勢に據て、挺然此世界萬彙の表に立ち、而して此世界萬彙は其創造する所であるが故に、亦其中にも寓せざる莫く、吾人淺智の思議す可らざる靈威無限のもので有る、又曰く、神は萬物を造り、萬物を護り、特に人類を造り、之れに自由を與へて、善惡共に自己の衷情から割出して、之を行ふとを得せしめて居る、神は無始、無終、無限、無極、て世界在らざる所無く、又過去、現在、未來を一串して、

通知せざる所ろ無く、即ち神の爲めには過去も無く、未來も無く、皆現在で有る

又曰く、神は吾人々類の各個が、或は善を爲し或は惡を爲すを前知して、一箇半箇も遺漏する所ろは無い、而かも斯く吾人の所爲に放任し置くのは、乃ち吾人々類に意思の自由を附與せる所以で有て、吾人此自由有ればこそ、善を爲せば吾人の功、惡を爲せば吾人の責で、未來の大裁判に於て、或は賞を得或は罰を獲る所以で有る

又曰く、神の吾人々類を造るや、其形は自己に象りて、乃ち萬物に靈長たらしむる事と爲したのである云々、果て此言が眞ならば、神も亦横目縦鼻の一箇具體のもの

と云はねばならぬ

凡そ此等の言、宗教家の口から出れば、中以下根機の人を濟度する爲めの方便として、稍や恕す可きて有るが、一切方便を去りて唯眞理是れ視る可き哲學者にして、斯くの如き無意義非論理なる嚙語を唱へて、而して其人、實に此學に於て大家の名を擅にして居るとは、驚く可きて有る、神若し果て萬能にして、爲す可らざる無く、遂く可らざる無しとすれば、人類社會に賚ふに、善有つて惡無きを以てすれば、此世の裁判さへも不必要に歸す可きて有る、況や未來の裁判をやだ、故らに人に與ふるに自由の意思を以てして、或は惡を爲すを得せしめ、

然後未來の裁判に於て之を極罰するとは、是れ神は其心を設くるとが甚陰險と謂ふ可きて無いか。此輩又神の造物の説を唱へて居る。

(九) 造物の説

曰く、此世界の森羅萬象は、神の創造する所ろて有る、其肇め世界は實に無極て有つたが、神が其大威徳を發揮し、其大通力を播揚して、無極よりして太極を造り、茲に以て此宇宙、此世界、山河草木、人獸蟲魚より土石瓦礫に至る迄、其掌裡から捏出せられて、此整然たる萬有始て成立するを得たので有る云々

夫れ無よりして有を得る、此れ何の言ぞ、完全な腦髓を所持する者に、理解し得らる可き言て有るか、無は何處迄も無なる可き筈で有る、無が有と成るを得る程ならば、其無は眞の無では無いので、何かの種子を包容して居たものではないか、排氣鐘中の眞空を、一年の間放過したとて、何物にも變するを得可き筈は有るまい、是れ無の有と成る可らざる證據で有る、如何に萬能の神でも、悖理の事の出来可き筈は無いので有る、造物の説はミケランジ、ラファエルの屬が、其奇傑の腕前を揮霍する爲めの畫題と爲すには、極て適當では有るだらうが、冷澹平靜一も非論理の禁を犯すを容るされない哲學者

の口からして、神の造物の説を主張するとは驚く可きの極て有る

且つ神の造物の説が眞だとすれば、實に近時の學術に於て大攪亂の種子を播き來ると成る、何となれば、彼の佛蘭西ラマルクに由りて創唱せられ、英國ダーウィンに由りて集大成せられて、近代の科學に大効力を及ぼした事物進化の一説と、造物の説とは、固より兩立するを得可らざるもので有る

夫れ神萬物を造りて、大は天體より小は蟻蝶に至る迄、一定濔ゆ可らざる模型を製した以上は、甲の物は何日迄も甲の形を保ちて親子相ひ傳へ、乙丙丁皆此くの如

くて、即ち吾人の遠祖が尻尾を有したなどの説とは、相ひ容るゝとは出來無い、獼猴の或る種族が進化して人と成つたなどの論とは並ひ立つとは出來無い、古昔學術草昧の世、今時より云へは殆ど精神病者の如き人物に由りて想像せられて、一も論理に適はない造物の説と、尋常に度越して居る博學俊傑の士が、之を理に接り、之を學に質し、觀察し、經驗し、苦心慘澹の餘に得たる進化の説と、孰れを信し、孰れを非とす可きである乎、胸中些の爲めにする所ろの無い者は、此間に蹶踏すると思はれる

造物の説に又極て繆巧なのが有る

曰く、吾人途を行いて物を拾ふとせよ、竹頭木屑ならば兎も角も、苟も人巧を経たる物、譬へば各種器物で有るとか、更には又極て縝密の機械を具へてる時辰儀等であつた時には、誰れか此物を作つた者が有るだらうといふとは、不言の間に明瞭で有る、箇様の品物が、偶然獨りて出來て、遂に落て居る道理は無いから有る、然るに此世界の萬有は如何、其巧妙なると人造の器物時辰儀の比す可き所ろで無い、夫れ鳥は空中を飛行する、故に羽翮が有る、夫れ魚は深淵に潜む、故に尾鬚が有る、鶴鷺は泥澤に下りて、鱈鰻の屬を食とする、故に嘴が長い、鴨鵝は水中に住て常に游泳する、故に足に水

搔が有る、其他禽獸に就て言ふならば、之を大にして鯨の類が有る、之れを小にして蟻蝶の屬が有る、蚊の足の織いのも、神経筋肉細胞より成立して、而して細胞中には又核を具へて居る、更に人體に至りて、其精緻は又他の獸魚の比儔で無い、肺の呼吸に於ける、胃腸の消化に於ける、脾の血球に於ける、肝の膽液に於ける、腦神経の運動知覺に於ける、其他極精の顯微鏡にさへ看る可らざる神経血管の末梢細胞組織等に至て、愈々研究すれば愈々精緻なとが解る、若夫れ天體に至ては、日月星辰の大物が空中に旋廻迴轉して、各々其軌道を守つて寸毫も違は無い、或は一月一迴轉、或は一年一迴轉、或は

十年十數年一迴轉して、曾て其約を渝へるとか無い、此精微の極、廣大の極、微妙の極、雄深の極たる世界萬物人獸蟲魚の屬が、造主無くして自然に湧出したとは、受取れぬ議論で有る、護持する者無くして保たれて居るとは、承諾の出來ぬ言ひ事て有る、一箇の時辰儀すら猶且つ造主無くして獨りでは出來無い、此世界萬象が造主無しに出來たとは何の論理で有るか云々

吾人は反對に言ひたくなる、人巧に出たる器具時辰儀の類は、如何に緻密でも、之を天然物に比すれば、天然物の最も麓末なるもの、蛞蝓の如き海月の如きものに比しても、猶ほ遠く及ぶ可きて無い、況や人獸の構造組織

の如き、廣大無邊なる星象の旋廻迴轉の如き、如何なる通力有るにせよ、一箇の力で之を造つたとは、夫れこそ論理に於て受け取れぬ、自然の理に頼りて、細縊し、摩蓋し、化醇し、浸漬して出來たと云ふ方、如何程道理に近くは有るまいか

又果して此世界萬象を製造したる神が有るならば、世界の那處に居るので有るか、若又神は在らざる所無しと云へば、何日か何處かで、吾人に之れが兆朕を見はし、さうな物で有る、神の形が既に吾人々類に同しと云へば、其顔は幾何の大さで有る、其四肢は幾何の長さで有る、其胸腹は幾何の容積で有る、宗旨家は神が某處に

現はれたる事が有ると言て居るけれども是れは特に其仲間中での言のみで、固より信を置くには足らぬ」

(十) 神に遇ふ

モイズ、アローンの徒が、神に某山の巔で逢つたとか、斯々云々の垂示を授かつたとか、當時風氣未開の世に在て、且宗教上衆生濟度の方便として、斯くの如き言を爲しても、必ずしも咎む可きでは無かつたが、學術進歩した今日に在ては、設令ひ宗旨家と雖も、其荒誕無稽此度に至るを容さない、況して哲學者としては、之を主張するは勿論、之を攻撃するさへ、耻かしさに堪へぬ程で

有る

且つ日用器具時辰儀の類も、人巧を経なければ自然に出来可きもので無い、況して世界萬彙が自然に出来可き筈が無い、必ず造化主宰の手に出来たに違ひ無いとは、是れ正に余が前に論じた如く、人類社會に局しての言語で有る、目を世界の上に放ち、心を塵寰の表に遊ばしての言論では無い、成程時辰儀は人巧に成れるに違ひ無い、併し之れが財料たる金屬寶石の類は、元より存在して居たもので有る、即ち時辰儀工は是等財料を聚めて、時辰儀と號する一箇の形を與へたるに過ぎないので有る、文字の眞の意味に於ての造では無い

て躊躇せぬで有らうと思はれる

神の造物の業に於けるのは此れと異なる、従前有つた所の財料を聚めて、世界萬彙を製出したのでは無く、全く無よりして有、即ち真空の中に此森然たる世界萬彙を造つたもので、夫れかとすれば、又物は造らねば自然には出来ぬと云ふて、無よりして有なると、有の中で唯場所を換ゆるの混同して居る、余は繰返して云ふ、此廣大無邊の世界、此森然たる萬物が、一個の勢力に由りて一々に造り出されたと云ふよりは、従前他の形體を有せしものが、自然に化醇して、此萬彙に變し來つて、乃ち自然に出来たと云ふこそ、更に數層哲學的で有る、完全なる判斷力を有するものは、此二説の間に、決し

第二章 再論

以上論ずる所に依りて、更に積極に立論すれば、精神は不滅のもので無い、精神の本體源頭たる軀體こそ、若干元素の抱合になれるもので、設令ひ解離しても不滅て有る

即ち拿破崙豊太閣の死するや、其體軀を構成した元素の中で、其氣體のものは、或は空中を飛翔する禽獸に吸收せられたかも知れない、其固體のものは地中の水に溶解せられ、胡羅大根に攝取せられて、誰人かの腹中に入つたかも知れないので有る、併し斯て輾轉して居所

を變しつゝ有ても、微塵も無くなる筈は無い、故に人死すれば従前有つた所ろの五尺の軀は解離して、散りちり破落く、に成て、各元素皆不滅て有る、故に人一旦死すれば、天道の望む可きも無く、地獄の畏る可きも無く、且又二度再び人體を受けて、此世に生れ出る筈は無い、此世に於ける吾人の二代は即ち兒子て有る

神は多數にもせよ、唯一にもせよ、始めより有る可き筈で無い、此世界萬彙は無始無終で現世の狀を爲す前には、何の狀を爲せしかは知れないけれども、兎も角も何等かの狀を爲して居たものが、網縕浸化して現狀を爲し來りたるに違ひ無い、神抔と云ふ怪しき物體の干涉

を蒙らすとも、元素離合の作用で、甲より變して乙に之
き、丙丁と變化して窮已なく、以て此世界の歴史を成
して居る、

(一) 世界

前章では宗旨家及び虚靈派哲學者の説を駁して、反對
に靈魂の死滅と肉體の不滅、並に神の有るべき筈は無
いといふとを論道したが、本章に於ては、更に又世の所
謂現實派哲學なる者を駁せねばならぬ

此一派の哲學は、佛國サーンシモンより濫觴し、オーギ
ュストコント之を唱道し、従前虚靈派の説を駁倒し、一

切幽怪詭幻なる想像に假借せずして、凡そ唱ふる所
は、一々實驗を以て之を確めんとするのが、此派の特色
で有る、又各種科學、殊に理化、數、天文、生理、社會の六つの
者を以て重なる學科と爲して、之れが刈獲したものを
綜合して、即ち其所謂現實派哲學を組織するのが、此派
の特色で有る、故に此一派に屬する者は、皆宏覽博物の
學士で有つて、専ら詩韻的想像力を資實とする虚靈派
人士とは、大に選を異にして居る、即ちリットレーの如
き、此派に浸淫した人で、博識匹儔無しと稱せられ、此派
諸説を傳ふるに於て、尤も力が有つたと稱せられて居
る

斯く論ずる時は、此一派は極て確實據る可きが如くに見えるが、其現實に拘泥するの餘り、咬然明白なる道理も、苟も實驗に徴し得ない者は、皆抹殺して、自ら狹隘にし、自ら固陋に陥りて、其弊や大に吾人の精神の能を誣いて、之が聲價を減するに至るので有る。是れ正に此派に於て放過す可らざる缺失て有る。

此輩輒ち曰ふ、世界は無限て有る乎、世界は如何なる原因て出來て、如何なる原因て終る可き乎は、是れ吾人の容喙す可き所ろて無い、千數太陽が旋廻する太虚の一隅に屏息する此太陽系の、其又一小球の住民たる吾人々類が此くの如き間に遇ふて、如何の答を與ふ可き乎、

若し漫然之れが答を與ふれば、僭に非されは妄て有る。我現實派哲學の本旨に背反するので有る云々、其意蓋し此等の事は、彼の理化、數、天文、生理、社會の六科に由りて檢證し得ないが爲めに到底確實の答を爲す可きに非ずとの考て有る。

惟ふに今日世の中の事、必ず目視て耳聽き科學檢證を経たるものゝみ確實で、餘は悉く不確實だと云はゞ道理の半以上は抹殺せねばならぬと成り、極て偏狹固陋の境に自畫せねばならぬと成る。且つ日常の事、必ず有り得可きもの、又は必ず有る可らざるものは、皆直ちに人言を信して、必しも檢證を施さないで、夫て已れ

も許し人も許して、而して眞に確實で動す可らざるものが幾何も有る、且つ縦令ひ科學の檢證を経ずとも、道理上必ず有る可き、又有る可からざる事も、幾何も有る、即ち世界が無限で有ると云ふ事の如き、設令ひ科學の檢證が無くとも、限極が有ると云へば、大變大怪大幻詭で有ると謂はねばならぬ、世界とは唯一の物で、凡そ容れざる所ろ無いもので、有も容る可く、無も容る可く、空氣も容れ、依天兒も容れ、太陽系天體も容れ、千數太陽系の天體も容れ、若し此系の外真空界なりとせば、此真空界をも容れて居る筈で有る、此くの如きものに限極の有る道理が無い、若し限極有りとの科學の檢證が有つ

ても信ず可らずでは無いか、何ぞ現實派の想像に怯懦なる哉と謂はねばならぬ、且つ現實派が、凡そ科學中最も確實と稱す可き算數に就て言ふなら、物の數若し限り有り、即ち十億百億十兆百兆と云へるが如く限り有りと曰はゞ、現實派は之を信せんとするので有る乎、若し世界森然元素を以て充たさるゝに於て、之れが原子の數は無限に非ずとするを得る乎、限り無きこそ當然では無い乎、又此無限無極の世界が何等かの原因有りて、無中に有とせられて即ち創造せられて出來たと云はゞ、縦令千百科學の檢證有ても信ず可きて無い、吾人が屢々論し

た如く、無よりして有とは道理に於て有る可きでは無い、故に世界が今日の状を爲す前には、何の状を爲したかは知れないが、兎に角、何等かの状を爲して居たには相違無い、畢竟創造せられたるものでは無く、固より無始のもので無ければならぬ

又此世界が何等かの原因有りて終る可きもの、即ち有より無に入る可ものと云へば、是れ又道理上有り得可らざる事である、何となれば、實質が如何にするも消滅すべき道理が無い、場所を替へ、形を易ゆるとは有つても、純然消えて無となる道理が無い、此道理は決して吾人々類中の道理で無く、十八里の霧圍氣中の道理でも

無く、直に世界の道理である、何ぞ現實派の推理に怯懦なる哉と謂はねばならぬ、世界の無限、無始、無終なる可きは、猶ほ此先に於て論述するて有らう

世界は此くの如く廣大無邊でも、萬有は此くの如く蕃庶でも、其形状此くの如く萬殊である、若干元素の抱合によりて或れるもので有る、所謂元素は其數六十餘である、學術更に進みたる上は、或は増して七十、八十、百數と成るかも知れぬ、又減して五十、三十と成るかも知れぬ、要するに、若干數の元素が或る割合に相聚りては、甲の形色を爲し、相離れて他の割合に再び相聚りては、乙の形色を成し、此くの如くに萬物變化し進化し將ち

行くので有る、故に今の太陽や地球や、億萬斯年の後一旦解離するやも知れないので有る、併し解離したとて毫末も消滅するのでは無く、必ず又何處かに何種類かの物體を形成してゐるに違ひ無い、故に云ふ實質は都て不滅で有ると

斯くの如く、元素相抱合して人獸草木茲に形ちされ、太陽系天體茲に形されて居る、即ち周圍何千里何萬里と云ふ宏大なる星宿も、馬糞の一片も、同じく若干元素が相抱合して形されて居る、若し太陽系天體以上、更に此天體を一部分として他に幾多の部分を併せて包容せる一系の天體有りとせば、其天體中のものも、矢張り元

素の抱合物で無ければならぬ、要するに此無始無終無邊無極の世界は、畢竟有數元素の抱合に外ならぬので有る、而して地球十八里の霧圍氣中に蠢動して居る人類も此大理を免がる、譯には往かぬので有る、彼れ獨り勝手に不朽不滅の靈魂、虚靈真空の精神、軀殼の中に居て軀殼を支配し、軀殼死すれば獨存して記憶を存する精魂を有するてふ、不論理非哲理は、決して容るされぬので有る

(二) 無始

(一六) 世界萬有既に無始で有る以上は、造と云ふ事は無い筈

て有る、何となれば甲の形の前には、必ず何等かの形で存して居たもので有れば、別に新に造る必要は無いので有る、自然に摩蓋化醇して他の形に轉する以上は、何を苦しんで他の形を造るとを爲さんやて有る、吾人死して形軀解離するが故に、精神獨り存して生前の記憶を保つ様致し度いと云ふ乎、其れは都合は好いかは知らねど、眞面目には言へぬ不道理で有る、且此希望と云ひ、都合と云ひ、吾人五尺の身に執着しての言ひ事て有ると云ふとは、吳々も記憶して居て貰いたい

無始とは何て有るか、凡そ物は大小を問はず、皆無始で無ければならぬ筈だ、何故かと云へば、始とは此人界の

語で、他に在つたものが目前に来るのか、他の形のものが目前の形に變じたのか、即ち蛾が卵を生し卵が蠶を生する如く、一の形から他の形に變しても、吾人の淺智で斯る成行に氣附かずして丸で無かつたものが出来たかの如く思ふよりして始と云ふ語が意義を見はして來るので有る、其實凡そ何物も、無よりして有なる道理は無く、研究を加ふれば必ず卵の蛾に於ける、蠶の卵に於けるが如くて有る、だから始と云ふ語は、眞の意義即ち哲學的の意義は無いので有る

翻て人寰中の事物に就て言へば、始て何々した、始て爾々した、始て來た、始て去たの如く、立派に意義を有して

居ても、苟も實質即ち元素の抱合に成るものに關して、形色ばかりで無く、本質にも始が有ると思ふと大謬で有る。夫れでは眞空より何かが出来て、排氣鐘中より駒が飛出すと云ふが如き荒誕無稽の言と成り了はるの
で有る

(三) 無終

然れば世界萬有が無始で有るのは當然明白の事である。若し始が有たら大變で、意義も無き非論理と成る。又此世界萬有は無終で無ければならぬので有る。有が無になる道理は無い

凡そ「無」と云ふ語は人寰中の語で、目前に見え無くなつた時に遣ふ語で有る。「金が無くなつた」「米が無くなつた」是れ俗用の語としては意味が有るが、哲學的では意味はない。金が無くなりはいしない、己れの手より他人の手に移つたので有る。米が無くなりはいしない、己れの腹中に入りて滋養分と糞尿とに變したので有る。此くの如き譯合ひで、世界の大は愚るか、塵一つも無くなるものには無い。即ち終の有る可き筈で無い。若し一物でも無よりして有で、即ち始めが有つて其有が、又無に成りて即ち終が有ると云ふと大變な事で、非論理、非哲理、泡沫、幻影、前後矛盾、自家撞着、大混雜、大混亂と成り

了はるので有る

(四) 無邊無限

扱て又世界は前に現實派を駁した時に論した如く、無邊無限で有る

是れは左う無くしてはならぬ、此世界は包容せざる莫きもので、若し千里、萬里、億里、百億里で、世界の邊極が有て、其外は眞空で有ると云へば、眞空も亦世界の領分て有るか故に、終に邊極の有る筈は無い、地球とか太陽とか、太陽系天體とかは、洵に限極有るであらうが、世界は限極有る可きて無い、且又今日迄の學術で眞空と云ふも

のも、實は極微至么の氣體の一團で、眞の無では無いかも知れぬ、今日迄の學術で一切萬事を解決せんと欲するは、僭妄と云はねばならぬ
以上論する所に由れば、世界は無始無終で有る、即ち悠久の大有で有る、又無邊無極で有る、即ち博廣の大有で有る、而して其本質は若干數の元素で有て、此元素は永久游離し、抱合し、解散し、又游離し、抱合し、解散し、此くの如くして一毫も減ずる無く、増す無く、即ち不生不滅で有る、草木人獸皆是物の抱合に生じ、解散に死するのて有る

(五) 精神の能

夫れ世界萬有は、無始無終て有て、創造するの必要は無
いから、神を影撰するの必要も無い、即ち神は絶対に無
いので有る、而して精神は如何で有るか
余は云ふ、不滅としての精神は無いので有る、併し軀體
の働らき即ち作用たる精神は、軀體の解離せざる間は
立派に存在して、常に光を發して居る、是れ當然の譯で、
抑々吾人の身が生きて居る消息を示すは、何に由て々
有るかと云へば、其働らき即ち精神の發揮に由て々有
る、目は視、耳は聽き、鼻は嗅き、口は味ひ、手足皮膚は捕捉

し、行歩し、觸接し、又感覺し、思考し、斷行し、想像し、記憶す
る等、皆精神の發揮で有る、炭より發せる燄と一般で有
る、薪より生ずる火と同様で有る
抑々炭は小塊の聚りに過ぎないが、是より發する燄は
或は天を焦がすに至る、薪は山木の斷片に過ぎないが、
是より生ずる火は或は一都を燒燼するに至る、精神の
軀體に於けるも亦此くの如くて有る、彼の推理の力
を看よ、此理より彼理に赴き、層累して上りて乃ち十八
里の霧圍氣を透過して、隻に太陽系天體の外にも馳騁
するでは無いか、想像の一能を看よ、其働らきは更に自
由自在で、或は天上に城市を建立し、海底に樓閣を幻出

し、虎に翼を傳け、狐を馬に乗せ、劍山を峙だて、血海を湛へ何を爲して成らざる無く、何を欲して得ざる莫く、而して是れ皆五尺の小軀體から發する作用に外ならぬのである

記憶の能を看よ、三四歳の幼時に見聞した事物より、六十七十の高齡に至る迄、凡そ其經過せし事の意象は、一々蓄へて逸しないて時に應じて引出さるゝて無いか、又一時我記憶より逸去したものが、思考の末再び浮出さるゝ、杯は隨分奇な事では無いか、啻此れのみでなく、吾人の智識の進歩し行くは記憶の能が有て、凡そ經驗して得る毎に、腦中の倉庫に仕舞ひ込みて失はない、以

て温故知新の財料と爲すからて有る、即ち人の賢愚の別は、其大部分に於て記性の強弱に關係して居る、其他感情や、感覺や、斷行や、皆精神の發揮の種類で有る、夫れ若干元素の抱合より成れる五尺の軀から、此くの如く燦爛たる金碧の光彩が放たれて居るので、味者は此光彩を認めて本體と爲し、主人と爲して、五尺軀を以て奴隸と爲して、彼の虚靈説の囁語が出來たので有る、夜光珠の光が餘り美麗なるが故に、珠よりも光が貴はれて、光てふものが、珠を離れて別に存在して居ると思ふたのも、稍や無理も無いと云ふても良い、此くの如く精神即ち軀體の作用は、軀體より發しなが

ら、之れが本體たる軀體の中に居ないで十八里の霧圍氣を透過し、太陽系の天體を透過し、直ちに世界の全幅を迄領略するの能が有る、即ち吾人が宗旨家の卑陋の見を打破して、世界の大理を捕捉せんと擬するは、正に精神に此振拔挺騰の能力が有るから出来るのである、是に於て乎、又古今哲學家の極て思を覃し慮を勞する事項が有る、以下順次に論ずるて有らう

(六) 空間

前に略ぼ一二言して置た空間と時との二意象で有る空間とは、文字の指示せる如く、目前實物の占取し居る

場所、即ち一枝の筆あれば其筆が容れられて居る場所等より、廣漠たる太虚を并せて、凡そ大小實物の容れられつゝ有り、又容れられ得可き虚隙を合しての總稱で有る

道近きに在り之を遠きに求むて、古來達識の哲學者が此空間てふ一事に就て、嗷々聚訟して居るけれど、吾人を以て之を觀れば、誠に見易き事である、抑々空間なるものは、世界の容器と言へば、一番早分りて有る、萬物苟も有れば場所を塞けつゝ有るに極て居る、而して此等場所の總べてを指して空間と云ふ以上は、是れ空間は正に世界と一を爲して居る、即ち空間も無邊無限で有

空
間
の
有
り
無
き
事

續 一 年 有 半 (四七)

て、パスカルの言つた如く、到る處眞中で縁の無き圓球である
或る者は云ふ、空間とは眞に其物の有るのでは無く、特に吾人の精神が、此物有るが如くに想像して、萬事を理會すると成て居ると、是れ何たる言ぞ、世界萬物なるものは眞に之れ有るに違ひ無ひ、よも空華幻影とは言はれまい、苟も世界萬物有る以上は、或る場所を塞いで居るに違ひ無い、即其場所は空間で有るとすれば、吾人の精神を離れて、別に所謂空間なるものが存在して居るとは、言ふ迄も無い、然るを此くの如く論道するとき、其弊や竟に醫す可らざる懷疑の一派に陥いるとを

七 時 (五七)

免れない
又空間は紙に譬へても良い、而して萬物は繪に比しても良い、空間なる紙の上に、寸隙も無く描かれて有る繪が、即ち萬有の森然たるもので有る、假に此世界に人類無しとしても、苟も他物有る以上は、空間の無き譯には往かぬ、且つ假令世界茫々無一物でも、空間の無き譯には矢張り往かぬ、物有ると物無きとに管せず、物の容れられ得可き場所の總てを空間と號する以上は、到底如何に想像するも此物無き譯には往かぬ

(七) 時

又時と云ふ問題が有る、是れ又空間と同じく、古來聚訟の
一問題で有て、矢張吾人の精神にのみ存するもので、
眞に其物が有るのでは無いと云ふ哲學者が有る、此れ
又懷疑の一派に陥いる恐れが有る
苟も物が有れば、其物が経過する時間が有る、縱令其
物は不滅にして窮已無しとしても、甲の形を保つ時間
が有り、又乙の形を保つ時間が有る、山の芋の時間も有
れば、鰻の時間も有ると云ふ勘定だ、即ち時とは萬物を
載せて、此刻限より彼の刻限に運ひ行く車の如きもの
で有る

此れに由て言へば、空間は世界の大きいさを意味して居

り、時は世界の久しさを意味して居る
夫れ空間なり、時なり、或る哲學者は、眞に其物が有るの
ては無く、特に吾人の精神が之れ有りとして、事物を了
解する根本的條件となして居るのだ、と云ふかと思へ
ば、又他の哲學者は、空間の意象や、時の意象や、吾人の生
れざる以前より傳はり來つたもので、所謂生知の意象
で有る、人より告知せられて始て得たる意象では無い、
而して此意象こそ、唯一神が吾人の精神に對して其兆
朕を見はして居るのだと云ふ、乃ち空間と時とを以て、
神の一資格と爲して居る、奇怪の極と謂ふ可きでは無
いか

大凡そ生知の意象と云ふ可きは、一も無い筈で有る、人生れて後、日々種々の事物を視聽し、嗅味し、接觸して、各種物體の意象自然に發生して深く記憶に入るるので有る、生れながらにして、即ち未だ外物に接せず居て、一の意象も生ず可き筈が無い、且つ空間と云ひ、時と云ひ、少數なる哲學者にして始て理會す可き、否な哲學者の講釋を聽きて理會す可きもので、兒童や田舎人の徒は、始より此意象は所持して居ない、然るを生知の意象とは、何に縁りて言ふので有るか、是れ皆荒誕無稽の甚しいので有る、而して斯く謬戾を致すに就ては、又主觀客觀の論が聚訟して居る

(八) 主觀

主觀とは、吾人が事物に對して、視聽し若くは思考判斷するに於て、其事物が眞に外間に存在するので無く、唯此觀念の主たる吾人の精神の構造、自ら之れ有り、と認むるやうに爲され居るが故に、斯くは存在するかの如く思惟すると云ふ説で有る、即ち或る論者の意に於て、空間、時の二者は正に主觀的で有る、即ち實際に存在するのでは無いので有る

(九) 客觀

客觀とは、外間現に其物が有て、其影象を吾人の精神に寫し來るので有る、吾人の空間、時の二者に於ける、正に客觀的で有る、即ち此二者儼然存在して居るとの説て有る。

併し彼れ奇を鬪し新を標する哲學の大家先生連に在ては、主觀客觀の別は、却々箇様の無造作を譯ては無い、嗷然聚訟して底止する所を知らない、乃ち正に所謂道近に在り之を遠きに求むるので、吾人は箇様の物數奇を爲す必要は無い。

吾人を以て之を言へば、凡そ意象の過半、否な殆と全數は、皆客觀的で、而して又主觀的で有る、若夫れ純然たる

主觀的は、病狂者の目に幻出する種々の浮動物、及ひ宗教家の所謂獨立不滅の靈魂等の如く、實際其物無くして、唯或る者の精神にのみ影出せらるゝものを謂ふので有る、純然たる客觀的とも云ふ可きは、外間實に其物有て、而して吾人の精神未だ之を省知し得ないものを謂ふ可きで有る、惟ふに此くの如き者、果して實際有るであらうか、例へば光温電の分子の如きは、此中に入れても良いので有る、其他は客觀主觀相映して兩鏡の如くにして、始て學術の強固なるを得可きで有る。

主觀的の説を主張するのが甚しくて、終に天下過半の事物、否殆と全數を擧げて、客觀的には存じない、唯主

觀的にのみ存するとする者、即ち所謂懷疑派で有る、其最も極端に騁せたのは、ヒロニズム派で有る、都て哲學者の多くは、天姿高邁で奇を好むより、従前の途轍に循ふのを屑しとしない、異を立て新を銜はんとして思索を凝らし、遂に目前無造作の事物でも、非常に奇怪視して、所謂謬巧錯雜の言を爲し、自分も知らず識らずの際、邪路に陥りて自ら出ると出来なくなるのが往々て有る、吾人は務て此弊を去らうと欲するので、古人の聚訟した事條に就ても、唯務めて當面明白の道理を發して、絶て新奇を銜はぬので有る、又時として吾人一箇の解釋を與へて、前人の轍を踏まぬとも有る

(十) (再ひ)主觀客觀

繰返して言ふ、世の中に純然主觀的のものも實に寡い、純然客觀的のものも實に寡い、萬物皆客主相映して、兩鏡の纖翳無きが如くて有る

釋迦老子も、初年の間は、専ら天下人心の妄念妄想を一洗し、根本的に其自説を蒔き付けやうとして、諸行無常とか、唯此一事實餘二即非眞とか、都て世界萬物を一無に歸せしめて、唯心のみを有とした様だが、是も實は矢張方便で有つた、而して其最後の考は、遂に萬物と我れと、共に是か世界大經濟中の具と爲したる如くに見ゆ

る、故に此點より云へば、釋迦も頻りに主觀説を主張した後、客觀説を取りて、兩造相調和せしめて、始て眞乘門を打出したと言ても良し

耶蘇は此邊の事には何も言て居ない様だ、夫も其筈、耶蘇は一無害の長者、一多情多血の狂信者で、瞿曇氏の様な博學の哲學者では無かつたので有る、ルナンの耶蘇の傳は眞を得たものだらうと思ふが、一の極て無邪氣の、極て感情に富だ人物、云はゞ男性のジャンヌダルクとも見る可きて有ると言て居る、此くの如き人物に、主觀の客觀のと、八釜敷議論は固より待つ可きて無い

(十一) 意象

夫から諸種の意象で有るが、草木禽獸と云へる如き一切吾人の五官に觸る可きものは、其記憶に上りて意象と爲るには、固より五官を経て來るに相違ない、是れは議論も何も無い、唯正不正とか、義不義とか、仁とか善とか、諸種無形の意象に關しては、例の宗旨家及び宗旨混同の哲學家は、皆五官を排斥して、乃ち五官の捕捉に繋るが如き人寰臭き意象とは違ひ、人生先天的の意象で有る、神が吾人の精神に印して有ると云ふ鹽梅に、勿體らしく論して居る、而して最後に神と云へる意象の如

きは、凡そ意象中の最も高尚なるもので、到底物の一性を感じずるに止まりたる、汚れたる血肉に成れる五官の如きもの、關與す可きて無く、吾人々類が生れながら有して居る意象で有る云々

斯く論じて、其意には挺然高く人間塵埃の表に出て、一切土臭き臭氣を擺脫したる考へて有るが、何ぞ知らん、是れ正に其極て尊尙する所ろの神に附與するに、人間の情欲を以てするもので、前後矛盾自家撞着の爲たるを暴露して居るのだ、第一血肉が汚らわしいの、無形の物が高尚なの、塵埃の、土臭のと、是れ正に吾人々類中の言事で有る、否な吾人々類中でも、不學無術なる人

物中での言事で有る、試に理化學の目から見よ、血でも膿でも、尿でも、尿でも、七色燦然たる寶玉錦繡と、何處に美惡の別が有る、小野の小町と狒々猿と、那邊に奸醜の差が有る、憐む可し公等の精神は、半ば腐壞した軀體より噴出する所の燐火で、正に臭氣紛々として居るのだ、此れは是れ清淨なる神火で無く、腌臢極まる欲火で有る、共に意象の事を語るに足らぬが故に、謹て下文に垂示するのを聽け

(十二) 無形の意象

吾人幼時から見物する所ろの物、例へば馬牛犬豕の如

き、皆一の繪畫と成て、記性中に印せられて居る、即ち生れて未だ繪を學んだとのない者でも、一たび瞑目して馬の事を思ふ乎、犬の事を思ふ乎、何日か見た所の馬犬の影象が儼然として意念中に現出すること、極て巧みな畫工の描ける繪と異ならぬ、又書を読み字を識る者は、或は繪で無く字で現出する、又抽象的に馬又は犬の事が浮出する、是れが所謂意象で有る、是等は勿論五官に接觸する實物だから論は無いが、扱て正、不正、義不義、美不美等の所謂無形の意象でも、其實矢張五官を経由して出來て居る、五官に關せぬ杯と云ふのは、膚淺極まる言事で有る

蓋し凡そ意象と云ひ、影象と云ひ、皆三五歳の幼時より、漸次に記性中に印せられて居るもので有る、彼れ幼童が怒て他の童を撻つとか、兩親の命に背きて何か曲事を爲すとか、いづれ繪に寫され可き、形を圖せられ可き、具體的の行事よりして、正不正の意象が源頭し來るの、有る、觀劇の際、由良之助の城渡を見て、具體的に義の意象を生し、小野の小町が美の意象のモデルと成り、累ねの顔が醜の意象のモデルと成る等、兎に角、即時事に遇ひ、物に接し、具體的に、即ち影象的に、繪圖的に、記性中に捺印して、其後は實物を離れて直に記性中の影象と交渉するに至りて、純然たる無形の意象を成すの

でも、其源頭は茲に述る如く、必ず五官を經由して來たのに相違無いので有る

(十三) 神の意象

特に神の意象の如き、幼時兩親の語話を聴き、是れ極めて慈善なる溫和なる、愛らしき顔の、色の白き面の、豊下で福々しい、鬚髯雪の如き、常に莞爾として咲みつゝ有る、老後旅行中の水戸西山公にも似たらんかと思ふ老人を想像して、其具體的繪畫が、稚弱なる記性中に深く滲入して、抜く可らずなりたるもので有る、勿論歐米の兒童には、水戸西山公では無く、又他に適當なる夫れ々々

のモテールが有て出來たとは云ふ迄も無い、此くの如く、味者が全然實質と關係なきかの如く思惟して居る無形の意象も、其源頭に溯りて考索すれば、必ず具體的のものより生じ、實質より成り來れるものたるは無論で有る

更に助語の辭即ち「直ちに」「即ち」「速に」「徐々に」「より多く」「より少く」「責めては」「成る可く」等の如きは、實物と何の交渉も無いやうだが、是れ又大に然らずで有る幼時母親に何か求むる所るても有れば、母が「直ちに云々せん」とか「速に斯々せん」とか言ふのを聴きて、當時乞ひ求めた蜜柑とか林檎とかを、此等助語と牽聯して、即ち蜜柑

林檎の影象を假り來て、直ちに「速に」等の意象を記性中に入れたので、「徐ろに」より多く、「より少く」等の助語でも、皆此例で有る、然らずして若し宗旨家言ふ所ろの如くに諸無形の意象が先天的で有て、五官の經由を藉らず、渾然意念中に全成して欠くる所ろが無いとすれば、兒童は皆信者なる可きに、皆正義者なる可きに、左は無くて日々驕痴の態を現出して、兩親を苦しめ、又助語の辭等に至ては、時々大に誤用して、一座團樂の長年をして哄笑せしむる愛嬌が有るではないか

元來吾人が其軀體の作用たる精神を、體外に發出するは何如して有る、取も直さず五官と號する窓を経て

發出するでは無いか、若し目が無れば、何に由りて色彩に關する影象を得やう、耳が無れば、何に由りて音韻に關する影象を得やう、臭香の影象、旨味の影象、堅脆、寒熱等膚肌に關する影象、皆此窓より惹き入るゝので有る、吾人若し假りに隕然たる渾沌的肉塊で有たならば、何の影象も得るに由無くて、乃ち吾人の記性は、常に楞然として無一物で有らう、海に浮ぶ海月と一般だらう、何の先天的の意象も有るべき道理はない

フラトンは、實質を不完全とし、意象を完全とし、意象なるものは吾人前世に在つた時、即ち未だ罪を獲て娑婆に謫せられざる前、即ち常に神の膝下に侍して、完美豊

粹の物のみ見聞した時の遺物として、今猶ほ之を有して居るので、即ち意象なるものは、此世の實物を形寫するのではなくて、前世の完美豊粹の物を影寫して出來たので有ると言つた、而して世の哲學者皆プラトンを以て病狂者と爲さずして、高遠無比の大哲學者と爲して之を崇拜するとは、寧ろ笑止の極ではないか。以上論ずる所に由れば、意象の系圖知る可きて有る、實物に關するものは無論のと、即ち無形で殊に實物とは何の交渉も無きかの如く思はれるものでも、其始めは必ず五官の窓から吾人の精神を誘發し感興し來る所の外物が、先づ之れが模型と成り、牽聯し、變化し、綱縊

し、化醇して影象と成り、記性中で若干時月を経る中に、又變して純然抽象的と成りて、茲に以て意象を作成するので有る、然れば、意象の作成には記性最も與りて力有りと云はねばならぬ。

(十四) 記憶

記性又は記憶は、精神の一方面で、總て五官の窓から入り來る外物の繪畫、即ち影象を蓄へて、之を消化し、之を咀嚼し、之を整列し、新舊を別ち、各々歲月日時を附して、他日の用に備ふる能力で有る、記性の強弱は或點迄は吾人々類賢愚の別を爲す材料の重なるものと成て居

る、彼れ白痴者病狂者は、多くは記性の完全ならざる徴候を見はして居る、ハツクスレー、リットレーの屬が其記性中に蓄藏した意象の數は、凡そ幾何千萬億で有たらう、而して田舎の翁媪の如きは、其有する所の影象たる、米麥其他の物類に過ぎないので有る、其優劣果して如何で有る、記性中の意象の多少は、恰も商家庫中品物の多少もて貧富を別つと一般で有る

記性は又夢と密接の關係を有して居る、夢なるものは、記性中に有る意象を引出して、現に其意象の源頭たる實物に接するが如く自信するので有る、即ち死だ父母又は友人に係る影象を引來つて、其夢の間は、恰も直ち

に其生時に父母に逢ひ友人に逢ふが如くに信して、決して死人として之を遇せぬのが例で有る

又腦神經強健の時は、多くは遠い過去の事、即ち幼時の事を夢みるので、日間遭遇した所の事柄は、殊に之れが誘因と爲るに過ぎないので有る、乃ち場所の如きても、多くは童子の時釣遊した處とか、幼時居住した家とかを夢みるとが多く有る、之れに反して腦神經の疲勞した時は、直ちに近事の事を近事として夢みるので有る、是れは神經過敏になつて日常遭遇する所の事物でも、深く神經を動かして、茲に至ると見ゆるので有る

(十五) 意象の聯接

又意象の聯接なる者が有る、乃ち甲の意象が乙の意象を牽引し、丙に丁に波及するので有る。夢中で見る所ろは、此意象の聯接に由るとが多いので、即ち遽に考へれば、極て緣由の無いやうな意象でも、其同時に記性中に入るとか、相繼で入るとか、必ず幾分の因縁が有つたが爲めに、記性中に相並ひて蓄藏せられて居たのが、其夢に由りて、又は思考に由りて、惹出される時に、牽聯して出て來るので有る。彼の狂病者が甲の事を呶々するかと思へば、又乙の事を呶々して、其間少

も緣故が無いやうでは有るが、彼れ病者自身に在ては、恐くば此意象の聯接に由りて、斯く夫れから夫れと移り往くのであらう。狂疾を専門とする醫人は、宜く深く研究す可きである。又記憶は、意象の聯接に由りて成立ちて居ると云ふても可いやうで有る。幼時書を讀みて記憶に存せんとする時に音訓の似たもの又は形質の類したものを切掛けとして、記憶を助けるとが有る。是れ正に意象聯接の理に藉るので有る。推理の事、想像の事は、前に已に叙述したので、最早茲に言ふの必要は無い。

(十六) 斷行、行爲の理由、意思の自由

又斷行の一事に就て、古來相應に議論が有つて、是れに由りて、行爲の理由と、意思の自由との二項目が出来て、隨分爭論の種となつて居る。行爲の理由とは、吾人が何か爲さんとするの場合には、必ず一定の目的が有る、此目的が乃ち云々せしめ又は斯々せしめるので、是れ正に行爲の理由で有る、而して此行爲の理由即ち目的が唯一箇で有ば夫れ迄だが、二箇以上で有る時には、我精神は果て自身に撰擇して其一を取り、少も目的から制せらるゝとは無いので有る。

か、即ち我精神には所謂自由の意思が有るか、又左は無くて、目的一箇なる時に論なく二箇以上が前に臨來つた時に於て、我精神は其一を擇ぶやうでも、實は其中の尤も我精神を誘ふ力の有るものが、他の一を排斥して己れを擇はしたので有るか、即ち吾人が自ら擇んだのではなくて、目的の誘動力が吾人をして擇はしめたので有るか、之を要するに、行爲の理由が實に全權を有して居て、意思の自由は名のみで有るか、又將た意思の自由は眞に存在して、目的は吾人の撰擇に任されつゝ有るか、此れ實に大困難事で有る。古來宗旨家、及び宗旨に魅せられたる哲學家は、皆意思

の自由を以て完全のものとなして居る、而して吾人の行爲を出すには、其目的とす可き所るものが、二箇三箇前に臨んでも、吾人は自由自在に其一を擇ひて、少も之が制を受けない、是れ正に自由の尙ふ可き所るて有る若し左はなくて吾人が常に目的即ち行爲の理由の爲めに誘はれて、夫れに由りて斷行するとした時は、善を爲しても必ずしも賞す可きでない、惡を爲しても必ずしも罰す可きでない、宛然磁石と鐵との如く、思ふに任せぬ事と言はねば成らぬ、吾人の精神は決して斯かる薄弱なものでは無いと言て居る

是れ一應尤もて有る、吾人の行爲が一々目的に誘致せ

られて、自然に云々し、自然に斯々するとした時には、吾人の精神は、恰も風に従ふ柳の如くて、極めて價値の無いものゝ様に思はれる、けれども深く事項を研究したならば、奈何せん、實際意思の自由といふものは極めて薄弱なるもので有る

近く譬を取れば、爰に酒一樽と、牡丹餅一碟とが有るとせよ、上戸は必ず酒樽を取るて有らう、下戸は必ず牡丹餅を取るて有らう、若し左はなくて、其上戸が故らに意表に出て、牡丹餅を取たとすれば、是れは必ず一座の様子を見て斯くしたもので、矢張自己以外に行爲の理由が有て、純然意思の自由から割出したのでは無いの

てある、若し又上戸が、他に爲めにする所も無いのに、自分の意思から平生に反して牡丹餅を取たとすれば、是れ意思の自由とは、意味の無い事に成らねばならぬ。又道德に涉る目的が二箇有つて、前に臨み來つたとせよ、即ち其一は明に正で、其一是明に不正で、其中の一に決すれば法律若くは道德の罪人に成ると云ふが如き場合では、ソクラットや孔丘は直ちに其正なる者に決するて有らう、盜賊や五右衛門は直ちに其不正なる者に決するて有らう、啻に此れのみでない、ソクラットや孔丘は假令ひ洒落に物數奇に、一たび故らに其不正なる者を取らうとしても、必ず自ら忍ぶとが出来ないで、必ず

竟に其正なる者を取るに相違無い、是れは即ちソクラット、孔丘、盜賊、五右衛門の意思に自由は無い證據で有る。然ればソクラットや孔丘は鐵に惹かれる磁石の如きもので、別に聖人とか賢人とか稱讚す可きで無いのであるか、盜賊、五右衛門も同く鐵に惹かるゝ磁石で有て、是れ又憎む可きでは無いので有るか、否々々、彼等は彼等の素行に於て、正に褒す可きと貶す可きとの別が有る、彼等の平生慎獨の工夫の有無に於て、正に賞す可きと罰す可きとの別が有る、ソクラット、孔丘は、平生身を修め行を礪くの功で、竟に善に非れば爲さんと欲するも爲すに忍びざる迄に、良習慣を作り來つて居る處が、是れ

正に貴尚す可きて有る、之に反して盜蹠五右衛門は、悪事を好むと食色の如き平生の悪習慣が、正に憎む可きて有る、故に吾人の目的を擇ぶに於て、果て意思の自由有りとなれば、開は何事を爲すにも自由なりと言ふのでは無く、平生習ひ來つたものに決するの自由が有ると云ふに過ぎないので有る

若し行爲の理由即ち目的物に、少も他動の力が無くて、純然たる意思の自由に由て、行ひを制するものとすれば、平生の修養も、四圍の境遇も、時代の習氣も、凡そ氣を移し體を移す可き者は、皆力無きものと成り了はるで有らう、是れは歴史の實際に於て打消されて居る

是故に人をして、道德的二個以上の事項が目前に臨む時に、必ず其の正なる者に就て不正なる者を避けしめやうとするのには、幼時よりの教育が極めて大切である、平時交際する所の朋友の選擇が大に肝要で有る、若し此くの如き修養無くして漫然事に臨んだ日には、其不正の者に誘惑されないのは罕れなので有る、生知安行の大聖人と、移らず濟度す可らざる下愚との外は、平時の修養如何に由りて、善にも赴き、悪にも赴むくと成るので有る、我れに意思の自由が有ると云つて、叨りに自ら恃みて事に臨めば、其邪路に落ちないものは殆ど希れなので有る、即ち強竊盜の罪人が下層社會に多

くて、詐偽贗造の罪人が中産以上に多いのは、其境遇階級が乃ち然らしむるので有る。意思の自由を輕視し行爲の理由を重要視して、平素の修養を大切にするとが、是れ吾人の過ちを寡くする唯一手段で有る。

(十七) 自省の能

自省の能とは、己れが今ま何を爲しつゝ有る、何を言ひつゝ有る、何を考へつゝ有るかを自省するの能を言ふので有る。

自省の一能の存否、是れ正に精神の健全なると否とを徵す可き證據で有る、即ち日常の事に徵しても、酒人が

杯を擧げながら、大變に酔ふた又は、大酔ひで有る、杯と明言する間は、左程には酔ては居ない、少くとも自省の能が未だ萎滅しないのを證するもので、決して亂暴狼藉には至らぬので有る、又精神病者が自身に「己れは少し變だな、杯と言ふ中は、矢張酔漢と同じで、未だ自省の能を喪失しない、乃ち全然狂病者とはなつて居ない」徵候で有る。

吾人は唯此自省の能が有るので、凡そ己れが爲したる事の正か不正かを皆自知するので有る、故に正ならば自ら誇りて心に愉快を感じ、不正ならば自ら悔恨するので有る、此點から云へば、道德と云はず、法律と云はず、

凡そ吾人の行爲は、未だ他人に知られざる前に、吾人自ら之れが判断を下して、是れは道德に反する、是れは法律に背くと判断するので有る、故に道德は、正不正の意象と此自知の能とを基址として建立されたるもので有る、啻に主觀的のみならず、客觀的に於ても、即ち吾人の獨り極めて無く、世人の目にも正不正の別が有て、而して又此自省の一能が有る爲めに、正不正の判断が公論と成るとを得て、茲に以て道德の根底が樹立するので有る

世には此自省の能の極て微弱な人物が多々あるが、其人は恐くは世界不幸の極と謂はねばならぬ、縦令心身

寵貴を極め富厚を累ねても、徒らに營々然として世を送りて、人てふものは皆斯くある可き筈だと思つて居る風で過ぎ去る者が、幾何なるか知らぬので有る、是れ皆食ふに味を知らさると一般で、我日本舊華族の大旦那は、大抵此一輩の人物で有る、之れに反し、設令ひ一簞食一瓢飲でも、時々自ら提醒して、即ち自省の能を使ふて、自己の位地を點檢して、所謂俯仰天地に愧ぢぬのを以て自ら樂み、所謂採菊東籬下悠然見南山底の境界に優游したならば、其幸福は如何で有るか、自省の能の有無は賢愚の別と云ふよりは、殆ど人獸の別と云ふても、良いので有る、之れ有れば人て、之れ無れば獸で有る、世

間如何して獸的人物が多いであらう

未來の裁判の説を主張する者、動もすれば言ふ、世には其自省の能の無い者共が、隱然大惡を爲しつゝ、法章の誅に漏れて、平氣で少も悔ゆるとを知らず、反て自ら夸として居るものが寡くない、此輩に在ては道德自身の裁判は洵に微弱で能るが故に、必ず未來の裁判を待て、始て罪過と懲罰と相ひ稱ふとを得るので、左無ければ自省の能の萎滅したものは、此世に於ては言はゞ道德的の「フザミ」で有る云々

吾人は則ち言ふ、是れは決して未來の裁判を要する所の條件では無い、抑も自省の一能が萎滅して、自身の行

の善惡を感せぬ程の人物は、世界の最も憐れむ可き人物で有る、世人皆爪弾きして憎惡しつゝ、有る中に立て、己れ獨洒然として自省せぬのは、是れは最早人間とは言はれない、頗冥なる一肉塊と言はねばならぬ、夫れ人間の德行に最も必要なる、即ち人として禽獸と區別するに唯一の具たる自省の神火が熄滅して、我法身全く暗黒を成せるが如きは、世界で之れに上踰す懲罰の有る可き筈が無い、精神的に無形の地牢に投せられたものと謂はねばならぬ、自省の明の貴尙す可きは此くの如きもので有る

且懲罰を以て復讐的のものとしやうとして、茲に以て

犯と罰とが相ひ稱ふのを重要視するが如きは、尤も陋見と謂はねばならぬ。蟲の喰つてゐる舊思想と謂はねばならぬ。死刑を廢せんとする傾向正に殷なる今日に於て、復讐的刑法を割出しとして哲學の一説と爲すが如きは、尤も謬戾と謂はねばならぬ。

(十八) 歸納演繹

余は前章で既に推理の一力を論述したが、更に細に論ずれば、推理の方法に自ら二種有て、一は演繹で、一は歸納で有る。

歸納は、箇々の道理を攻究し、層累して上つて、此等道理

を包容する所の大理に溯洄するを謂ふので有る。演繹は正に其反對で一の大理を前に置き層累して下つて、之れが包容する所の箇々の道理を採撫するを謂ふので有る。此兩事は普通一般のもので有つて、殆ど知らない者は無いのだから、茲には唯其目を擧ぐるだけで、最早詳論する必要は有るまいと思ふ。

第三章 結論

斯くして道德論理と順次論道す可き筈では有るが、元是れ組織的に哲學の一書を編するのでは無い、組織的に一書を編するのは、著者今日の境遇の容るさゝる所ろで有る、故に首章より輒ち雜亂を極めて居る、但大體趣旨とする所ろは、神の有無、靈魂の滅不滅、世界の有限無限、及ひ始終有りや無きや、其他無形の意象等、古來學者の聚訟する五七件を把て意見を述たに過ぎない、他日幸に其人を得て此間より一のナカエニスムを組織すると有るならば、著者に取て本懐の至りて有る續一年有半終

凡例

一 泰西理學流派極テ蕃クシテ殆ント盲人々殊ナリ是ヲ以テ學者單ニ其一派ノ說ヲ究メ然後推テ之ヲ他諸派ノ說ニ及スルハ柄鑿ノ患ヲ免レヌ本書諸派ヲ旁舉シテ之レカ綱要ヲ舉ケ學者ヲシテ一目ニ瞭セシム但其論スル所ノ事本ト極テ幽微縝密ナルヲ以テ熟復思考スルニ非レハ恐クハ終ニ茫洋タルヲ免レサランノミ

一 泰西ノ文丁寧反覆ニシテ毫髮ヲ遺スコト無シ故ニ直ニ之ヲ翻譯スルハ往々冗漫ヲ免レヌ本書博ク諸家ヲ蒐採シテ文ハ則チ別ニ結撰シテ初ヨリ原文ニ拘泥セヌ此レ其著ト稱シテ譯ト稱セサル所以ナリ但旨趣ハ其何ノ派ニ屬スルヲ問ハス亦其一事ヲ主張スルト之ヲ駁撃スルトヲ論セス皆泰西人ノ胸臆ヨリ出ル者ニシテ著者一己ノ見ハ少モ其間ニ厠ル有ラス讀者請フ之ヲ察セ

一 理學家習用ノ辭語意義極テ幽眇ニシテ之ヲ譯スルコト甚タ難シ博ク經子語錄及ヒ佛典ノ類ヲ蒐討スルハ定テ相合スル者有ル可シ獨奈セン著者少小ヨリ力ヲ西學ニ專ニシテ未タ廣ク群書ニ及フコト能ハサルヲ以テ譯語往々強捏鄙陋ヲ免レヌ是ヲ以テ一々原語ヲ旁注シテ煩ヲ厭ハサル者ハ讀者ノ心目ヲ昧セサルヲ求メ且ツ大方ノ示教ヲ乞フカ爲メナリ

明治十九年四月

中江篤介識

理學鉤玄目次

第一卷

第一章	理學の意義並に旨趣	一
第二章	理學の諸説	五
	理學諸説系譜の圖	六
	定斷派	七
	虛靈派	八
第三章	法朗西學派の虛靈説	一〇
第四章	性理	一一
	心性中の事蹟	一一
	心性自知の能	一二
	自知の確定	一三
	精神の機能の分別	一五
第五章	感、觸、情	一七

感の機能に係る系譜の圖……………二〇

第六章、智、反省の智、覺……………二一

 意象……………三三

 意象に係る系譜の圖……………二七

 意象の本原……………二八

 推理の智、良智、想像……………二八

 智の機能に係る系譜の圖……………三六

第七章 斷の機能……………三六

 心の自由一名道德の自由……………四〇

第八章 精神……………四三

 精神に係る系譜の圖……………四六

第九章 論理……………四七

 明瞭及び確定……………四九

 假定……………五〇

第十章 法式……………五三

送降の法式……………五四

送昇の法式……………六〇

謬誤……………六三

 諸種學術用ゆる所の法式……………六四

 論理に係る系譜の圖……………六六

第十一章 神理、原理學……………六七

 神の儼存……………六七

 神の諸徳……………七二

 神の濟度の徳……………七四

 世界の害惡……………七六

 神理に係る系譜の圖……………八〇

第十三章 道學……………八二

 道德の理……………八二

 良心……………八四

 善と利との學……………八六

道徳の意象の本根……………八七

行意の旨趣……………八九

責任……………九〇

當の義並に不當の義……………九〇

道徳の法令に係る威柄……………九一

道徳の行……………九三

事神の責任……………九三

持身の責任……………九四

實際の道徳……………九五

倫理の責任……………九七

邦國に事ふるの責任……………九八

人心不滅……………九八

第二卷

第一章 感覺説……………一〇一

第二章 精神……………一〇三

講求の法式……………一〇三

道徳、政術……………一〇四

感覺説に係る系譜の圖……………一〇〇

第三章 意象説……………一一一

フラトンの講求の法式……………一一三

物の意象……………一二四

回憶……………一二七

神……………一二七

造物の業……………一二八

性理……………一二九

道徳、政術……………一三一

フラトンの意象説に係る系譜の圖……………一三三

第四章 カントの法式……………一三四

觀察の智の検査 一三八

實行の智の検査 一四八

カントの意象説に係る系譜の圖 一五六

第五章 神物一體説 一五七

スピノザの神説 一五八

第六章 スピノザの道德 一六四

政術 一六七

神物一體説に係る系譜の圖 一六九

第七章 神人感合説 一六九

神人感合の境を求る法式、大死一番の境 一七二

神人感合説に係る系譜の圖 一七五

第三卷

第一章 實質説 一七六

宗教並に諸種虚靈説の本原 一七八

第二章 原因効果の義、無神の説、基督宗の害 一八六

第三章 實質 一九七

第四章 世界、星辰の境界、地球 二〇三

第五章 生物體機の没化 二一〇

第六章 人、感覺、記憶 二一八

第七章 推理の能、智慧、決斷、心の自由 二二三

第八章 道德、利害 二二六

第九章 懷疑説 二三〇

理學鈞玄目次畢

理學鈞玄卷之一

中江篤介著

第一章 理學ノ意義并ニ旨趣

「フィロソフィー」ハ希臘言ニシテ世或ハ譯シテ哲學ト爲ス固ヨリ不可ナル無シ余ハ則チ易經窮理ノ語ニ據リ更ニ譯シテ理學ト爲スモ意ハ則チ相同シ

原字ノ意義ニ據ルキハ聖哲ノ人ト爲ルヲヲ瞻フノ意ニシテ乃チ知ラサル所無キヲヲ求ムルノ義ナリ蓋シ理學ノ旨趣ハ萬事ニ係リテ其本原ヲ窮究スルニ在ルヲ以テ人能ク斯學ニ得ル有ルキハ學識淹博ヲ成シテ所謂聖哲ノ人ト爲ルヲ得是レ理學ノ語中云々ノ意義有ル所以ナリ

今日世俗ノ稱謂ニ在テハ聖ト云ヒ賢ト云ヒ哲ト云ヒ專ラ道德ノ盛ナル處ヲ指ス博ク學藝ニ通スルト否トハ必シモ問フ所ニ非ルニ似タリ此等ノ語ノ本義ニ非ルナリ試ニ看ヨ孔子ヤ釋迦ヤ希臘ソクラットヤ皆所謂聖哲ナリ而ソ凡ソ當時ノ學術ニ於テ皆通達セサル所無シ獨德行ヲ修シノミニ非ルナリ

人ノ性タルヤ爲スヲ有ルヲヲ求ムル者ナリ爲スヲ有ルヲヲ求ムルカ故ニ亦知ルヲ有ルヲヲ求ム

他無シ知ルヲ無キハ初ヨリ爲スヲ有ルヲ得ルノ道無クハナリ是ニ知ル人性ノ自然ニ知ル
ヲ有ルヲ求ムル者此レ正サニ古來諸種ノ學術ノ興リシ所以ナルヲテ
然ト雖モ尋常學術ト理學トハ決テ相混スルヲ得ス蓋シ所謂尋常學術トハ曰ク算數ノ學ナリ曰
ク物性學ナリ曰ク物化學ナリ曰ク星學ナリ曰ク醫學ナリ曰ク法學ナリ其他一切ノ事項ヲ講
求スル者ハ皆尋常學術ナリ

物性學即チ世ノ所謂格物學ハ專ラ物ノ外ニ著見スル所ノ現象ヲ講スルヲ主トス之ヲ例ヘハ或
ハ物ノ墜落ノ遲速ヲ徵シ或ハ物ノ氣孔ノ疎密ヲ證スル等是レナリ

物化學即チ世ノ所謂化學ハ其物ヲ講スルヲ更ニ深微ニシテ乃チ物ノ衆質ヲ分析シ及ヒ之ヲ調合

シテ以テ其離合成スル所以ノ故ヲ求ム然レモ之ヲ要スルニ一科ノ項ニ止マリ且ツ物理最高層
ノ處ニ透徹スルヲ求ムルニ非ス其他醫學法學ノ類皆此レナリ

若夫レ理學ハ然ラス其旨趣タル必ス諸種學術ノ相通シテ原本スル所ノ理ヲ講求シテ以テ事物ノ
最高層ノ處ニ透徹スルニ在リ所謂最高層ノ理トハ何ソヤ之ヲ例ヘハ天地日月禽獸蟲魚凡ソ動植
ノ屬吾人ノ耳目五官ニ呈スル者之ヲ名テ實質若クハ實體ト曰フ然ルニ此等實體ノ采色若クハ聲
音若クハ形貌若クハ輕重實ニ其本相ニ空幻ニ非サル乎即チ物ノ色ノ如キハ獨リ吾人ノ目ニ接
スルニ由テ發スル者ニ物實ニ之レ有ルニ非サルヲ無キヲ得ル乎又吾人ノ身ノ如キモ其感覺シ

思念シ及ヒ決斷スルハ獨リ頭腦ノ機關然ラシムル所ナル乎將ク虛靈不昧ノ精神ナル者有テ
一身ノ主宰ト爲リテ此等ノ能力ヲ發スト爲ス乎斯天地萬有ハ本ト之ヲ造ル者有リテ生セシ乎將
タ偶然トシテ發シ突如トシテ來リタル乎世界萬物ハ皆個々圓成シテ乃チ各々獨立不倚ナル乎將
タ一個ノ本根有リテ皆之レニ統屬スト爲ス乎吾人善ヲ爲シ惡ヲ避クルハ吾人ノ心實ニ自ラ決
斷シテ然ル乎將タ知ラス識ラス外來ノ目的ノ爲メニ牽引セラレテ然ルト爲ス乎

凡ソ此等ハ皆所謂事物最高層ノ理ニシテ之ヲ窮究スルハ即チ理學ノ事ナリ

是故ニ理學ハ凡ソ學術ノ中ニ就イテ最廣博ニシテ最高遠ナル者ナリ古來諸說ノ相容レサル者續
々發シ來リ其最相類スル者ト雖モ細ニ之ヲ察スルハ必ス相異ナル所有ルヲ見ル蓋シ尋常學術
ノ如キハ其目的單ニ一科ノ事項ニ止マリ又講求スル所ノ事項皆吾人ノ耳、目、鼻、口、觸ノ五
官ニ由リテ考驗スルヲ得又其物至微至細ニシテ直チニ五官ニ由リテ考驗スルヲ得サルハ
學士輩巧思有ル者精緻ノ器械ヲ創造シテ以テ五官ノ及ハサル所ヲ助ク望遠ノ鏡ヤ抽氣ノ罩ヤ其
他百般ノ器械日月益々精ヲ極メ是ニ於テ乎學術益々進關シ前日大家ノ未タ知ラサル所若クハ疑
テ未タ決セザリシ所モ渙然冰釋シテ庸衆人ト雖モ之ヲ知ルニ至ル若夫レ理學ニ在リテハ然ラス
古來諸說疊々對シテ相攻擊シテ勝敗ヲ決スルニ由來シ然ル所以ノ者ハ他無シ理學ノ事項タル其
最高層ノ處ニ至ルハ已ムヲ得ス推測ヲ以テ法式ト爲シテ復々考驗シテ之レカ證ヲ舉クルヲ

ヲ得可ラス甚キハ理學ノ目的ヲ論スルニ至リテモ猶ホ或ハ異議ヲ立ル者有リ即チ近時法朗西ノ學士シューフロアールノ如キハ其著ハス所ノ一書中言フ有リ茲ニ其文ヲ舉ク

理學ノ物タル其目的猶ホ未タ一定セス怪ムヲ無キナリ若シ理學ノ目的ヲシテ既已ニ一定シテ易フ可ラサラシメハ今日ニ於テ諸説ノ多キヲ殆ント理學士ノ數ト等キハ何ソヤ看スヤ物性學ノ如キ物化學ノ如キハ皆唯一有ルノミ決シテ數種ノ物性學數種ノ物化學有ルニ非サルナリ是レ他無シ其目的一定シテ復タ易フ可ラサルカ故ナリ云々

同國近時ノ學士フランクハ又シューフロアールノ是言ヲ駁シテ以無ヘラク是レ謬戾ノ甚キ者ナリ理學ノ初メテ興ルヨリ其目的ハ早已ニ一定シテ易フ可ラス蓋シ古今學士用ユル所ノ言句或ハ相異ナルモ其意ハ則チ相同シ又其所謂目的即チ事物ノ本原ノ何物タルヲ論スルニ於テ、言、人々殊ナルモ其本原ニ透徹スルヲ求ムルハ則チ一ナリ云々

蓋シ古今理學ヲ修ムル者或ハ外物オブジェクトノ理ヲ先ニシテ心性メンタルノ理ヲ後ニスル有リ或ハ心性ノ理ヲ先ニシテ外物ノ理ヲ後ニスル有リ願フニ此ノ如キ者ハ特ニ其據ル所ノ法式メソッドノ異ナル者ニシテ其目的ハ相同シ洵ニフランクノ言ノ如シ然レモ英國學士ニームノ如キハ一切原因効果ノ義ヲ以テ有ルヲ無シト爲シ又アミルトンノ如キハ以爲ヘラク事物ノ本根ハ吾人々類ノ淺智ノ得テ窺フ所ニ非スト因リテ之ヲ斥ケリ又近時所謂實質說ノ如キハ事物ノ本根ヲ以テ有ルヲ無シト爲シテ專

ラ諸種學術ノ考驗ニ得ル所ヲ綜裁シテ以テ一說ヲ結成ス是ニ由テ之ヲ觀レハフランクノ言未タ全ク當ラサルニ似タリ

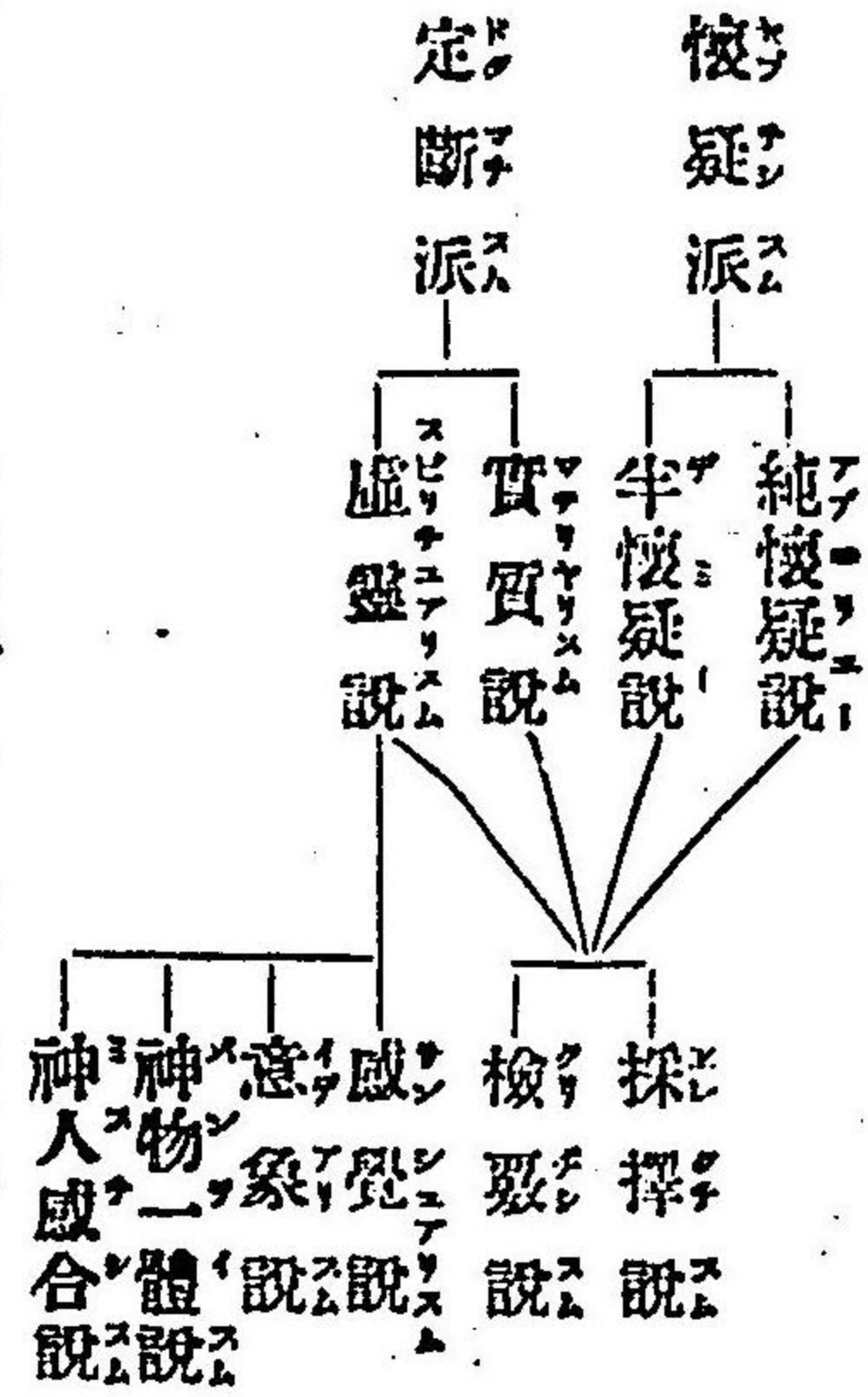
凡ソ學術ノ類一モ一定不易ノ目的無キハ莫シ獨リ理學ニ至リテハ學士輩或ハ異議ヲ立ル有リ此レ他無シ其旨趣ノ深微奧衍ニシテ把住シ易ラサルカ爲メナリ余ノ前ニ舉クル所ノ理學ノ旨趣ハ要スルニ學士大數ノ相同キ所ナルノミ

第二章 理學ノ諸說

理學ノ說極メテ多端ニシテ古ヨリ今ニ至ルマテ紛々擾々一モ相同キ者有ルヲ無シ偶々一旨趣ニ係リテ相似ルヲ有ルモ他ノ旨趣ニ就イテ點檢スルハ往々相容レサルヲ見ル怪ムヲ無キナリ目的トスル所猶ホ且ツ一定セサルヲ前ニ論スル所ノ如クニシテ又其講求ノ法式ニ至リテモ往々異ナル有リ或ハ專ラ考驗ヲ主トスル有リ或ハ專ラ推測ヲ旨トスル有リ或此二者ヲ並取スル有リ凡ソ此レ皆理學ノ說ノ衆多ニシテ一ニ定マラサルヲ致ス所以ナリ

夫レ理學ノ說此ノ如ク其審クシテ而テ今之ヲ若干種ノ中ニ隱括セント欲スレハ其事タル極テ難クシテ扞格ノ患有ルヲ免レス然レモ初學ノ徒其頭腦中曾テ未タ理學ノ旨義ヲ善ヘサル者若シ漫然據ル所無クシテ遽ニ諸說ノ紛錯タルヲ講求セント欲スルハ茫洋トシテ歸底スル所ヲ知ラサ

ルニ至ラン此レ猶ホ舟船ヲ洶瀾怒濤ノ中ニ放チテ機樅ノ頼ム可キ無キカ如シ故ニ余茲ニ諸説ヲ網羅シテ之ヲ若干派ノ中ニ列シ史家系譜ノ圖ニ倣ヒ之ヲ圖スルヲ左ノ如シ



理學ノ說多端ナリト雖要スルニ茲ニ舉ル所ニ出テス但諸家ノ既ニ就テ考尋スルハ未タ必スシモ常ニ截然タルヲ能ハス之ヲ例ヘハ英國ユームノ如キハ感覺說ヲ倡ルモ其間或ハ懷疑ノ處有リ又法國パスカルノ如キハ虛靈說ノ一派ニ屬スルモ亦懷疑家ノ狀態有リ後世日耳曼カントノ如キモ其旨趣中亦頗ル懷疑家ノ言ニ近キ者有リ又一種眞智說ト稱スル者有リ然レモ此レ實ハ一個ノ說ノ名ト爲ス可ラスシテ或ハ實質說ト同キ處有リ或ハ意識說ト同キ處有リ故ニ當サニ視テ採擇說ニ同クス可シ又考驗說ナル者有リ專ラ考驗ノ法式ヲ用ユル者ナリ亦別ニ目ヲ立ルヲ須イヌ

又著實說ナル者有リ學術ノ考驗ヲ主トスル者ニシテ實質說中ニ入ル可シ但尋常所謂感覺說ハ必スシモ精神ヲ以テ實質ト爲スニ非ス故ニ系譜中之ヲ虛靈說ノ中ニ列セリ又博物說有リテ天地萬物ヲ講求スルヲ主トシ亦實質說ト一體ヲ爲ス者ナリ

日耳曼カントハ英國ユームノ說ニ得ル有リテ其所謂檢覈說ヲ倡フルモ要一種ノ法式ニシテ其旨趣ヲ論スルハ亦之ヲ意識說ノ中ニ列ス可シ撰擇說ハ法國ウイクトル、クーザンノ定ムル所ニシテ諸家ノ說ヲ採擇シ裁緝シテ以テ說ヲ爲ス者ニシテ近時法國學官ノ虛靈說正サニ是レナリ故ニ撰擇說ト檢覈說トハ必スシモ別ニ之ヲ論スルヲ須キス之ヲ要スルニ諸說ノ相異ナル所以ノ故ハ毎說ヲ論叙スルヲ待チテ始テ明白ナルヲ得ン

神物一體說ハ尋常虛靈說ト往々相合ハサル所有リ要スルニ亦虛靈ノ精神有ルヲ論スルヲ以テ之ヲ虛靈派中ニ入ル神人感合說ノ如キハ他ノ虛靈ノ一派ヲ倡フル者ニシテ亦此說ヲ兼ヌル者往々之レ有リ唯實質說ト諸種ノ虛靈說トハ天淵相異ニシテ學者之レヲ一目ニ瞭スルヲ得ン

○定斷派

余既ニ理學ノ諸說ヲ大別シテ二派ト爲シテ首ニ懷疑ノ一派ヲ置キ之ニ次クニ定斷ノ一派ヲ以テセリ若シ此次序ヨリシテ言フハ當サニ懷疑ノ一派ヨリ始メテ之ヲ論叙ス可シ但此一派ニ屬ス

ルノ説極テ少クシテ僅ニ所謂純懷疑ト半懷疑トノ二者ニ過キス又眞ニ懷疑ノ説ヲ執リシ者ハ僅々希臘ヒロンアルセヲラス諸子ニ過キス且ツ其説天下萬事ニ就イテ皆疑ヲ懷イテ敢テ定斷セサルニ在ルヲ以テ之ヲ講求スルモ我レニ於テ益スル所極テ少シ故ニ先ツ定斷ノ一派ヨリ始メテ之ヲ叙シ最後ニ乃チ懷疑ノ説ヲ論シ以テ本書ノ殿ト爲サン

定斷派トハ本ト希臘言ニシテ理學ニ係リ若干事項ヲ定メテ眞ニ理ニ合スト爲スノ謂ナリ故ニ實質説ヲ執ルト虚靈説ヲ執ルトニ別無ク學士苟モ其論スル所ヲ以テ理ニ合スト爲スホハ皆定斷派ノ説ト爲ス但法朗西ニ在リテハ學士妄ニ一旨義ヲ倡ヘ自ラ定メテ理ニ合スト爲シテ之レカ證ヲ擧ケサル者ヲ譏リテ或ハ定斷家ノ語ヲ用ユル有リ是レハ則チ要スルニ別ナルノミ

○虚靈派

虚靈派ハ正サニ實質説ト相反ス余是ヲ以テ前ノ系譜ノ圖ニ於テ實質説ト比並シテ之ヲ擧ケリ而テ其實質説ト反スル所以ノ者ハ何ソヤ曰ク實質説ハ以爲ヘラク凡ソ天地萬物皆吾人ノ耳目鼻口觸ノ五官ニ頼リテ之ニ接スルヲ得否ヲサレハ精緻ノ器械ニ資リテ之ニ接ス他無シ形質有ルカ故ナリ若夫レ無形幽妙ノ物即チ精神ノ如キハ特ニ頭腦ノ機關ヨリ發スル一種ノ現象ナルノミ故ニ形骸ヲ外ニシテ別ニ是物有ルニ非スト虚靈説ハ以爲ヘラク然ラス吾人ノ身ノ如キハ實ニ二質

ヲ以テ成ル一ハ肉體ニシテ即チ實質ナリ一ハ精神ニシテ即チ虚靈ナリ吾官ノ力得テ之ニ接ス可ラスト雖モ然レモ其物儼然我身中ニ存シテ常ニ之レカ主宰タリ此レ其實質説ニ反スル所以ナリ

虚靈説又以爲ヘラク世界萬物ノ上自ラ無上聖智ノ神有リテ人物皆其造作セシ所ナリト是レ正サニ虚靈説ノ宗教ト表裏ヲ相爲シテ實質説無神家ノ攻撃ヲ蒙ル所以ナリ實質説ノ章ニ詳ナリ前ニ擧クル所ノ系譜ノ圖ニ從ヘハ虚靈説トハ一派ノ名ニシテ即チ感覺説、意象説、神物一體説、神人感合説ニ論無ク苟モ精神ヲ以テ虚靈ノ本體ト爲ス者ハ皆虚靈派ナリ故ニ系譜ノ次序ニ從フホハ當サニ感覺説ヨリ始メテ順次ニ論ス可シ然ルニ法國一種學官ニ立ツル所ノ虚靈説有リテ其論スル所極テ平易ニシテ初學ニ在リテ最モ解シ易シ故ニ初學先ツ此説ニ得ル有ルホハ多ク理學家習用スル所ノ言辭ニ通スルヲ得ルヲ以テ他ノ高遠玄妙ノ説ヲ講求スルニ於テ思、半ニ過キン但其説タル神ヲ以テ儼然世界萬彙ノ上ニ臨ムト爲シ又天堂地獄ノ言有ルヲ以テ近時技科ニ從事スル者及ヒ特ニ實質ノ説ヲ爲ス者ハ部トシテ之ヲ斥ク然レモ余ノ首ニ之ヲ叙スル者ハ以テ初學ノ階梯ト爲スカ爲メニシテ必スシモ之ヲ信奉セシムルカ爲メニ非サルナリ讀者其說中卑近ノ處有ルヲ以テ之ヲ忽セニスルヲ勿レ

第三章 法朗西學官立ル所ノ虛靈說

法蘭西學官ノ虛靈說ハ其講求スル所ノ目的ヲ分チテ四科ト爲ス第一科ハ精神及ヒ精神ノ機能並ニ其本體ヲ講求スルヲ主トス第二科ハ智慧ノ用法及ヒ智慧ヲノ事理ニ透徹スルヲ得セシムル所ノ手段ヲ講求スルヲ主トス第三科ハ神ノ斯世ニ儼臨スルノ徵ヲ舉ケ並ニ神ノ諸德ヲ垂示スルヲ主トス第四科ハ人ノ氣質ヲ變化シテ其レヲシテ益々德ヲ脩メテ以テ其極ニ到ラシムルヲ主トス

理學家習用スル所ノ理若クハ眞理、謬若クハ謬見ノ語ハ意氣極テ博シ即チ水ノ流下スル火ノ炎上スル等ノ如ク目前極テ明白ノ事ヨリ並ニ諸學術論定スル所ノ事項即チ地球廻轉ノ說萬物牽引ノ說等一切事ノ實迹ニ合シテ違ハサル者ハ皆所謂理ナリ又純一無對ノ理、無限ノ理、廣大無邊ノ理、等ノ語有リ皆衆理ノ本根ヲ指ス者ニシテ或ハ此レヲ以テ直チニ吾人ノ精神ヲ指スヲ有リ亦或ハ直チニ神ヲ指スヲ有リ他無シ法蘭西學官ノ虛靈說ニ在リテ凡ソ萬物ノ理ハ皆神ノ命スル所ナレハナリ

茲ニ舉クル所ノ四科ノ目ハ以テ四箇ノ學ヲ成ス曰ク性理ナリ曰ク論理ナリ曰ク神理ナリ曰ク道理ナリ道理ハ又道學ト曰ヒ亦職分ノ學ト曰フ人タル者ノ當サニ爲ス可キ所ヲ講スル學ノ義

ナリ

第四章 心性中ノ事蹟

吾人若シ徒ニ目ノ見ル所、耳ノ聞ク所、鼻ノ嗅ク所、口ノ味フ所、手足肌膚ノ觸ル、所ニ拘ハスシテ試ニ思ヲ回ヘシテ内ニ向ヒ自ラ心中發作スル所ノ事蹟ヲ靜察スルハ種々ノ現象ノ相繼テ動クヲ見ル之ヲ例ヘハ或ハ思念シ或ハ追憶シ或ハ願欲シ或ハ考尋シ或ハ決斷シ是ノ如クニシテ瞬時モ息ムヲ無シ是ノ如キ者所謂心性中ノ事蹟ニシテ五官ノ力ノ得テ接觸スル所ニ非ス他無シ其事タル虛々靈々トシテ形有ルヲ無ク外間萬種ノ實物ト判然別ナルカ故ナリ

吾人身中又體機ノ事蹟ト名クル者有リ之ヲ例ヘハ心臟ノ血液ヲ出納スル有リ肺臟ノ空氣ヲ呼吸スル有リ其他百般體機ノ用皆是レナリ而テ此等體中ノ事ハ吾人如何ニ思ヲ凝シテ躬自ラ之ヲ省覺セント欲スルモ得可ラス且ツヤ思念、追憶、等一切心性ノ事ハ吾人自ラ勉ムルハ一時之ヲ止ムルヲ得可シ若夫レ胃ノ物ヲ消化シ心ノ血ヲ出納スルカ如キハ吾人躬自ラ之ヲ止メント欲スルモ得可ラス此レ心性ノ事ノ深ク體機ノ事ト異ナル所以ナリ

○心性自知ノ能

吾人ノ思念シ或ハ追憶シ及ヒ諸種心性ノ機能ノ發作スルヤ苟モ自ラ省知セント欲スルハ直チニ之ヲ省知スルヲ得是ニ於テ吾人一事ヲ思念スルハ明ニ己レク是事ヲ思念スルヲ自知ス一事ヲ追憶スルハ明ニ己レク是事ヲ追憶スルヲ自知ス是ノ如キ者名ケテ自知ノ能ト曰フ唯此自知ノ能有リ是ヲ以テ理學士タル者廣ク盡天下ノ人ノ心性ノ何物タルヲ知ラント欲スルハ唯此一能ニ頼リ以テ自ラ靜觀内省シテ足ルノミ是ニ知ル自知ノ能ノ吾人心内ノ現象ニ於ケルハ猶ホ五官ノ能ノ外物ノ現象ニ於ケルカカクナルヲ是ヲ以テ自知ノ能ハ又名ケテ心事ノ感覺ト曰フ

理學家喜テ現象ノ語ヲ用ニ而テ此語意義極テ廣シ之ヲ大ニシテハ天地山嶽、之ヲ細ニシテハ塵盆游絲、凡ソ采色聲音臭味形貌等一切五官ニ呈スル者ト及ヒ夫ノ心中ノ事ノ自知ノ能ニ呈スル者ハ皆所謂現象ナリ此語本ト本質ノ語ト對テ爲ス又カントノ學ニ在リテハ實相ノ語ト對テ爲ス夫レ本質ナリ本相ナリ實相ナリ皆物ノ本根ヲ指シテ言フ蓋シ以爲ヘテク物ノ千差萬別ナルハ物ノ假相ニシテ空幻ナリ若夫レ物ノ本根ハ混然一圓體ニシテ中央然ク周邊無ク物我有ルヲ無ク窮己有ルヲ無ク所謂不生不滅ナリト凡ソ此等辭語ノ解ハ學者其レ記シ

テ忘ル、ヲ勿レ

○自知ノ確定

吾人自知ノ能タル其我レニ報スルヲ極テ確實ニシテ其物ニ應スルヲ極テ迅速ナリ世或ハ此自知ノ能ノ報スル所ヲ疑フテ確實ナラスト爲ス者有リ謬レリト謂フ可シ夫レ目ノ采色ヲ視ル耳ノ聲音ヲ聽ク天下ノ所謂最モ確實ナル者ナリ然リ而テ此等五官ノ報ハ或ハ謬ルヲ有リ之ヲ例ヘハ木挺ノ水中ニ挿サムヲ見テ遠ニ認テ曲レト爲シ極冷ノ物ニ觸レテ或ハ定メテ熱ト爲ス有リ夫レ挺ノ水中ニ在リテ其狀曲レルカ如ク極冷ノ物或ハ熱ヲ感スルハ皆理ノ存スル有リ然レ之ヲ要スルニ挺實ニ曲レルニ非スノ物實ニ熱ナルニ非ス若夫レ自知ノ能ノ報スル所ハ決シテ錯有ルヲ無シ我レ苟モ思念スル有ル乎自知ノ能決テ認テ追憶スト爲スヲ無シ我レ苟モ追憶スル有ル乎自知ノ能決シテ認テ思念スト爲スヲ無シ怪ムヲナキナリ五官ノ感覺スルハ是レ我ヲ以テ非我ヲ感覺スルナリ若夫レ自知ノ能ノ心性ノ事ヲ感覺スルカ如キハ是レ我ヲ以テ我ヲ感覺スルナリ何ソヤ自知スル者固ヨリ我ニシテ思念シ若クハ追憶スル者モ亦我ナリ夫レ我ヲ以テ我ヲ感覺スル其極テ深密ニシテ纖芥ノ隔ル無キヲ復タ外物ヲ感覺スルノ比ニ非サルナリ

今夫レ稗官家ノ巧ナル者結撰スル所有リテ以テ人ノ情性ヲ摸寫スルハ之ヲ讀ム者皆案ヲ拍チ

テ其眞ニ逼マルヲ稱セサル莫シ然ル所以ノ者ハ何ソヤ人ノ情性種々殊ナル有ルモ其深奥ノ處ニ至リテハ盡ク相同シ是ヲ以テ作者自ラ内觀シテ拏本ヲ己レニ取リ以テ描寫スルハ讀者モ亦之ヲ己レニ比照シテ其實迹ニ爽ハサルヲ知ルヲ得是レハ則チ自知ノ能ノ見ル所ハ人々相同シト謂フ可シ

夫レ然リ是故ニ獨リ理學士而已ナラス即チ庸俗ト雖モ皆自然ニ夫ノ自知ノ能ノ何物タルヲ知ラサル莫シ何ヲ以テ之ヲ謂フ曰ク今マ人々平常語話スルヲ觀ルニ凡ソ外來ノ物ニ係リテハ必ス言フ我今マ寒ヲ感セリト必ス言フ我レ今マ熱ヲ覺ヘリト決シテ我レ今マ寒若クハ熱ヲ自知セリト言ハス誠ニ當レリ夫ノ自知ノ能タル初ヨリ外物ト交渉有ルヲ無クシテ其感覺スル所ハ專ラ自己精神即チ主人公ノ感覺セシヲ知ルニ在ルノミ

此レニ山リ之ヲ觀レハ理學專家ニ在リ並ニ日常ノ說話ニ在リテ感スルノ語ト自知スルノ語ニ於テ大ニ分別スル所有ルハ事ノ實迹ニ合スト謂フ可シ感スルトハ外物ノ爲メ刺觸セラル、ノ謂ナリ自知トハ自ラ此感ヲ感スルノ謂ニシテ復タ外物ニ事有ルニ非ザルナリ音ニ此レノミナラス我レノ外物ニ感觸スルニ方リテヤ我レノ精神ハ張リテ外ニ響フ我レノ自ラ其感觸セシヲ知ルニ及ヒテハ我レノ精神翕シテ内ニ入ル故ニ自知ノ能ハ亦之ヲ反求ノ智ト曰フハ此レカ爲メナリ

是故ニ自知ノ能ハ獨リ思念追憶ノ類ヲ自知スルニ非スシテ亦五官ノ感觸ヲ併セテ之ヲ自知スル者ナリ然ルヲ獨リ五官ノ感觸スル所ヲ以テ確實ナリト爲シテ自知ノ能ノ自ラ思念追憶ノ類ヲ知ルヲ以テ確實ナラスト爲スカ如キハ豈謬妄ノ甚キニ非ス乎

○精神ノ機能ノ分別

精神ノ機能即チ心ノ動ハ極テ多端ナリト雖モ夫ノ反觀内省ノ工夫ニ藉リ細ニ之ヲ察スルハ蓋シ三種ノ外ニ出テス一ニ曰ク感^{センレヒト}ナリ二ニ曰ク智^チナリ三ニ曰ク斷^{ツク}ナリ之ヲ精神ノ三大機能ト曰フ而テ吾人自ラ省シテ之ヲ考フルハ此三者ノ互ニ其用ヲ相異ニスルヲ見ル

感トハ五官ノ能ニ由リ聲香、色味、美醜、輕重、大小、遠近、寒熱、等一切外物ノ現象ヲ感受スルヲ謂フ又悲喜、憂樂、愛懼、恨怒スルカ如キモ亦感ノ屬ナリ但此時ニ在リテハ別ニ名クテ情ト曰フ

智トハ一切了解シ及ヒ辨別スルノ能ヲ謂フ

斷トハ自ラ斷シテ爲スト有リ及ヒ爲サ、ルヲ有ルノ能ヲ謂フ

夫レ此三機能皆一個精神ノ發スル所ノ現象ナルヲ以テ時有ル平之ヲ分別スルヲ極テ難シ然レモ夫ノ自知ノ能ノ明ニ之ヲ判スルヲ得ルヲ猶ホ目ノ采色ニ於ケル耳ノ音響ニ於ケルカ如クニシテ

爽フ有ルヲ無シ請フ茲ニ其判然異ナル所ノ處ヲ指シテ之ヲ示メサシ
 斷ノ能ハ進取ノ性有リ感ト智トハ承受ノ性有リテ進取ノ性有ルヲ無シ何ヲ以テ之ヲ謂フ今夫
 レ物ノ來リテ我レニ觸ル、有ルハ我レ之レニ感セサラント欲スルモ得可ラス之ヲ例ヘハ采色
 來リテ眼ニ映シ音響來リテ耳ニ入ルハ我レ輒チ之ヲ見輒チ之ヲ聞キ敢ヘテ逆フヲ無シ所謂承
 受ナリ又喜フ可ク悲ム可ク樂ム可ク懼ル可キノ事ニ遇フハ喜悲スルヲ無ク樂懼スルヲ無カラ
 ント欲スルモ亦得可ラス我レ唯之ヲ順受スルノミ若夫レ耳ヲ掩フテ復タ聽クヲ無ク目ヲ瞑シテ
 復タ視ルヲ無ク若クハ心ヲ忍ヒ性ヲ抑ヘテ以テ喜怒ノ情ヲ鎮スルカ如キハ斷ノ事ナリ復タ感ノ
 事ニ非サルナリ故ニ曰ク感ノ機能ハ承受ノ性有リテ進取ノ性無シト
 智モ亦然リ之ヲ例ヘハ我レ苟モ善惡ノ行ヲ見ルハ之ヲ判シテ善ト爲シ之ヲ判シテ惡ト爲ス
 無カラント欲スルモ得可ラス其他一切了解判別ノ類皆然ラサル莫シ故ニ曰ク智モ亦承受ノ性有
 リテ進取ノ性無シト
 夫レ順受ノ性有リテ進取ノ性無キ者ハ皆自由ノ力無キ者ナリ若夫レ斷ノ一能ノ如キハ進取ヲ以
 テ性質ト爲シテ自由ヲ以テ本分ト爲ス何ソヤ我レ苟モ自ラ斷シテ爲スヲ有ラント欲セハ輒チ之
 ヲ爲シ爲サ、ラント欲セハ輒チ爲サ手ヲ伸ヘテ物ヲ取リ趾ヲ舉ケテ進往ス皆自ラ斷スルニ在
 ルノミ故ニ曰ク斷ノ能ハ進取ノ性有リト

又感ト智ト同ク順受ヲ以テ性ト爲スト雖モ亦大ニ相異ナル有リ何ヲ以テ之ヲ謂フ曰ク感ノ物タ
 ル習フ久キハ漸次ニ其力ヲ減スルニ至ル之ヲ例ヘハ感喜愉逸ノ類ノ如キ吾人久ク其境ニ居
 ルハ之ヲ感スルヲ復タ當初ノ甚キカ如クナラス若夫レ智ノ事物ヲ了解スルカ如キハ愈々之レ
 ニ習フハ愈々之レニ明ナリ又感ノ外物ニ於ケルハ芒々トシテ分別スル所無シ是以テ前ニ舉
 ケシ所ノ例ニ在ツテ吾人木挺ノ水中ニ挿サムヲ見テ其曲レルヲ覺ヘ至冷ノ物ニ遇フテ反リテ熱
 ヲ感ス是レ豈芒々タルニ非ス乎既ニシテ思考ノ工夫ヲ着クルニ及ヒテ始メテ挺ノ直ニシテ曲レ
 ルニ非サルヲ知リテ物ノ冷ニシテ熱ニ非サルヲ知ル此レハ是レ智ノ判別ノ力ナリ感ト智ト固ヨ
 リ混スルヲ得サルナリ

以下請フ三機能ヲ取り順次ニ其詳ヲ論セシ

第五章 感、觸、情

吾人感ノ機能タル偶爾トシテ發シ突如トシテ來リ紛々擾々名狀ス可ラス或ハ全ク耳目五官ニ屬
 スル者有リ或ハ無形ノ意象ト交渉スル者有リ其審庶ナルヲ統緒無キカ如シ然レハ夫ノ自知ノ能
 ニ資リ内觀ノ工夫ヲ凝シテ細ニ之ヲ察スルハ其中自ラ種類ノ存スル有リテ復タ増減ス可ラス
 一切他ノ機能ト混同ス可ラサル者有リ

感ノ機能專ラ五官體機ノ表ニ發スル者ハ名ケテ觸ト曰フ觸トハ外物ノ來リ接スルニ因リテ我精
神ノ自ラ動クノ謂ナリ之ヲ例ヘハ采色ノ我目ニ映シ聲音ノ我耳ニ響キ臭味ノ我口ニ入り寒熱ノ
我肌膚ニ接シ及ヒ一切疼痛快愈並ニ飢渴ノ類所謂觸ナリ
觸ノ物タル智ノ機能ニ混スルヲ得ス何ソヤ之ヲ例ヘハ吾人一ヒ官ニ觸レテ然後是レ水ナルヲ
ヲ知リ熱ニ觸レテ然後是レ湯ナルヲ知ル是レハ則テ所謂知ナリ夫レ其初メ寒ニ觸レ熱ニ觸ル
是レ正サニ觸ニシテ是時ヤ未タ其水タリ湯タルヲ知ルニ及ハスシテ唯寒若クハ熱ヲ覺フノミ
蓋是時ニ在リテヤ觸先ツ發シテ知之ニ次ク是レナリ願フニ觸ヨリ知ニ至ルヲ極テ迅速ニシテ其
間髪ヲ容ル、カ能ハスト雖也然レ此二者ハ要スルニ相混スルヲ得ス何トナレハ觸ハ唯感觸ス
ルノミニシテ未ダ原因、効果ノ二義ニ及フカ能ハス若夫レ智ハ此二義ニ通スル有リ是ヲ以テ能
ク今ノ觸ル、所ノ寒ノ必ス水ニシテ他ノ冷物ニ非サルヲ判別シ今ノ觸ル、所ノ必ス湯ニシテ
他ノ熱物ニ非サルヲ判別スルナリ是故ニ吾人一事ノ深ク慮スル所有リテ思念ニ專ラナルハ
目見ルヲ有リ耳聞クヲ有リテ現ニ感觸スル有ルモ采色已テ去リ聲音已テ絶ヘテ終ニ其采色
其聲音ノ何物ニ屬セシヲ知ラスシテ已ムヲ往々之レ有リ又吾人ノ思念スルヲ有ルニ方リ傍人
或ハ我レニ語ル有リテ我レ之レニ應ヘテ而テ自ラ知ラサルカ如キハ是レ智ト觸ト深淺ノ別有ル
ノ明證ナリ

管此レノミナラス吾人感ノ機能ハ最モ首ニ發暢スル者ニシテ智ノ機能ハ之ニ次ク是ヲ以テ嬰兒
地ニ墜チテ早ク輒チ啼キ飢渴シテ乳ヲ索ム彼レ其レ昏々夢々トシテ未タ知ル所有ラス然リ而テ
其能ク啼キ能ク乳ヲ索ム是レモ亦感ノ機能ノ智ノ機能ニ先チテ發スルノ明證ナリ
感ノ機能、無形ノ意象ト交渉有ル者ハ之ヲ名ケテ情ト曰フ之ヲ例ヘハ親ノ子ヲ慈シ子ノ親ニ孝
シ朋友相愛シ人ノ恩ヲ德トシ人ノ苦ヲ憫レミ及ヒ憂喜悲樂スルカ如キハ其原因實ニ身外ニ在ル
モ其發スルヤ人倫ノ理ノ然ラシムル所ニシテ實物ノ預ル所ニ非ス此レ情ト觸ト大ニ相異ナ
ル所以ナリ

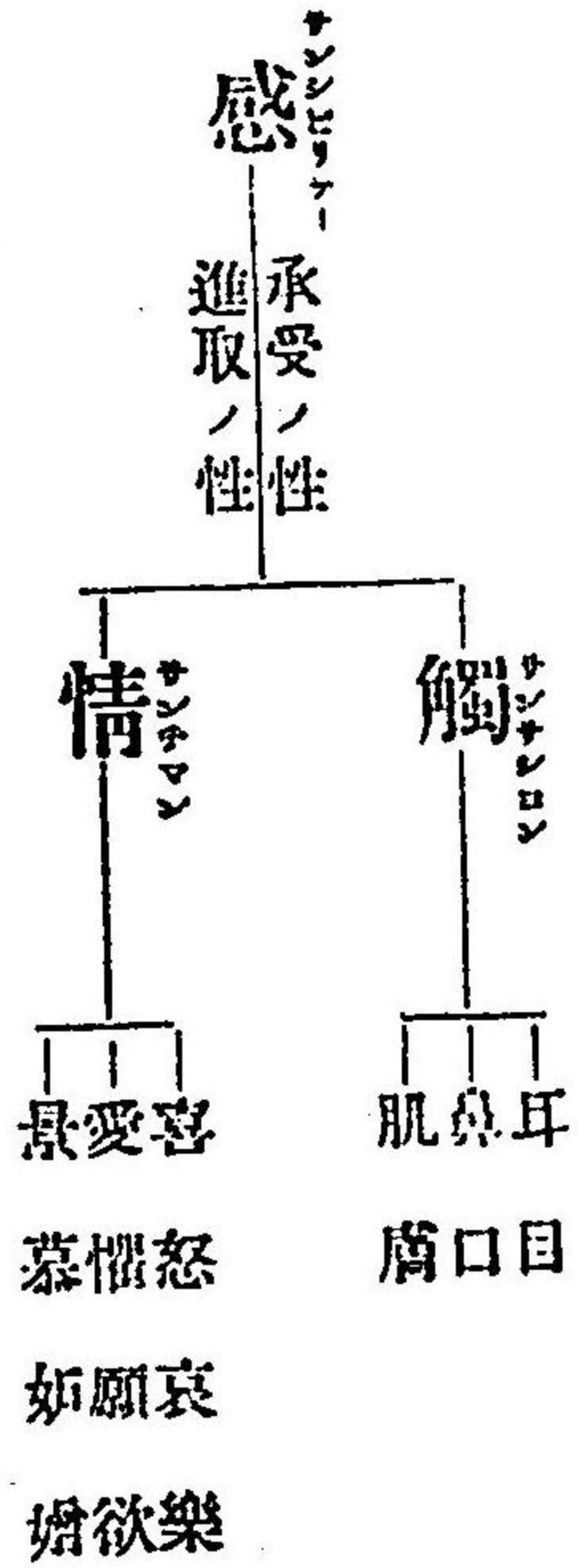
意象ノ語ハ理學家何ノ派ニ循フヲ論セス皆之ヲ習用スル所ニシテ意義極テ廣シ此レ本ト
智慧ニ屬スルヲ以テ其詳ハ智ノ機能ノ章ニ於テ之ヲ論セン蓋シ萬物直チニ吾人ノ耳目五官
若クハ自知ノ能ニ呈スルハ之ヲ名ケテ現象ト曰ヒ記憶ノ力ニ資リテ自ラ心ニ念スルハ
之ヲ名ケテ意象ト曰フ之ヲ例ヘハ吾人今日馬若クハ牛ヲ見ルカ如キハ是レ馬若クハ牛ノ現
象ナリ若シ明日ニ至リテ我カ心中ニ於テ前日見シ所ノ馬若クハ牛ヲ念フハ是レ即チ馬若
クハ牛ノ意象ナリ更ニ之レヲ言ヘハ意象トハ吾人ノ意中ニ著ハル、所ノ事物ノ寫象ト云フ
爾
凡ソ情ノ類ハ觸ト同ク感ノ機能ニ屬スト雖モ然レ也必ス智ノ判別ニ隨フテ發ス智ニ先チテ發ス

ルニ非ス是レ又其觸ト殊ナル所以ナリ之ヲ例ヘハ吾人義烈ノ行、陋劣ノ爲ヲ見聞シテ之ヲ慕ヒ之ヲ鄙トスルカ如キハ是レ情ナリ然ルニ是ノ如クニシテ之ヲ慕ヒ之ヲ鄙トスルハ其初メ明カニ義烈ノ義烈タリ陋劣ノ陋劣タルヲ判別スルカ故ナリ然ラズハ初ヨリ何ノ情ヲ發スルカカ之レ有ラン其他畏懼憎怨願欲如娼愛惜羞耻ノ屬凡ソ以テ心ヲ動カス者ハ皆情ナリ而テ必ス先ツ智ノ機能有リ以テ其畏懼ス可ク憎怨ス可ク願欲ス可ク如娼愛惜羞耻ス可キヲ判別スルニ非サレハ初メヨリ情ヲ發スル無キナリ故ニ曰ク凡ソ情ノ類ハ皆智ノ機能ニ隨フテ發スト

情ノ物タル皆我心ヲ動カスニ足ルヲ以テ其道徳ニ於ケル極テ益有リテ亦極テ害有リ何ヲ以テ之ヲ謂フ曰ク吾人縱令善ノ善タリ惡ノ惡タルヲ知ルモ心實ニ善ヲ愛シ惡ヲ惡マサルキハ其善ヲ爲シ惡ヲ戒ムルニ於テ其情想焉トシテ活潑ノ氣象有ルヲ無シ故ニ古來豪傑ノ士奮フテ偉業ヲ建立セシハ智ノ明以テ之ヲ導ク有リト雖モ抑々活潑興起ノ情之ヲ激シテ然ルナリ是レ情ノ道徳ニ益有ルナリ

然ト雖モ情モ亦極テ害有リ即チ善ヲ好ミ惡ヲ惡ムノ情ノ如キ固ヨリ美ナルニ論無キモ過クレハ則チ失無キヲ能ハス獨此レノミナラス凡ソ情ノ太熾ナル者ハ皆以テ智ノ判別ヲ擾リテ人ヲシテ非義ニ陥イラシムルニ足ル是ニ知ル情ナル者ハ神ノ我レニ與ヘテ以テ善ヲ愛シ惡ヲ惡マシムル所以ノ者ニシテ而テ其或ハ太過ニ至ルハ我レノ不明乃チ然ラシムルヲ

爰ニ感ノ機能ニ係ル系ノ譜圖ヲ示ス



第六章 智、反省ノ智、覺

反省ノ智ハ曩キニ所謂自知ノ能ニシテ一切心中發作スル所ノ現象ヲ自知シ並ニ己レノ獨リ思フ所ニシテ他人未タ之ヲ知ラサルモ我レ自ラ其善タリ惡タルヲ知ル是ヲ以テ此一能ハ道徳ニ於テ關係極テ大ナリト爲ス

覺ハ前ニ舉ル所ノ觸ニ隨フテ發スル者ニシテ乃チ前ニ叙スル所ノ例ニ在リテ寒ニ觸レテ然後是レ水ナルヲ知リ熱ニ觸レテ然後是レ湯ナルヲ知ル是レ所謂覺ノ力ナリ吾人唯此智有リ是ヲ以テ天地萬彙ノ間ニ立チテ能ク我ト非我トヲ分別スル有リ若シ然ラスシテ獨リ夫ノ感觸ノ能有

ルノミナラシメハ常々外物ノ爲ニ侵襲セラレ或ハ寒ニ觸レ或ハ熱ニ觸レテ其因ル所ヲ覺ラス亦自ラ防ク所以ヲ知ラスシテ死ヲ救フニ是レ暇有ラサルニ至ランノミ

○意 象

智ノ機能極テ多端ナリト雖モ其主トスル所ハ諸種ノ意象ノ外ニ出テス是ヲ以テ茲ニ先ツ意象ノ類ヲ分別シテ之ヲ論シ然後諸種ノ智ニ及ハン

意象ノ類タル極テ蕃シ若シ直チニ物ニ就イテ言フハ天地、星辰、山河草木禽獸、人類、家屋、器具ヨリ以テ心事無形ノ物ニ至ルマテ凡ソ世界ノ物苟モ記憶ノ力ニ資リ以テ我カ心中ニ現スル者ハ皆所謂意象ナリ之ヲ例ヘハ吾人心中天地ヲ念フハ是レ天地ノ意象ナリ其他皆然ラサル莫シ故ニ假リニ世界萬有ノ數億萬ナラシメハ是レ意象ノ數モ亦億萬ナランノミ

凡ソ意象直チニ實物ニ因リテ生スル者ハ之ヲ名ケテ有形ノ意象ト曰フ又無形ノ意象ナル者有リ神若クハ精神等一切五官ノ觸ル、所ニ非サル者ニ係ル意象即チ是レナリ

又道 徳ノ意象ト名クル者有リ、善、惡、勇、怯等是レナリ

凡ソ是ニ舉クル所ハ有形無形ヲ論セス皆事物ニ就イテ言フ者ナリ若夫レ意象ノ状態ニ就イテ言フハ亦諸種ノ別有リ曰ク真正ノ意象ナリ曰ク謬 迷ノ意象ナリ曰ク分 明ノ意象ナリ

リ曰ク不分明ノ意象ナリ曰ク圓 成ノ意象ナリ曰ク抽 別ノ意象ナリ曰ク衆 合ノ意象ナリ曰ク單 孤ノ意象ナリ

真正ノ意象トハ事物ノ實迹ト合スル者ナリ之ヲ例ヘハ馬ニ係リ真ニ馬ノ意象ヲ念ヒ牛ニ係リ真ニ牛ノ意象ヲ念フカ如キハ皆所謂真ナリ是ニ知ル凡ソ學術ハ何ノ種類ヲ論セス皆意象ノ真ナル者ノ構成スル所ナルヲ認メ意象ハ則チ之レニ反ス又分明ノ意象トハ念得シテ分明ナル者ナリ不分明ナル者ハ則チ之レニ反ス圓成ノ意象トハ各物ノ全體ヲ舉クル者ニシテ動植ノ物及ヒ器具ニ論無ク苟モ其全體ニ係ルハ皆是レナリ之ヲ例ヘハ書冊若クハ衣服等ノ意象ノ如キハ皆圓成ノ意象ニシテ既ニ書冊若クハ衣服ト曰フハ凡ソ書冊ノ有スル所ノ性凡ソ衣服ノ有スル所ノ性ハ皆包チテ其中ニ在リ抽別ノ意象ハ則チ之レニ反ス之ヲ例ヘハ色、聲、長短、廣狹、高下、輕重、美醜ノ類皆所謂抽別ノ意象ナリ物ノ中ニ就イテ特ニ色聲若クハ長短等ノ一性ヲ抽別シ來リテ之ヲ取ルノ謂ナリ故ニ凡ソ數量ノ類ノ如キ若シ某物若干數某物若干升若クハ若干斗ト曰ハスシテ特ニ若干數若干量ト曰フハ皆抽別ノ意象ナリ

衆合ノ意象トハ禽獸若クハ草木若クハ村、邑、邦、國等是レナリ衆物ヲ聚メテ之ヲ合スルノ謂ナリ 單 孤ノ意象トハ例ヘハ禽ノ中ニ就イテ特ニ此鷲若クハ此鷲ニ係リ獸ノ中ニ就イテ特ニ此猴若クハ此猴ニ係ルノ類是レナリ即チ人ニ在リテハ誰甲誰乙ニ係リテ其名姓ヲ思フハ

衆合ノ意象トハ禽獸若クハ草木若クハ村、邑、邦、國等是レナリ衆物ヲ聚メテ之ヲ合スルノ謂ナリ 單 孤ノ意象トハ例ヘハ禽ノ中ニ就イテ特ニ此鷲若クハ此鷲ニ係リ獸ノ中ニ就イテ特ニ此猴若クハ此猴ニ係ルノ類是レナリ即チ人ニ在リテハ誰甲誰乙ニ係リテ其名姓ヲ思フハ

真正ノ意象トハ事物ノ實迹ト合スル者ナリ之ヲ例ヘハ馬ニ係リ真ニ馬ノ意象ヲ念ヒ牛ニ係リ真ニ牛ノ意象ヲ念フカ如キハ皆所謂真ナリ是ニ知ル凡ソ學術ハ何ノ種類ヲ論セス皆意象ノ真ナル者ノ構成スル所ナルヲ認メ意象ハ則チ之レニ反ス又分明ノ意象トハ念得シテ分明ナル者ナリ不分明ナル者ハ則チ之レニ反ス圓成ノ意象トハ各物ノ全體ヲ舉クル者ニシテ動植ノ物及ヒ器具ニ論無ク苟モ其全體ニ係ルハ皆是レナリ之ヲ例ヘハ書冊若クハ衣服等ノ意象ノ如キハ皆圓成ノ意象ニシテ既ニ書冊若クハ衣服ト曰フハ凡ソ書冊ノ有スル所ノ性凡ソ衣服ノ有スル所ノ性ハ皆包チテ其中ニ在リ抽別ノ意象ハ則チ之レニ反ス之ヲ例ヘハ色、聲、長短、廣狹、高下、輕重、美醜ノ類皆所謂抽別ノ意象ナリ物ノ中ニ就イテ特ニ色聲若クハ長短等ノ一性ヲ抽別シ來リテ之ヲ取ルノ謂ナリ故ニ凡ソ數量ノ類ノ如キ若シ某物若干數某物若干升若クハ若干斗ト曰ハスシテ特ニ若干數若干量ト曰フハ皆抽別ノ意象ナリ

衆合ノ意象トハ禽獸若クハ草木若クハ村、邑、邦、國等是レナリ衆物ヲ聚メテ之ヲ合スルノ謂ナリ 單 孤ノ意象トハ例ヘハ禽ノ中ニ就イテ特ニ此鷲若クハ此鷲ニ係リ獸ノ中ニ就イテ特ニ此猴若クハ此猴ニ係ルノ類是レナリ即チ人ニ在リテハ誰甲誰乙ニ係リテ其名姓ヲ思フハ

真正ノ意象トハ事物ノ實迹ト合スル者ナリ之ヲ例ヘハ馬ニ係リ真ニ馬ノ意象ヲ念ヒ牛ニ係リ真ニ牛ノ意象ヲ念フカ如キハ皆所謂真ナリ是ニ知ル凡ソ學術ハ何ノ種類ヲ論セス皆意象ノ真ナル者ノ構成スル所ナルヲ認メ意象ハ則チ之レニ反ス又分明ノ意象トハ念得シテ分明ナル者ナリ不分明ナル者ハ則チ之レニ反ス圓成ノ意象トハ各物ノ全體ヲ舉クル者ニシテ動植ノ物及ヒ器具ニ論無ク苟モ其全體ニ係ルハ皆是レナリ之ヲ例ヘハ書冊若クハ衣服等ノ意象ノ如キハ皆圓成ノ意象ニシテ既ニ書冊若クハ衣服ト曰フハ凡ソ書冊ノ有スル所ノ性凡ソ衣服ノ有スル所ノ性ハ皆包チテ其中ニ在リ抽別ノ意象ハ則チ之レニ反ス之ヲ例ヘハ色、聲、長短、廣狹、高下、輕重、美醜ノ類皆所謂抽別ノ意象ナリ物ノ中ニ就イテ特ニ色聲若クハ長短等ノ一性ヲ抽別シ來リテ之ヲ取ルノ謂ナリ故ニ凡ソ數量ノ類ノ如キ若シ某物若干數某物若干升若クハ若干斗ト曰ハスシテ特ニ若干數若干量ト曰フハ皆抽別ノ意象ナリ

衆合ノ意象トハ禽獸若クハ草木若クハ村、邑、邦、國等是レナリ衆物ヲ聚メテ之ヲ合スルノ謂ナリ 單 孤ノ意象トハ例ヘハ禽ノ中ニ就イテ特ニ此鷲若クハ此鷲ニ係リ獸ノ中ニ就イテ特ニ此猴若クハ此猴ニ係ルノ類是レナリ即チ人ニ在リテハ誰甲誰乙ニ係リテ其名姓ヲ思フハ

真正ノ意象トハ事物ノ實迹ト合スル者ナリ之ヲ例ヘハ馬ニ係リ真ニ馬ノ意象ヲ念ヒ牛ニ係リ真ニ牛ノ意象ヲ念フカ如キハ皆所謂真ナリ是ニ知ル凡ソ學術ハ何ノ種類ヲ論セス皆意象ノ真ナル者ノ構成スル所ナルヲ認メ意象ハ則チ之レニ反ス又分明ノ意象トハ念得シテ分明ナル者ナリ不分明ナル者ハ則チ之レニ反ス圓成ノ意象トハ各物ノ全體ヲ舉クル者ニシテ動植ノ物及ヒ器具ニ論無ク苟モ其全體ニ係ルハ皆是レナリ之ヲ例ヘハ書冊若クハ衣服等ノ意象ノ如キハ皆圓成ノ意象ニシテ既ニ書冊若クハ衣服ト曰フハ凡ソ書冊ノ有スル所ノ性凡ソ衣服ノ有スル所ノ性ハ皆包チテ其中ニ在リ抽別ノ意象ハ則チ之レニ反ス之ヲ例ヘハ色、聲、長短、廣狹、高下、輕重、美醜ノ類皆所謂抽別ノ意象ナリ物ノ中ニ就イテ特ニ色聲若クハ長短等ノ一性ヲ抽別シ來リテ之ヲ取ルノ謂ナリ故ニ凡ソ數量ノ類ノ如キ若シ某物若干數某物若干升若クハ若干斗ト曰ハスシテ特ニ若干數若干量ト曰フハ皆抽別ノ意象ナリ

衆合ノ意象トハ禽獸若クハ草木若クハ村、邑、邦、國等是レナリ衆物ヲ聚メテ之ヲ合スルノ謂ナリ 單 孤ノ意象トハ例ヘハ禽ノ中ニ就イテ特ニ此鷲若クハ此鷲ニ係リ獸ノ中ニ就イテ特ニ此猴若クハ此猴ニ係ルノ類是レナリ即チ人ニ在リテハ誰甲誰乙ニ係リテ其名姓ヲ思フハ

真正ノ意象トハ事物ノ實迹ト合スル者ナリ之ヲ例ヘハ馬ニ係リ真ニ馬ノ意象ヲ念ヒ牛ニ係リ真ニ牛ノ意象ヲ念フカ如キハ皆所謂真ナリ是ニ知ル凡ソ學術ハ何ノ種類ヲ論セス皆意象ノ真ナル者ノ構成スル所ナルヲ認メ意象ハ則チ之レニ反ス又分明ノ意象トハ念得シテ分明ナル者ナリ不分明ナル者ハ則チ之レニ反ス圓成ノ意象トハ各物ノ全體ヲ舉クル者ニシテ動植ノ物及ヒ器具ニ論無ク苟モ其全體ニ係ルハ皆是レナリ之ヲ例ヘハ書冊若クハ衣服等ノ意象ノ如キハ皆圓成ノ意象ニシテ既ニ書冊若クハ衣服ト曰フハ凡ソ書冊ノ有スル所ノ性凡ソ衣服ノ有スル所ノ性ハ皆包チテ其中ニ在リ抽別ノ意象ハ則チ之レニ反ス之ヲ例ヘハ色、聲、長短、廣狹、高下、輕重、美醜ノ類皆所謂抽別ノ意象ナリ物ノ中ニ就イテ特ニ色聲若クハ長短等ノ一性ヲ抽別シ來リテ之ヲ取ルノ謂ナリ故ニ凡ソ數量ノ類ノ如キ若シ某物若干數某物若干升若クハ若干斗ト曰ハスシテ特ニ若干數若干量ト曰フハ皆抽別ノ意象ナリ

衆合ノ意象トハ禽獸若クハ草木若クハ村、邑、邦、國等是レナリ衆物ヲ聚メテ之ヲ合スルノ謂ナリ 單 孤ノ意象トハ例ヘハ禽ノ中ニ就イテ特ニ此鷲若クハ此鷲ニ係リ獸ノ中ニ就イテ特ニ此猴若クハ此猴ニ係ルノ類是レナリ即チ人ニ在リテハ誰甲誰乙ニ係リテ其名姓ヲ思フハ

真正ノ意象トハ事物ノ實迹ト合スル者ナリ之ヲ例ヘハ馬ニ係リ真ニ馬ノ意象ヲ念ヒ牛ニ係リ真ニ牛ノ意象ヲ念フカ如キハ皆所謂真ナリ是ニ知ル凡ソ學術ハ何ノ種類ヲ論セス皆意象ノ真ナル者ノ構成スル所ナルヲ認メ意象ハ則チ之レニ反ス又分明ノ意象トハ念得シテ分明ナル者ナリ不分明ナル者ハ則チ之レニ反ス圓成ノ意象トハ各物ノ全體ヲ舉クル者ニシテ動植ノ物及ヒ器具ニ論無ク苟モ其全體ニ係ルハ皆是レナリ之ヲ例ヘハ書冊若クハ衣服等ノ意象ノ如キハ皆圓成ノ意象ニシテ既ニ書冊若クハ衣服ト曰フハ凡ソ書冊ノ有スル所ノ性凡ソ衣服ノ有スル所ノ性ハ皆包チテ其中ニ在リ抽別ノ意象ハ則チ之レニ反ス之ヲ例ヘハ色、聲、長短、廣狹、高下、輕重、美醜ノ類皆所謂抽別ノ意象ナリ物ノ中ニ就イテ特ニ色聲若クハ長短等ノ一性ヲ抽別シ來リテ之ヲ取ルノ謂ナリ故ニ凡ソ數量ノ類ノ如キ若シ某物若干數某物若干升若クハ若干斗ト曰ハスシテ特ニ若干數若干量ト曰フハ皆抽別ノ意象ナリ

衆合ノ意象トハ禽獸若クハ草木若クハ村、邑、邦、國等是レナリ衆物ヲ聚メテ之ヲ合スルノ謂ナリ 單 孤ノ意象トハ例ヘハ禽ノ中ニ就イテ特ニ此鷲若クハ此鷲ニ係リ獸ノ中ニ就イテ特ニ此猴若クハ此猴ニ係ルノ類是レナリ即チ人ニ在リテハ誰甲誰乙ニ係リテ其名姓ヲ思フハ

真正ノ意象トハ事物ノ實迹ト合スル者ナリ之ヲ例ヘハ馬ニ係リ真ニ馬ノ意象ヲ念ヒ牛ニ係リ真ニ牛ノ意象ヲ念フカ如キハ皆所謂真ナリ是ニ知ル凡ソ學術ハ何ノ種類ヲ論セス皆意象ノ真ナル者ノ構成スル所ナルヲ認メ意象ハ則チ之レニ反ス又分明ノ意象トハ念得シテ分明ナル者ナリ不分明ナル者ハ則チ之レニ反ス圓成ノ意象トハ各物ノ全體ヲ舉クル者ニシテ動植ノ物及ヒ器具ニ論無ク苟モ其全體ニ係ルハ皆是レナリ之ヲ例ヘハ書冊若クハ衣服等ノ意象ノ如キハ皆圓成ノ意象ニシテ既ニ書冊若クハ衣服ト曰フハ凡ソ書冊ノ有スル所ノ性凡ソ衣服ノ有スル所ノ性ハ皆包チテ其中ニ在リ抽別ノ意象ハ則チ之レニ反ス之ヲ例ヘハ色、聲、長短、廣狹、高下、輕重、美醜ノ類皆所謂抽別ノ意象ナリ物ノ中ニ就イテ特ニ色聲若クハ長短等ノ一性ヲ抽別シ來リテ之ヲ取ルノ謂ナリ故ニ凡ソ數量ノ類ノ如キ若シ某物若干數某物若干升若クハ若干斗ト曰ハスシテ特ニ若干數若干量ト曰フハ皆抽別ノ意象ナリ

衆合ノ意象トハ禽獸若クハ草木若クハ村、邑、邦、國等是レナリ衆物ヲ聚メテ之ヲ合スルノ謂ナリ 單 孤ノ意象トハ例ヘハ禽ノ中ニ就イテ特ニ此鷲若クハ此鷲ニ係リ獸ノ中ニ就イテ特ニ此猴若クハ此猴ニ係ルノ類是レナリ即チ人ニ在リテハ誰甲誰乙ニ係リテ其名姓ヲ思フハ

真正ノ意象トハ事物ノ實迹ト合スル者ナリ之ヲ例ヘハ馬ニ係リ真ニ馬ノ意象ヲ念ヒ牛ニ係リ真ニ牛ノ意象ヲ念フカ如キハ皆所謂真ナリ是ニ知ル凡ソ學術ハ何ノ種類ヲ論セス皆意象ノ真ナル者ノ構成スル所ナルヲ認メ意象ハ則チ之レニ反ス又分明ノ意象トハ念得シテ分明ナル者ナリ不分明ナル者ハ則チ之レニ反ス圓成ノ意象トハ各物ノ全體ヲ舉クル者ニシテ動植ノ物及ヒ器具ニ論無ク苟モ其全體ニ係ルハ皆是レナリ之ヲ例ヘハ書冊若クハ衣服等ノ意象ノ如キハ皆圓成ノ意象ニシテ既ニ書冊若クハ衣服ト曰フハ凡ソ書冊ノ有スル所ノ性凡ソ衣服ノ有スル所ノ性ハ皆包チテ其中ニ在リ抽別ノ意象ハ則チ之レニ反ス之ヲ例ヘハ色、聲、長短、廣狹、高下、輕重、美醜ノ類皆所謂抽別ノ意象ナリ物ノ中ニ就イテ特ニ色聲若クハ長短等ノ一性ヲ抽別シ來リテ之ヲ取ルノ謂ナリ故ニ凡ソ數量ノ類ノ如キ若シ某物若干數某物若干升若クハ若干斗ト曰ハスシテ特ニ若干數若干量ト曰フハ皆抽別ノ意象ナリ

單孤ノ意象ナリ

又自イデ、フニシム然ノ意象有リイデ、アルイシエム作イデ、イマヂキル爲ノ意象有リイデ、イマヂキル僞捏ノ意象有リ凡ソ世界自然ニ生シテ人巧ヲ加ヘサル者皆自然ノ意象ナリ草木禽獸即チ是レナリ作爲ノ意象ハ本ト無キ所ニシテ吾人ノ巧ヲ以テ之ヲ作ル者即チ器械衣服ノ屬是レナリ世間實ニ有ルコト無クシテ吾人想像シテ之ヲ僞造スル者即チ妖怪ノ屬ハ皆僞捏ノ意象ナリ

又本イデ、モト來ノ意象有リイデ、コンダシヤン因イデ、コト生ノ意象有リ本來ノ意象トハ始無ク終無ク必ス有ラサル可カラシテ本ヨリ滅ス可ラサル者ヲ謂フ之ヲ例ヘハ神、若クハ永劫、宇宙等はレナリ神ハ他物ノ造ル所ニ非サルヲ以テ無始無終ニシテ且ツ必ス有ラサル可ラサル者ナリ又永劫、宇宙モ亦皆此ノ如シ

永劫、宇宙ノ二者ハ理學家玄妙ノ論ニ在リテ常ニ用ユル所ナリ故ニ初學須ク之ヲ解シテ瞭然タル可シ蓋シ永劫トハ時ノ全體ヲ謂フ固ヨリ無始無終ナリ何トナレハ世界未タ生セサルノ前ト雖モ時ハ則チ有ルナリ世界已ニ滅スルノ後ト雖モ時ハ則チ亦有ルナリ故ニ永劫ハ不生不滅ナリ又凡ソ物苟モ有ルハ永劫ノ中ヲ經過セサル莫シ蜉蝣朝ニ生シテ夕ニ死ス是レ永劫中ノ一日ヲ經過スルナリ人百歳ニシテ死スルハ是レ永劫ノ中百年ヲ經過スルナリ

又宇宙トハ空ノ全體ヲ謂フ固ヨリ無周無邊ナリ何トナレハ世界縱令ヒ限量有ルモ空ハ則チ限量有ルノ理無シ又不生不滅ナリ又凡ソ物苟モ有ルハ宇宙ノ間ニ存在セサル莫シ塵盆ノ細ナルモ宇宙ノ間ノ若干ヲ填塞ス即チ世界ノ大ナルモ宇宙ノ外ニ出ルコト能ハス故ニ永劫、宇宙ノ二意トハ之ヲ本來ノ意象ト曰フ必ス有ラサル可ラサルカ故ナリ又之ヲ無イデ、フニシム驅ノ意象イデ、フニシム無イデ、フニシム限ノ意象ト曰フ

又凡ソ物ノ生スル先後久促ノ別有ルハ永劫ノ意象有ルニ由リテ然リ何トナレハ若シ永劫無キハ是レ時無キナリ苟モ時無キハ是レ時無キナリ苟モ時無キハ何ソ先後久促ノ別カ之レ有ラン凡ソ物ノ存スル前後遠近ノ別有ルハ宇宙ノ意象有ルニ由リテ然リ若シ宇宙無キハ是レ空無キナリ若シ空無キハ是レ物ノ居ル所ノ處無キナリ何ソ前後遠近ノ別之レ有ラン然リ而シテ吾人生レナカラニシテ能ク物ノ先後久促前後遠近ノ別ヲ知ルハ是レ生レナカラニシテ永劫宇宙ノ意象ヲ具有シテ自ラ省セサルナリ故ニ此ニ二意象ハ又之ヲ生イデ、イマヂキル知ノ意象ト曰フ

虛靈脫家猶ホ他ノ生知ノ意象若干數ヲ倡説スル有リ後ニ詳ナリ

又原因ト云フノ意象モ亦本來ノ物ナリ必ス有ラサル可ラサル者ナリ何トナレハ凡ソ事物皆原因有リテ生セサル莫シ世或ハ偶爾トシテ發シ突如トシテ來ル者有ルモ實ハ然ラスシテ必ス一原因ノ在ル有リ但吾人未タ之ヲ知ルニ及ハサルノミ

因生ノ意象トハ凡ソ未タ始ヨリ有ラサルヲ得ル者ハ皆是レナリ更ニ之ヲ言ヘハ本來ノ意象ヲ除キ餘ハ皆因生ノ意象ナリ故ニ凡ソ始有リ終有リテ乃チ永劫ノ間ニ疆キラレ長、厚、廣ノ性有リテ乃チ宇宙ノ中ニ居テ他ノ物體ノ爲メニ限ラル、者ハ皆因生ナリ之ヲ例ヘハ天地日月山川禽獸人類器具ノ如シ凡ソ此レ皆未タ始ヨリ有ラサルヲ得ル者ニシテ吾人假リニ想像シテ以テ之レ有ラスト爲スコヲ得若夫レ前ニ所謂宇宙ト云ヒ永劫ト云ヒ吾人如何ニ想像ノ力ヲ費スモ須臾モ以テ之レ有ラスト爲スコヲ得ス又原因ノ意象ノ如キモ苟モ物有ルハ吾人想像シテ原因有ラスト爲サント欲スルモ得可ラス

所謂本來ノ意義トハ佛乘所謂有常ノ物ニシテ古今ヲ亘リテ窮已無キ者ナリ因生ノ意象トハ佛乘所謂無常ノ物ナリ其存スルコト如何ニ久キモ限極有ルヲ免レス其因生ト名ツクル所以ノ者ハ以爲ラク此等ノ物ハ皆因ル所有リテ生スルカ故ナリ夫レ既ニ因ル所有リテ生スル者ハ亦必ス因ル所有リテ滅ス之ヲ例ヘハ吾人ノ身ノ如キモ其生スルヤ因ル所有リ其死スルヤ亦因ル所有リ本來、因生ノ二語ハ論理家ノ習用スル所ナルヲ以テ學者須ク記シテ忘レサル可シ

是故ニ意象ノ類極テ多端ニシテ其數タル正サニ世界物類ノ數ト相當ルモ之ヲ大別スルトハ終ニ本來、因生ノ二者ニ出テス故ニ苟モ本來ノ物ニ非サレハ必ス因成ノ物ナリ

爰ニ意象ニ係ル系譜ノ圖ヲ示ス

- 本 來 神、永劫、宇宙、原因、
- 因 生 凡ソ天地、庶物、人物ノ精神、心中ノ現象、凡ソ人作ノ物、
- 無 形 神、宇宙、永劫、原因、人物ノ精神、心中ノ現象、
- 有 形 天地庶物、
- 眞 何ノ意象ヲ論セス理ニ合スル者、
- 隱 何ノ意象ヲ論セス理ニ合セサル者、
- 分 明 何ノ意象ヲ論セス分明ナル者、
- 不 分 明 何ノ意象ヲ論セス不明ナル者、
- 圓 成 神、宇宙、永劫天地萬物、凡ソ一全體有ル者、
- 抽 別 長、廣、厚、高下、輕重、品位、聲音、色、味、神、人ノ徳
- 單 孤 神、宇宙、永劫、原因、天地萬物、中ノ一箇、
- 衆 合 家族、村邑、邦州、世界ノ屬、
- 自 然 天地萬物、人類ノ精神、心中ノ現象、凡ソ人作ヲ經サル者、
- 人 作 凡ソ人ノ作ル所ノ事物、

偽捏 妖怪、及ヒ詩人文藝家ノ徒ノ寫意假托ノ意象、

○意象ノ本原

諸種ノ意象ノ中ニ就イテ本來ノ意象ハ皆吾人ノ生ナカラニシテ知ル所ニシテ乃チ良智ノ中ニ存ス若夫レ一切因生ノ意象ハ或ハ覺ノ能ノ得ル所有リ或ハ推理ノ能ノ得ル所有リ或ハ想像ノ能ノ得ル所有リ或ハ前ニ舉クル所ノ自知ノ能ノ得ル所有リ之ヲ例ヘハ聲音采色形貌等一切五官ノ感覺スル所ノ外物ノ意象ハ覺ノ能之ヲ得又抽別ノ意象、衆合ノ意象及ヒ制度器物ノ意象ハ推理ノ能之ヲ得心中ノ現象ニ係ル意象ハ自知ノ能之ヲ得若夫レ怪物及ヒ文藝ノ比興寓意ニ係ル意象ハ想像ノ能之ヲ得

○推理ノ智、良智、想像

推理ノ智トハ一理ヲ推シテ更ニ他ノ一理ヲ得此ノ如クニシテ遂ニ一効果ヲ得ルニ至ルノ謂ナリ良智トハ議論ヲ俟タス考驗ヲ須ニス直チニ覺悟スルノ謂ナリ

蓋シ虛靈家世界庶物ノ上ニ於テ無上聖智情無上仁慈ノ神ノ儼臨スル有ルヲ倡道シテ以爲ヘラク神ノ德タル完備精粹ニシテ物ノ比ス可キ無ク所謂善ノ極、美ノ極、真ノ極ニシテ又其

威徳ノ盛ナル凡ソ世界ノ物皆其造ル所ナリト是ニ於テ或ハ神ヲ稱シテ大原因ト爲シ或ハ大本根ト爲シ大極致ト爲シ至善ト爲シ至美ト爲シ至真ト爲シ其他純一無對ノ理、廣大無邊ノ理等皆神ノ別名ナリ而テ所謂神ハ五官ノ得テ觸ル、所ニ非サルヲ以テ夫ノ覺ノ能ノ知ル所ニ非ス一切實驗ノ術ノ施ス可キ所ニ非スシテ又考察ノ力ノ及フ所ニ非サルヲ以テ夫ノ推理ノ智ノ能ク知ル所ニ非ス然リ而テ凡ソ人タル者ハ古今ヲ問ハス遠邇ヲ別タス心中皆神ノ意象有ラサル莫シ是ニ於テ虛靈說家夫ノ良智ナル者ヲ按出シテ乃チ以爲ヘラク凡ソ所謂本來ノ意象ハ獨リ良智ノ力之ヲ窮測スルヲ得ルト此レ其智ノ機能ノ中ニ就イテ最モ良智ヲ貴フ所以ナリ

想像トハ世界實ニ有ル所ノ物ノ意象ヲ以テ材料ト爲シテ以テ其無キ所ノ意象ヲ講求スルノ謂ナリ之ヲ例ヘハ翼有ル馬若クハ黄金ノ山等ノ意象即チ是レナリ夫レ翼ナリ馬ナリ黄金ナリ山ナリ分チテ之ヲ言ヘハ皆實ニ有ル物ナリ今想像シテ翼ト馬トヲ合シ黄金ト山トヲ合シ因リテ翼有ル馬及ヒ黄金ノ山ノ二意象トヲ構ヘテ而テ此二物ハ實ハ有ルヲ無キナリ智ノ機能又諸種ノ力有リ曰ク追憶ナリ曰ク意象ノ聯接ナリ曰ク注意ナリ曰ク比較ナリ曰ク抽別ナリ曰ク推廣ナリ曰ク送降ナリ曰ク送昇ナリ追憶、注意、比較ノ三者ハ意義極テ明瞭ナルヲ以テ必スシモ之ヲ釋スルヲ須ニス意象ノ聯接

トハ一意象既ニ發シテ他ノ意象隨イテ發シテ以テ相聯接スルヲ謂フ而テ其因蓋シ三有リ一ハ時
 日若クハ地ノ相接スルナリ之ヲ例ヘハ今朝見聞セシ所ノ事物ニ由リテ昨日見聞セシ所ノ事物ヲ
 念ヒ一處ノ事物ニ由リテ其隣處ノ事物ヲ念フノ類是レナリ二ハ物類相呼フヲナリ之ヲ例ヘハ一
 獸ヲ見テ他ノ一獸ヲ念ヒ一禽ヲ見テ他ノ一禽ヲ念フノ類是レナリ三ハ原因効果ノ理ナリ之ヲ例
 ヘハ火ヲ見テ熱ヲ念ヒ水ヲ見テ冷ヲ念ヒ善事ヲ考ヘテ賞ヲ念ヒ惡事ヲ考ヘテ罰ヲ念フノ類是レ
 ナリ吾人日常諸種ノ思念相隨イテ發シ紛々擾々トシテ絶ユルヲ無ク又衆相會シテ閑話スルニ方
 リ一話ヨリ他話ニ移リ此ノ如クニシテ最後ノ話頭ニ及ヒテハ少モ最初ノ話頭ト相類セサルモ細
 ニ之ヲ尋ヌルハ皆意象ノ聯接ニ由リ輾轉シテ以テ是ノ如キニ至ルノミ

意象ノ聯接ノ類或ハ真ナル有リ或ハ謬ナル有リ其真ナル者ハ事ノ實迹ト合スル者ニシテ其
 謬ナル者ハ則チ之レニ反ス之ヲ例ヘハ太陽ノ意象先ツ發シテ光輝ノ意象之ニ次イテ發シ地
 球ノ意象先ツ發シテ回轉ノ意象之レニ次イテ發スルカ如キハ所謂實迹ト合スル者ナリ婦人
 孺子暗夜ノ意象ト妖怪ノ意象トヲ聯合シテ夜行ヲ怖ル、カ如キハ實迹ト合セサル者ナリ盜
 賊兇漢ノ屬他人ノ性命財產ト自己ノ利益トヲ聯合シ是ニ於テ偷盜若クハ殺人ノ行ヲ爲スカ
 如キハ意象ノ聯接ノ早謬レル者ニシテ其害タル實ニ大ナリ

抽別トハ一物若クハ一事ニ就イテ假リニ其二性若クハ數性ヲ抽別シ來リテ之ヲ講求スル

ヲ謂フ之ヲ例ヘハ采色長短等ノ如キハ物ノ有スル所ノ性ニシテ物ヲ外ニシテ所謂色采長短有ル
 ニ非ス然レモ吾人ノ此抽別ノ能有ルニ因リ物ニ就イテ特ニ其色采若クハ長短ヲ研究シテ餘ノ諸
 性ヲ問ハサルヲ得即チ算數ノ理ヲ學フ者ハ多ハ物ヲ外ニシテ專ラ數量ヲ講求スル有リ然レモ
 數ト云ヒ量ト云ヒ皆物ノ有スル所ノ一性タルニ過キササルヲ以テ算學ノ特ニ數量ヲ講シテ物ヲ問
 ハサルカ如キハ抽別ノ能乃チ然ラシムルナリ

推廣トハ一個若クハ數個ノ物ノ諸性ヲ推シテ之ヲ衆物ニ及ボスノ謂ナリ之ヲ例ヘハ杉若ク
 ハ槍ヲ見テ其性ヲ得因リテ之ヲ推廣シテ樹木ノ意象ヲ得テ以テ之レカ統名ト爲シ猴若クハ猪ヲ
 見テ其性ヲ得因リテ之ヲ推廣シテ野獸ノ意象ヲ得テ以テ之レカ統名ト爲スノ類是レナリ

凡ソ推廣シテ得ル所ノ意象ハ名クテ廣汎ノ意象ト曰フ單孤ノ意象ノ反對ナリ單孤ノ意象
 トハ誰甲、誰乙ノ類ニシテ獨リ甲若クハ乙ノ一人ヲ指ス故ニ凡ソ人名ハ皆單孤ノ意象ナリ
 又草木禽獸ニ在リテモ專ラ此何草若クハ彼ノ何樹此何禽若クハ彼何獸ヲ指スハ亦單孤ノ
 意象ナリ故ニ若シ漫然草木若クハ禽獸ト曰フハ皆廣汎ノ意象ナリ凡ソ草木凡ソ禽獸ヲ舉
 ケテ皆之ヲ指スカ故ナリ

推廣ノ効ハ抽別ト比較トニ由リテ之ヲ得之ヲ例ヘバ禽ノ意象ノ如キハ其初メ吾人一禽ニ就イテ
 其一喙兩足左右ノ翼有ルヲ見テ之ヲ他ノ一禽ニ比較シ獨リ其相同キ所ノ處ヲ取リテ毛羽ノ色若

クハ際足ノ大小長短等相異ナル所ノ細微ノ性ハ之ヲ除非シ是ノ如クシテ漸次ニ推廣シテ以テ禽ノ意象ヲ得ルナリ

凡ソ廣汎ノ意象ハ單孤ノ意象ノ專ラ一物ヲ指スカ如クナラサルヲ以テ其廣狹相同キヲ能ハス之ヲ例ヘハ草若クハ木ノ意象ハ植物ノ意象ニ比スレハ更ニ狹シ動物ノ意象ハ禽若クハ獸ノ意象ニ比スレハ更ニ廣シ此ノ如クニシテ漸次ニ推廣シテ世界ノ意象ニ至ルハ凡ソ實物ニ係ル意象皆之ヲ包該セサル莫シ即チ無形ノ理ニ在リテモ感・智・斷等ノ意象ハ精神ノ意象ノ包該スル所ナリ要スルニ廣汎ノ意象ハ事物ノ統名タルニ外ナラサルナリ

中古ノ時學士輩或ハ希臘プラトノノ説ヲ祖述スル有リ或ハアリストットノ説ヲ祖述スル有リプラトノノ説ヲ祖述スル者ハ以爲ヘラク凡ソ草木禽獸人類等一切總合ノ意象ハ實ニ其物有リテ存スト此一派ヲ名ケテ實存説ト曰ヘリ又アリストットノ説ヲ祖述スル者ハ以爲ヘラク總合ノ意象ハ特ニ物ノ名稱タルニ過キス此草木若クハ彼禽獸ヲ外ニシテ別ニ所謂草木若クハ禽獸ナル者有ルニ非スト此一派ヲ名ケテ空名説ト曰ヘリ最後又一説ヲ爲ス有リ曰ク凡ソ總合ノ意象ハ以テ眞ニ此物有リト爲ス可ラス又以テ純然空名ト爲ス可ラスシテ特ニ吾人ノ智慧ヨリ發スル所ノ一ノ思念ト云フ爾ト是ニ於テ又此一派ヲ名ケテ思念説ト曰ヘリ

意象ノ語ハ意象説ノ一派ニ在リテハ關係極テ大ナリ學者其レ記シテ忘ル、コ勿レ

選降ト選昇トハ其用全ク相反ス蓋シ選降トハ一廣汎ノ理ヨリ選ニ降リテ以テ單個ノ理ヲ得ルヲ謂フ之ヲ例ヘバ世界自ラ無上聖智ノ神有リ是レ所謂廣汎ノ一理ナリ是ニ於テ選降ノ工夫ヲ着ケテ以爲ヘラク苟モ無上聖智ノ神有ルハ世界萬物皆其造ル所ナリ又此神ハ大自在ニシテ能クセサル所無シ云々是ノ如キ者之ヲ選降ノ工夫ト謂フ

又例ヘバ物必ス原因有リ是レ廣汎ノ一理ナリ是ニ於テ一個ノ物ニ就イテ尋究シテ以爲ラク此物必之ヲ作りシ者有ル可シ又其此所ニ在ルハ必ス之ヲ齎ラセシ者有ル可シ云々是ニ知ル選降トハ高遠ノ理ヨリ選ニ降リテ卑近ノ理ニ及フ者タルコトヲ選昇トハ單孤ノ理ニ就イテ旁推シテ以テ廣汎ノ理ヲ得ルヲ謂フ之ヲ例ヘバ禽獸若クハ人ノ死滅スルヲ見テ因リテ旁推シテ以爲ヘラク凡ソ生氣有ルノ類皆死滅セサル莫シト是レ所謂選昇ナリ是ニ知ル選升トハ實際卑近ノ理ヨリ選ニ昇リテ高遠ノ理ニ及フ者タルコトヲ選降ト選昇トノ二者之ヲ名ケテ推理ノ二工夫ト曰フ

選降ノ事タル一原理ニ因リテ衆理ヲ抉出スルニ在ルヲ以テ既ニ眞ニ一原理ヲ得ルノ候ニ在リテハ其効果固ヨリ大ナリ未タ一原理ヲ得サルノ前ニ在リテハ往々推測ヲ爲シ假ニ定テ一原理ト爲シ因リテ選降ノ工夫ヲ下ス一理學家往々之レ有リ是時ニ在リテハ或ハ幸ニシテ事實ニ合スルコトヲ得テ前人ノ未タ發セサル所ヲ發スルコト有リ亦或ハ大謬戾ヲ致スコト有リ他無

シ其定テ原理ト爲ス所ハ本ト推測ニ過キササルヲ以テナリ物性學ノ精氣ニ於ケルモ亦推測ノ音ナルノミ

送昇ノ工夫ハ實地ノ考驗ニ因ル者ナリ之ヲ例ヘハ一物ノ他ノ一物ヲ牽引スルヲ考驗シ因リテ天下物類ノ皆牽引ノ力有ルヲ知ルカ如キ即チ是レナリ是ヲ以テ此工夫ハ藝術家ニ在リテ關係極テ大ナリ此レ感覺說ヲ爲ス者及ヒ特ニ實質說ヲ爲ス者ノ尤モ此工夫ヲ貴フ所以ナリ

感覺說ヲ爲ス者及ヒ實質說ヲ爲ス者ハ以爲ヘラク送昇ノ工夫ノ根據トスル所ハ實地ノ考驗ニ在リ之ヲ考驗シテ又之ヲ考驗シ此ノ如クニシテ屢々考驗シテ常ニ同一ノ現象ヲ得ルハ定テ以テ不易ノ一理ト爲ス是ノ如キノミト而テ虛靈說ヲ爲ス者ハ以爲ヘラク然ラス送昇ノ事ハ根據トスル所考驗ニ在ルニ似タルモ實ハ亦他ノ一不易ノ理ノ中ニ存ス不易ノ理トハ何ソヤ曰ク神ノ欺カサルノ理是ナリ蓋シ神ノ世界萬物ヲ造ルヤ之ヲ綜ルニ衆理ヲ以テシテ而テ神ハ朝ニ此理ヲ造リ夕ニ彼理ヲ造リ以テ我レヲ欺カス是ヲ以テ火ノ物ヲ燬シテ萬古變スルヲ無ク水ノ物ヲ濡スヲ萬古變スルヲ無シ凡ソ物理皆然ラサル莫シ所謂神ノ欺カサルノ理ナリ爾フニ吾人々類隱然此理ヲ信シテ之レニ安ニスル有リ是ヲ以テ一事ニ就イテ屢々考驗シテ同一現象ヲ得ルハ以爲ヘラク是レ一定理ナリト而テ復々疑ハス是故ニ送昇ノ工夫ハ

考驗ニ因ルト雖モ然レ其大本ヲ推スルハ實ハ神ノ欺カサルノ理ヲ信スルニ因ルノミ然ラズンハ考驗ノ得ル所如何ニ鞏固ナルカ如キモ終ニ推測臆定ニ過キササルノミ

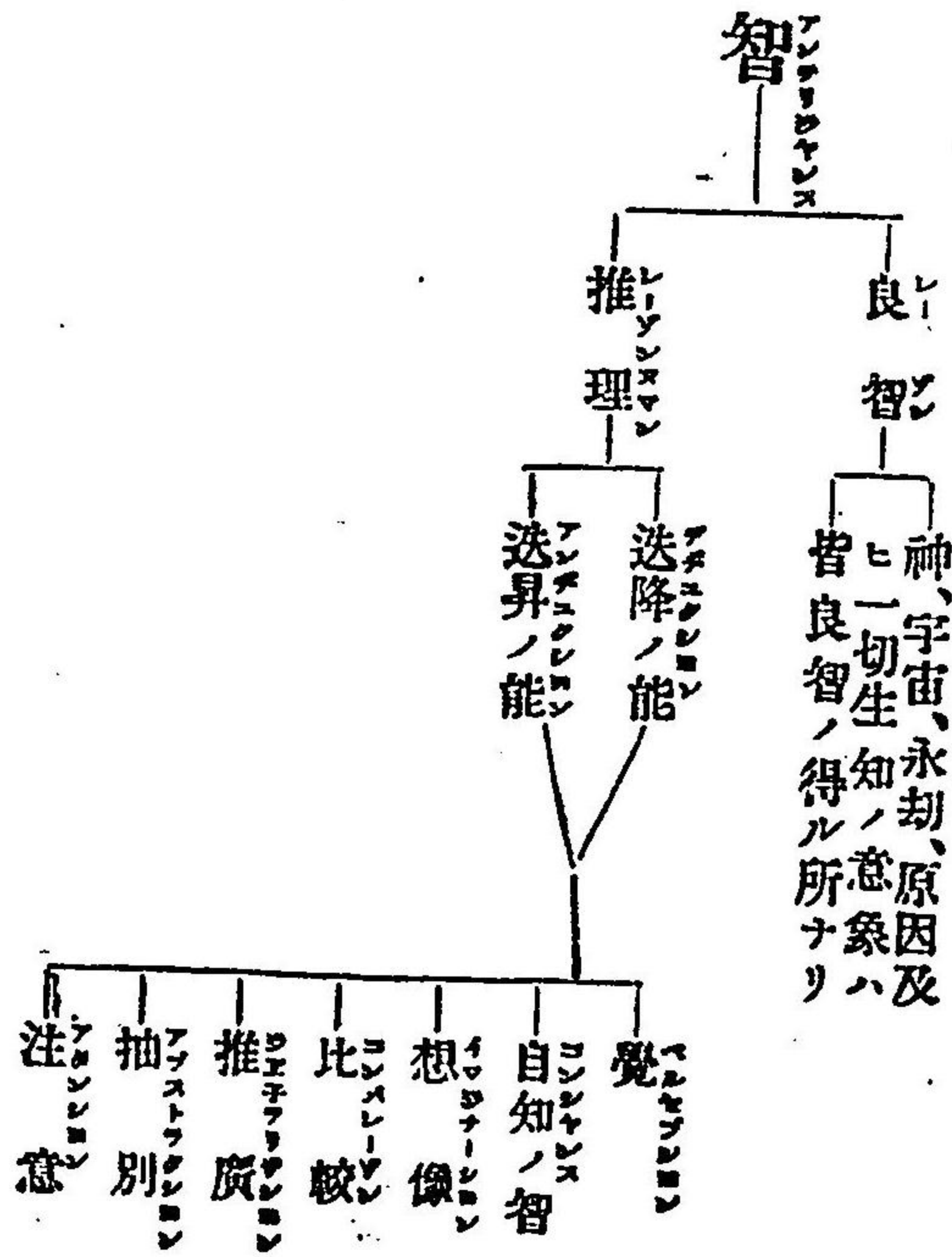
是ノ如キ者ハ古今虛靈家實質家ノ相與ニ爭辯スル所ニシテ理學家ニ在リテ關係極テ大ナリ

余敢テ軒輊ヲ其間ニ置カス唯學者ノ自得スルニ在ルノミ

推測ノ能ハ送降送昇ノ二工夫ヲ以テ成ル者ニシテ其吾人ノ學術ニ於ケル極テ益有リ願フニ五官ノ感覺ハ能ク吾人ヲシテ外物ニ接觸セシメ自知ノ能ハ能ク吾人ヲシテ心中ノ現象ヲ覺知セシメ比較ノ能ハ以テ物ノ同量ヲ明ニシテ想像ノ能ハ寄興比喻ヲ生シ及ヒ其他抽別ノ能ナリ推廣ノ能ナリ皆人生ニ於テ繁ル所極テ重シ然レ吾人學術ノ進關スルヲ得ルハ其大體實ニ理ヲ推シ義ヲ考ヘ送降送昇ノ工夫ヲ下シテ以テ前人ノ未タ發セサル所ヲ發スルニ因リテ然リ爰ニ智ノ諸能ニ係ル系譜ノ圖ヲ示ス

第七章 斷ノ機能

感ノ機能ハ人ヲシテ外物ニ接觸シ及ヒ憂喜哀樂等ノ情ヲ發セシム智ノ機能ハ人ヲシテ事物ヲ判別シ及ヒ知ル所有ルヲ得セシム若夫レ斷ノ機能ハ吾人ヲシテ爲スト有ラシム而テ其感及ヒ智



又反省ノ智ト曰ヒ亦心事ノ感覺ト曰フ

ト異ナル所以ノ者ハ其活潑進取ノ性アル所ノ處ニ存ス蓋シ感ノ外物ヲ接受シ及ヒ喜怒哀樂等ノ情ヲ發スルハ皆自ラ己ムヲ能ハサル者ナリ又智ノ事物ヲ判別スルモ亦然リ故ニ此二者ハ承受ノ性有リテ進取ノ情無シ若夫レ爲スト有ルコハ然ラス是時ヤ吾人ノ心全ク自由ニシテ少モ外物ノ爲メニ驅ラレテ然ルニ非ス其進取ノ性有リト爲ス所以ナリ

然リト雖モ吾人ノ爲スト有ルヤ常ニ茫然之ヲ爲スニ非スシテ必ス旨趣トスル所有リ是レ之ヲ行爲ノ旨趣ト謂フ而テ行爲ノ旨趣ハ或ハ感ノ接觸ニ因リテ生スル有リ或ハ情ノ感發ニ因リテ生スル有リ或ハ智ノ判別ニ因リテ生スル有リ之ヲ例ヘハ寒風ノ膚ヲ侵スカ爲メニ衣ヲ重テテ自ラ防クカ如キハ感ノ接觸ニ因リテ生スル旨趣ニ從フナリ又義烈ノ事ヲ見聞シ慷慨シテ爲スト有ルカ如キハ情ノ感發ニ從フ者ナリ若夫レ學術家既ニ一理ヲ得因リテ考驗ノ功ヲ施スカ如キハ智ノ判別ニ從フ者ナリ

然ト雖モ凡ソ行爲ノ旨趣ハ智ノ判別ニ因ル者ニ論無ク即チ感ノ接觸若クハ情ノ感發ニ因リテ生スル者ト雖モ必ス智ノ判別ノ干涉スル有リ然ラスハ未タ稱シテ眞ノ旨趣ト爲ス可ラス但其因ル所或ハ感ニ在リ或ハ智ニ在ルヲ以テ姑ク之レカ分別ヲ爲スノミ

斷ノ本分ハ爲スト有ル所ノ處ニ存スルヲ以テ眞能及ヒ習慣ノ行爲モ亦斷ノ中ニ列セサルヲ得ス然レモ此二者ト眞ノ斷ト大ニ異ナル有リ請フ此二者ヲ論シ然後再ヒ斷ノ能ニ及ハン

其能トハ吾人ノ學ハスシテ能クスル所ニシテ偶然トシテ發スル者ナリ之ヲ例ヘハ路ヲ行キ將クニ轉躓セントスルニ臨ミ遽ニ身ヲ跳ラシテ以テ自ラ保チ若クハ物ノ頭上ニ墜來ルニ遇フテ急ニ目ヲ瞋シテ自ラ防クカ如キハ思慮スル所有リテ然ルニ非スシテ皆其能ノ然ラシムル所ナリ獨人類ノミナラス即チ禽獸ノ類ノ能ク巢ヲ結ヒ雛ヲ養ヒ其他各々異能有リテ即チ狗ノ夜ヲ守リ狸奴ノ鼠ヲ捕フルカ如キモ亦良能ノ類ナリ

習慣トハ漸靡積累ノ功意ヲ用ユルヲ無クシテ爲スト有ルノ謂ナリ其五官手足ニ屬スル者有リ操作シテ自ラ勞トスルヲ無キカ如キ即チ是レナリ智慧ノ機能ニ屬スル者有リ讀書シテ自ラ勉トスルヲ無キカ如キ即チ是レナリ道德ニ屬スル者有リ善惡ノ行ニ安ンスルカ如キ即チ是レナリ凡ソ操作ナリ學問ナリ道德ノ行ナリ其初ヤ自ラ勉メテ之ヲ爲シテ極テ苦ム可キヲ覺フモ其後ヤ安ンシテ之ヲ行フニ至ル是レ習慣ノ行爲ナリ故ニ昔人習慣ヲ謂テ第二ノ性ト爲スハ是レカ爲ナリ

其智ナリ習慣ナリ行爲ニ屬スト雖モ皆自ラ知ラスシテ爲ス所ニシテ斷ノ行爲ト深ク相異ナリ蓋シ斷ノ行爲ハ明ニ自ラ其然ル所以ヲ知リテ之ヲ爲ス者ナリ

凡ソ人ノ行、善惡ノ別有ル所以ノ者ハ斷ノ機能乃チ然ラシム何ソヤ感ノ機能ハ吾人ヲシテ善ヲ愛シ惡ヲ憎マシメ智ノ機能ハ吾人ヲシテ善ヲ知リ惡ヲ知ラシム若夫レ之ヲ行事ニ發スルコトハ獨リ斷ノ機能ノ任スル所ナリ而テ善行ノ褒ム可ク惡行ノ貶ル可キハ吾人心中自由ノ性有ルカ故ナリ

リ若シ自由ノ性無クシテ獨リ外物ノ爲メニ牽引セラレテ自ラ已ムコト能ハサルコトニ磁石ノ鐵ニ於ケルカ如クナルハ是レ善ヲ爲スモ吾人ノ功ニ非ス惡ヲ爲スモ吾人ノ罪ニ非スシテ褒貶毀譽並ニ謂レ無キニ屬センノミ

吾人ノ自ラ斷シテ爲スト有リ若クハ爲サ、ルコト有ルハ自由ノ性有ルカ爲メナリ但其爲スト有リ若クハ爲サ、ルコト有ルハ偶然ニシテ爾ルニ非スシテ必ス旨趣トスル所有リ前ニ所謂行爲ノ旨趣ナリ而テ行爲ノ旨趣有ルカ爲メニシテ學士輩或ハ謬テ吾人ノ行爲ヲ以テ皆一旨趣ノ催發スル所ニシテ乃チ自由ノ性無シト爲ス者有リ是レ思ハサルノ甚キナリ吾人ノ行ヲ出スノ前必ス一二旨趣ノ來リテ我レヲ挑催スル有リ之ヲ例ヘハ肉身ノ欲ハ我レヲ誘フテ淫酒ヲ縱ニセシメント欲シ道德ノ旨義ハ我レヲ導イテ善ヲ爲サシメント欲ス其日常瑣細ノ事苟モ自ラ其然ルヲ知ルニ足ル者ハ皆所謂旨趣有ル者ナリ然レモ吾人ノ此等ノ旨趣ニ於ケルヤ選擇シテ自ラ決スルコトヲ得故ニ如何ニ善ノ善キヲ知リ惡ノ惡キヲ知ルモ苟モ自ラ決スルハ必ス善ヲ捨テ、惡ヲ取ルコトヲ得夫レ其選擇スルコトヲ得是レ其自由ノ在ル處ナリ

法國學官ノ虛靈說ハ心ノ自ソウル山ヲ主張スルコト尤モ甚シ若夫レ意象說ヲ倡フル者ノ如キハ同ク虛靈說ニ屬スト雖モ然レモ往々行爲ノ斷ヲ以テ專ラ智慧ノ左右スル所ト爲ス即チ古昔ソクラットノ如キプラトンノ如キ皆以爲ヘラク人ノ或ハ不善ヲ爲スハ眞ニ善ノ善タルヲ

知ラサルノ故ナリト知行合一ノ說ナリ是ニ於テ凡ソ惡行ヲ以テ皆惡見ノ類ト爲ス又意見說ノ一派中 因應ノ理ヲ倡フル者ノ如キハ全ク心ノ自由ヲ以テ有ルヲ無シト爲スニ至ル意見說ノ章ニ詳ナリ

因應ノ說ニ以爲ヘラク凡ソ人ノ爲スヲ有ルハ必ス心外ノ原因アリテ已レ之ニ應スルニ由リテ然リト是ニ於テ心ノ自由ヲ以テ有ルヲ無シト爲ス蓋シ理學ノ說極テ衆多ナリト雖モ之ヲ要スルニ實質說ト虛靈說ト因應ノ說ト自由ノ說ト是レ今日ニ在リテ學士ノ異ヲ對シテ相攻擧スル所以ナリ

○心ノ自由一名道德ノ自由

心ノ自由トハ吾人ノ能ク自ラ決スル所ノ處ニ就イテ言フ政治ノ自由及ヒ身體ノ自由ト自ラ別ナリ蓋シ心ノ自由ハ常ニ有リテ政治ノ自由ト身體ノ自由トハ常ニ有ルニ非ス民庶無識ニシテ議政ノ權ニ據ルニ任ヘサルカ如キハ是レ政治ノ自由無キナリ手足痿痺シ若クハ束縛桎梏ヲ受クルカ如キハ是レ身體ノ自由無キナリ若夫心ノ自由ハ一切外物ノ得テ滅スル所ニ非ス我レ縱令ヒ縲絏ノ中ニ在ルモ苟モ自ラ決シテ云々セント欲スルハ唯之ヲ行爲ニ發スルヲ得サルノミ其自ラ決スルヲ得ルヲハ身體ノ自由有ル時ト少モ異ナルヲ無シ

心ノ自由ノ性有ルヲハ之ヲ實際ニ考驗スルハ尤モ明瞭ニシテ疑ヲ容レサルヲ見ル何ソヤ吾人夫ノ自知ノ能ニ頼リテ一タヒ反觀スルハ我心ノ奥底ニ於テ活潑自由ノ性有リテ善ヲ爲サント欲セハ之ヲ爲シ惡ヲ爲サント欲セハ亦之ヲ爲スヲ得可クシテ乃チ自ラ決スルハ一事ノ自由ニシテ少モ他ノ妨碍ヲ受ルヲ無キヲ極テ明ナリ是ニ知ル古來豪傑ノ士ノ或ハ戰陣ノ間ニ在リ身ヲ挺シテ國ノ爲メニ節ニ殉シ或ハ倡說スル所有リテ以テ廣ク人類ニ益セント欲シテ一世ノ人ノ爲メニ猜忌セラレ終ニ非命ノ死ヲ致セシカ如キハ彼レ皆自ラ信スルノ篤キカ爲メニシテ是ニ至リタル者ニシテ初ヨリ逡巡依違シテ肯テ他人ノ先ヲ爲サス若クハ陽ニ其說ヲ變シテ以テ禍ニ免ルルヲ得ルノ術ヲ知ラサルニ非サルナリ曩キニ此輩ヲシテ自ラ決シテ身ヲ保ツヲ思ハシメハ特ニ一瞬間ノ事ノミ彼レ唯正義ノ旨趣ト利己ノ旨趣トニ於テ撰擇スル有リ是ニ於テ自ラ斷シテ正義ノ旨趣ニ從フ是レ其軀命ヲ捐棄シテ自ラ避ケサル所以ナリ

且夫レ吾人一事ヲ爲サント欲シテ其事少ク重大ナルトキハ必ス深く思考シテ敢ヘテ漫然緒ニ若クハ無シ然ル所以ノ者ハ何ソヤ自ラ決スルコトノ自由ナルコトヲ知ルカ故ナリ若シ常ニ旨趣ノ爲メニ牽引セラレテ絶ヘテ自ラ肆ニスルコトヲ得サルトキハ何ノ思考ス可キコトカ之レ有ラン管此レノミナラス苟モ自ラ思考シテ得サルトキハ朋友ニ就イテ諮詢シテ而テ朋友モ亦必ス自ラ思考シテ然後以テ我レニ示教スル有リ若シ心ノ自由無キトキハ何ソ人ニ諮詢スルヲカ之レ有ラ

ン人モ亦何ソ我レニ示教スルコカ之レ有ラン
又吾人一事ヲ爲シテ善キルハ中心自ラ喜ヒテ以爲ヘタク我レ之ヲ得タリト若シ惡キルハ悔恨シ
テ措クコト能ハス是レ正サニ道德ノ由リテ立ツ所ナリ若シ心ノ自由無キルハ何ノ自ラ喜フ可キコ
カ之レ有ラン何ノ悔恨ス可キコカ之レ有ラン而テ道德ハ則チ地ニ墜チンノミ

法國學官ノ虛靈說ニ在テハ心ノ自由ヲ證スルコト常ニ人事ノ實際ニ於テスルコト茲ニ叙スル
所ノ如シ若夫レ他ノ虛靈說即チ神物一體ノ說ノ如キハ多クハ玄妙ノ理ニ根據シテ以テ人心
自由ノ空幻タルコト示ススピノザノ如キ即チ是レナリ又意象說中因應ノ說ヲ倡フル者モ
亦然リヘーゲルノ如キ即チ是レナリ大低心ノ自由ヲ主トスル者ハ行爲ノ旨趣ニ就イテ撰擇
スルコトヲ得ルコト示シ因應ヲ主トスル說ハ吾人ノ決斷ノ必ス行爲ノ旨趣ノ力ニ應シテ發ス
ルコトヲ示ス之ヲ要スルニ行爲ノ旨趣ノ語ハ理學家ノ習用スル所ナルヲ以テ學者須ク記シテ
忘レサル可シ

夫レ人ノ生タルヤ宇宙ノ中ニ立チ永劫ノ間ヲ經テ萬物ニ圍繞セラレ或ハ目ニ采色ヲ見或ハ耳ニ
聲音ヲ聞キ或ハ鼻ニ臭香ヲ感キ或ハ口ニ甘辛ヲ味ヒ或ハ肌膚ニ寒熱ヲ覺ヘ喜怒哀樂以テ情ヲ動
シ或ハ比較シ或ハ記憶シ或ハ想像シ或ハ判別シ或ハ手ヲ伸ヘテ物ヲ取り或ハ趾ヲ擧ケテ歩行シ
或ハ思考シ或ハ自ラ決ス凡ソ是レ皆感智斷ノ三機能ヨリ發スル現象ニシテ紛々擾々端倪ス可ラ

ス然レモ感ナリ智ナリ斷ナリ其由リテ出ル所ハ則チ一ナリ是ヲ以テ智ノ判別或ハ五官ノ感スル
所ニ由リテ發シ情ノ動或ハ智ノ判スル所ニ由リテ發シ斷ノ能或ハ感ニ隨フテ發シ或ハ智ニ由リ
テ發ス之ヲ要スルニ此三機能交々發シ互ニ出テ、其迅速ナルコト電火石光ノ如キモ仔細ニ内觀ス
ルルハ其發スルヤ必ス後先ノ別有リテ決シテ同一時ニ發シテ同一時ニ輟ムニ非ス然ル所以ノ者
ハ他無シ其本根固ヨリ純一ナルヲ以テナリ本根トハ何ソヤ心ノ謂ナリ夫此本根ハ理學家或ハ名
ケテ精神ト曰フ肉體ニ別ツノ稱ナリ或ハ名ケテ我ト曰フ非我即チ外物ニ別ツノ稱ナリ或ハ名ケ
テ主人公ト曰フ心中ノ衆意象ヲ統御スルノ稱ナリ或ハ名ケテ實相若クハ本根ト曰フ一切生滅
有ル空華ノ假想ニ對スルノ稱ナリ

第八章 精神

夫レ所謂精神ノ物タル其狀果シテ如何曰ク是レ虛々靈々目視ル可ラス耳聽ク可ラスシテ而テ肉
體ト俱ニ滅スルコト無キ者ナリ蓋シ肉體ハ他ノ實物ト同ク采色、長短、輕重等ノ諸性有リ又其形ヲ
成スヤ衆質相倚リテ以テ一體ヲ爲シテ初ヨリ純一ナルニ非ス又新陳代謝シテ常ニ同一ナルニ非
ス若夫レ精神ハ純一ニシテ且變易有ルコト無シ純一ナリ故ニ分析ス可ラス變易有ルコト無シ故ニ今
日ノ我ト明日ノ我ト明年ノ我ト十年後ノ我ト常ニ一ニシテ別物ニ非ス蓋シ吾人齡ノ長スルニ隨

レ知識益々長シ又其居ル所ノ處ニ隨フテ意嚮或ハ變スル有リ嗜好或ハ易ハル有リ然レモ故我ト
今我ト異ナルニ非スシテ前ノ事ハ大抵記憶シテ忘ル、^ト無シ是レ其常々同一ナルノ明證ニ非ス
乎

管此レノミナラス肉體ノ物タル其能ク自ラ運動シテ爲ス^ト有ルハ特ニ機關ノ力有ルニ由ルノミ
肺ノ翕張、胃ノ消化即チ是レノミ若夫レ手足ノ如キハ自ラ運動スル^ト能ハスシテ必ス命^ヲ心ニ
聽ク者ナリ且機關ノ運動ハ物理ノ自然ニ出ル者ニシテ自ラ意有ルニ非ス肺ノ翕張、胃ノ消化ハ
我レ初ヨリ之ヲ翕張シ之ヲ消化スルニ意有ルニ非サルナリ若夫レ精神ハ然ラスシテ能ク自ラ活
潑々地ノ作用ヲ發シテ且ツ明ニ自ラ其然ル^ト知ル是レハ則チ肉體ノ物タル自山ノ性無クシテ
精神ノ物タル自山ノ性有リ其相異ナル^ト此ノ如シ

精神ノ肉體ニ於ケル其質ノ相異ナル^ト前ニ舉ル所ノ如シ精神ハ虛ニシテ肉體ハ實ナリ精神ハ靈
ニシテ肉體ハ頑ナリ精神ハ思念、感覺、決斷ヲ以テ性ト爲シテ肉體ハ采色、大小、輕重ヲ以テ
性ト爲ス精神ハ純一ニシテ肉體ハ複雜ナリ精神ハ悠久ニシテ肉體ハ變易有リ精神ハ自山ニシテ
肉體ハ自山ノ性無シ願フニ此二者其實此ノ如ク相異ニシテ而テ吾人此二者ヲ以テ生^ヲ爲ス者ハ
抑々何ノ狀ナル乎身體羸憊スル^トハ神氣或ハ爲メニ沮喪スルアリ是レ體機ノ勢ノ精神ニ波及ス
ル有ルノ徵ナリ發憤シテ自ラ斷スル^トハ病者或ハ起坐スル^トヲ得是レ精神ノ力能ク體機ヲ鼓舞

スルノ證ナリ願フニ此二者性質相反シテ而テ其交渉此ノ如ク其深密ナルハ果シテ何ノ故ニ由リ
テ爾ル乎

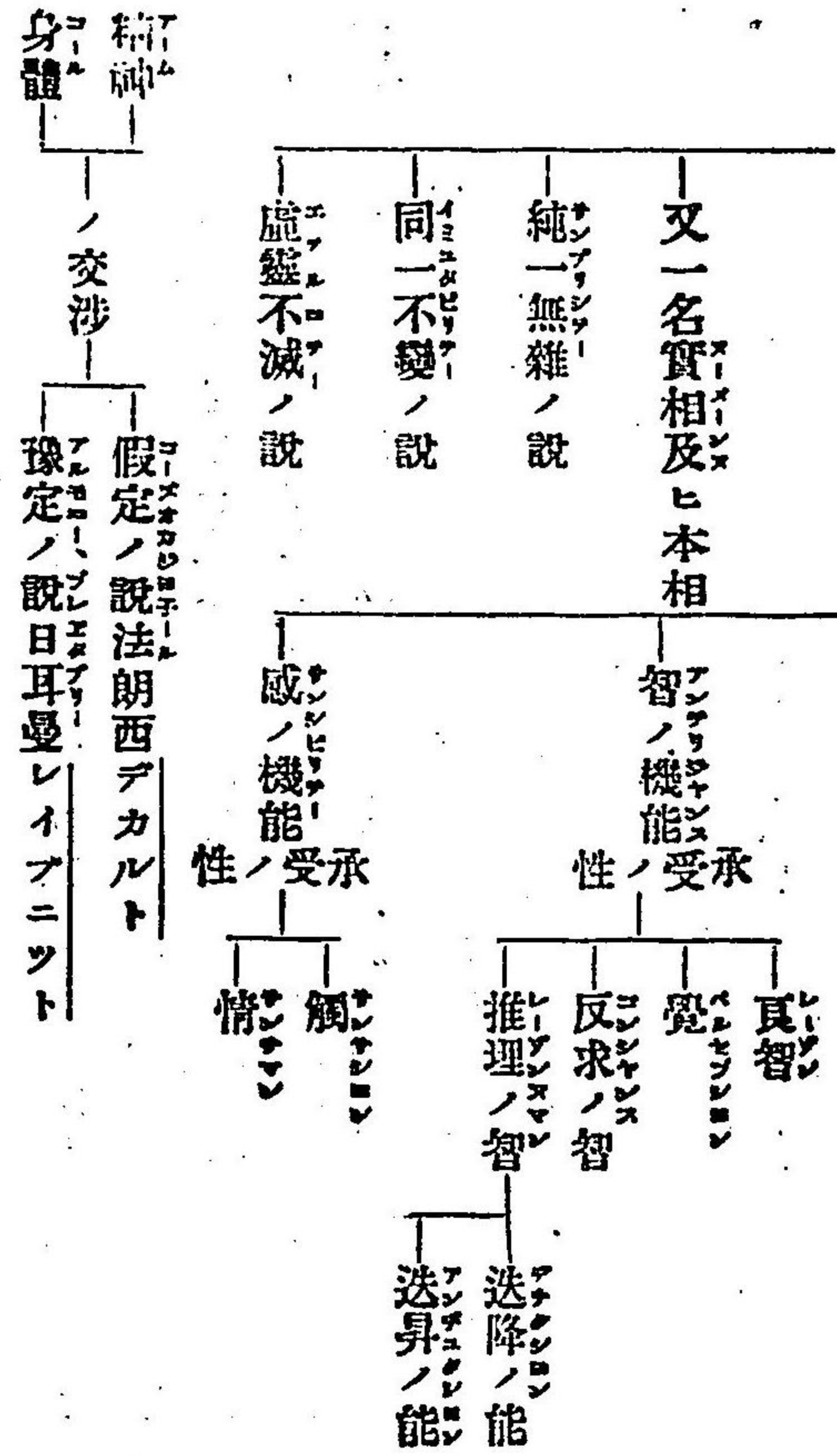
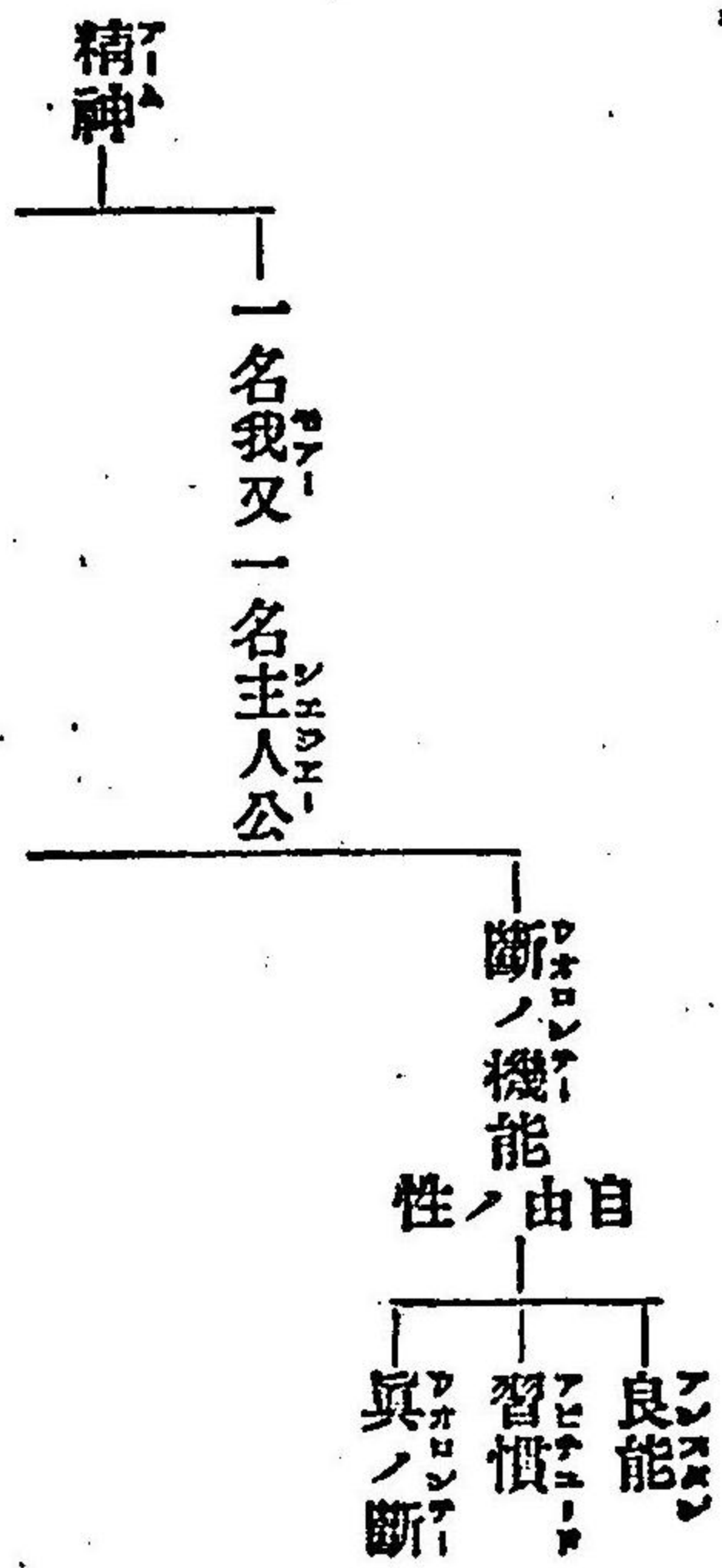
此一問ニ係リテハ古來虛靈ノ一派ヲ倡フル者其說一ニシテ足ラス即チ法國學官ノ理學モ亦未タ
一定ノ見有ラスシテ諸說並ニ之ヲ存セリ是レ之^ニ心身相交^ルノ說ト謂フ

此一事ニ係リテ法國デカルトノ說ニ以爲ヘラク身體ト精神ト固ヨリ交渉有ルニ非ス唯神ノ聰
明聖智ナル吾人ノ精神ヲシテ身體ノ動ニ隨フテ感スル^ト有ラシメ身體ヲシテ精神ノ斷ニ隨
フテ動ク^ト有ラシム更ニ之ヲ言ヘハ身體能ク精神ヲ感シ精神能ク身體ヲ動カスニ非スシテ
身體ノ動クハ即チ精神ノ因リテ感スル所以ナリ精神ノ斷スルハ即チ身體ノ因リテ動ク所以
ナリ二者相因リテ感シ相因リテ動イテ初ヨリ感ト動トニ意有ルニ非サルナリト是言ヤ之ヲ
名ケテ假因ノ說ト謂フ

日耳曼レイブニツトノ說ニ以爲ヘラク身體精神ノ二者ノ交渉ハ決シテ相因テ生スルニ非ス
蓋シ神豫メ此二者ヲ調諧シテ相因リテ動クカ如クナラシム是ヲ以テ精神自ラ斷シテ手ヲ揚
クント欲スル^トハ手隨フテ輒チ揚カリ趾ヲ歩セント欲スル^トハ趾隨フテ輒チ歩ス夫レ其手
ノ揚カリ趾ノ歩スルハ並ニ精神ノ斷ニ因ルニ非スシテ手ノ揚カリ趾ノ歩スル^ト精神ノ斷ス
ルト適マ相調諧スル者ハ神豫メ其是ノ如クナル^トヲ定ムルカ故アリレイブニツト是ニ於テ

二譬有リ一ハ之ヲ音樂ノ節奏ニ取リ一ハ之ヲ時辰儀ニ取ル其時辰儀ノ譬ニ曰ク爰ニ良巧ノ匠有リ時儀若干數ヲ作リテ之ヲ並列セシニ其針ノ廻運スルコト少モ違フテ無クシテ其幾時若クハ幾分ヲ指示スルコト皆同シ然レモ衆時儀ハ初ヨリ相諧スルニ意有ルニ非ス又甲ノ時儀ノ廻轉ト乙ノ時儀ノ廻轉ト少モ相因ルニ非ス而テ其時辰ヲ示スコト此ノ如ク相諧スルハ匠者ノ巧乃チ然ラシム云々其音樂ノ譬ハレイブニツトノ本意ヲ表スルニ於テ甚適切ナラサルヲ以テ茲ニ之ヲ略スレイブニツトノ說ハ之ヲ名ケテ神ノ豫定說ト曰フ

爰ニ感智斷並ニ其本根トスル所ノ精神ニ係ル系譜ノ圖ヲ示ス



第九章 論 理

凡ソ世界庶物此ノ如ク其滋シト雖モ要皆定理ノ綜フル所ニ非サル莫シ即チ物理學、物化學、動物學、其他實物ノ學ハ皆此等定理ヲ搜抉スルコトヲ以テ主ト爲ス者ナリ即チ吾人智慧ノ思念ノ如キモ亦一定ノ理ニ循フテ條暢シテ決シテ偶爾トシテ發シテ前後少モ相關セサルヲ致スニ非ス

之ヲ例ヘハ一事ヲ論スル者首ニ冒頭ノ論ヲ置キ之ニ次クニ承接ノ論ヲ以テシテ終ニ乃チ落結ノ論ヲ置キ以テ一編ノ旨趣ヲ圓成スルカ如キハ即チ思念ノ次序ニシテ即チ論理科中ノ事ナリ是ヲ以テ論理ノ法宜キヲ得ルハ旨意或ハ理ニ違フコト有ルモ文章ニ就イテ言フハ前後ニシテ矛盾ノ病無キコトヲ得論理ノ法宜キヲ得サルハ旨意理ニ合スルモ議論ノ間曖昧若クハ紊亂ノ病ヲ免レサルニ至ル

論理ノ一科ハ希臘アリストット創メテ之レヲ立テ、爾來之ヲ祖述シテ更ニアリストット未タ發セサル所ヲ發セント欲スル者有ルモ終ニ其上ニ出ルコト能ハス歐洲中古ノ時ニ至リテ學士輩此一科ヲ脩ムルコト極テ盛ニシテ理學ノ他ノ諸科ハ殆ント之ヲ廢スルニ至レリ其後英國ベコン法國デカルト相踵イテ起ルニ及ヒ口ヲ極テアリストットノ論理ノ害有リテ益無キヲ論シテ乃チベコンハ之ニ易フルニ考驗ノ法式ヲ以テセント欲シデカルトハ之ニ易フルニ考驗ト推測トノ二者ヲ以テセント欲セリ然レモ此二人皆未タ眞ニ論理ノ何物タルコトヲ省スルニ及ハサリキ何ヲ以テ之ヲ謂フ夫レ考驗ナリ推測ナリ皆眞理ニ違スルコトヲ求ムルノ法式ニシテ即チ一種ノ術ナリ若夫レ論理ハ言論ノ理ヲ講求シテ之ヲ示スコトヲ主トシテ即チ一種ノ學ナリ法式ハ術ナリ故ニ未タ得サル所ノ理ヲ得ルニ於テ益有リ論理ハ學ナリ故ニ既ニ得ル所ノ理ヲ論叙スルニ於テ益有リ此二者初ヨリ相混スルコトヲ得ス但論理科中法式ヲ論スル有リ然レモ是レ唯此ノ如キ者之ヲ某法式ト

曰ハ彼ノ如キ者之ヲ某法式ト曰フコト示スニ過キサルノミ
 中古學士ノ專ラ論理ノ一科ヲ脩メテ其他ニ及ハサリシハ他無シ謬リテ論理ヲ以テ眞理ヲ得ルノ術ト爲セシカ故ナリ此レベコン、デカルトノ深ク之ヲ非トセシ所以ナリ然レモ此レ自ラ中古學士ノ罪ニシテアリストットノ罪ニ非サルナリ之ヲ要スルニ論理ノ學ハ終ニ之ヲ理學科中ニ列セサルヲ得スシテアリストットノ垂示セシ所確乎トシテ易フ可ラス是ヲ以テ後世日耳曼カント、ヘーゲルノ徒モ亦皆之ヲ論道セリ而テカントハ則チ云ヘリ論理ノ一科ニ係リテハアリストットノ言之ヲ盡セリト

然ト雖モ論理ノ學ハ之ヲ脩ムルニ於テ現ニ得ル所アリテ之ヲ脩メサルニ於テ現ニ失フ所有ルニ非スプラトントノ如キハ曾テ未タ此學ノ何物タルヲ知ラサリシモ其文章ノ粲然トシテ條理有ルコト後世ノ及フ所ニ非スシテ其他近代ノ學士ニ在リテモ曾テ此學ヲ窺ハスシテ而テ其議論自ラ整齊ナル者亦極テ衆シ之ヲ要スルニ論理ノ學ハ吾人思念言論ノ中自條理ノ存スル有リテ此ノ如クスルハ文章簡明ニシテ意義貫徹スルコトヲ得然ラサレハ冗漫曖昧ニ陷イルコトヲ指示スルコト主トスト云フ爾

○明瞭及ヒ確定

エライダス、セキヤ、ノド

吾人自ラ反シテ喜フ有リ若クハ悲ムコト有ルコトヲ知リ物ヲ見テ其采色ヲ知リ若クハ摩擦シテ其堅脆ヲ知リ往事ヲ記得シテ之ヲ追念スルハ吾人自ラ其反省ノ智及ヒ五官記憶ノ報スル所ノ確實ナルコトヲ知リテ復タ疑ヲ置クコト無シ是ノ如キ者所謂確定ナリ

是故ニ吾人ノ心ニ於テ確定シテ疑ハサル所以ノ者ハ其故蓋シニ有リ一ハ事理ノ明瞭ナルコトナリ一ハ吾人ノ心ト物事ト相接スルコトナリ何ソヤ若シ事理明瞭ナラサルハ初ヨリ確定スルコトヲ得ルノ道無キナリ若シ物事ト接セサルハ初ヨリ其明瞭ナルト否ラサルトヲ知ルノ道無キナリ然ト雖モ吾人ノ物事ニ接スルヤ各々自ラ機能ノ在ル有リ故ニ外物ハ必ス五官ヲ經テ之ニ接シ心中ノ現象ハ必ス反求ノ智ヲ以テ之ニ接ス其他皆自ラ一定ノ能有ラサル莫クシテ前ニ性理ノ章ニ於テ之ヲ論セリ是レ正サニ論理ノ科ノ必ス性理ノ科ニ次ク所以ナリ

○假フコトハヒトナリ定

確定ナル者ハ純一ニシテ度級有ルコト無シ之ヲ例ヘハ我レ反觀シテ思念シ以テ我精神ノ存スル有ルヲ知リ外物ニ接シテ其現ニ宇宙ノ間ニ在ルヲ知リ一事ノ行ハル、ヲ見テ其永劫ノ中ニ發スルヲ知リ自ラ省ミテ我カ行ノ善タリ惡タルヲ知ルカ如キハ皆確定ニシテ其間絲毫モ疑ノ存スル無シ是ニ知ル凡ソ確定ノ類ハ苟モ有レハ則チ有リ無クハ則チ無クシテ初ヨリ上下ノ度級有ル

ニ非サルコトヲ若夫レフコトハヒトナリ假定ハ則チ然ラス何ソヤ假定トハ凡ソ事多クハ此ノ如クナル可ク若クハ彼ノ如クナル可シト云フ爾是故ニ其事ノ如何ニ信ス可キモ未タ所謂確定ノ狀ヲ成スニ至ラスシテ高下ノ差別極テ多シ之ヲ例ヘハ一奇事有ルニ遇フテ十人之ヲ傳稱スルハ一兩人之ヲ傳稱スルニ比スレハ更ニ信ヲ置クニ足ル然レハ猶ホ吾人ヲシテ之ヲ確信セシムルニ至ラス他無シ或ハ訛傳有ル可クハナリ若シ平生我レノ信シテ疑ハサル者來リテ我レニ告クルニ其親ヲ見シ所ヲ以テスルニ及ヒテハ我レ之ヲ信シテ復タ一點ノ疑ヲ著クルコト無シ此レ所謂確定ナリ

是故ニ凡ソ事如何ニ信ス可キカ如クナルモ其中一點ノ疑ノ猶ホ存スル有ルハ終ニ假定タルヲ免レス論理家はニ於テ慣用ノ例有リ曰ク爰ニ一桶有リテ其中千個ノ小球子ヲ實レテ其五百ハ白色ニシテ五百ハ黑色ナリ人若シ偶然手ヲ入レテ一球子ヲ握ランニ或ハ白色ノ者ヲ得可ク或ハ黑色ノ者ヲ得ヘクシテ少モ豫メ信ヲ置ク可キ無シ此レ假定ノ度ノ最モ低キ者ナリ若シ千數ノ中就イテ更ニ白色ノ者ヲ増シテ黑色ノ者ヲ減スルハ白色ノ者ヲ増スニ隨フテ假定ノ度モ亦上級ニ登ルコトヲ得ン若シ更ニ白色ノ者ヲ増シテ九百九十九ニ至リテ黑色ノ者唯一個ナルハ是レ假定ノ度モ亦更ニ昇リテ其最高層ニ至ラン然レモ之ヲ要スルニ猶ホ未タ確定ト爲スヲ得ス何トナレハ握ル所或ハ九百九十九中ノ一白球ニ非スシテ千中一個ノ黑球ナルモ未タ知ル可ラサレハナ

是故ニ確定ナル者ハ極テ明瞭ニシテ半點ノ疑ヲ着ケサルノ謂ナリ但事理ノ類本ト一種ニ止マラサルヲ以テ確定ノ類モ亦一種ニ止マラスシテ或ハ思考ヲ須イラスシテ輒便チ生スル有リ之ヲ例ヘハ外物ノ寒熱堅脆ヲ知り自己ノ身ノ存スルヲ知り二ト二トヲ合セテ四ヲ成スヲ知ルノ類ハ皆思考ヲ須イサル者ナリ若夫學術深微ノ理ニ係リテハ必ス思考シテ之ヲ理會シ然後其確定シテ疑フ可ラサルヲ知ル此レ其相異ナル所以ナリ

吾人事物確定ノ理ヲ知ルニ於テ其機能各々異ナリ是ニ於テ古今理學士或ハ甲ノ機能ノ知ル所ヲ以テ確定ト爲シテ餘ハ皆之ヲ疑フ有リ或ハ乙ノ機能ヲ取ル有リ或ハ丙ノ機能ヲ取ル有リ或ハ一切ノ機能ヲ並取ル有リ或ハ一切ノ機能ヲ擧ケテ皆取ラスシテ即チ確定ナル者有ル
 一無シト爲ス有リ此レ正サニ理學諸種ノ說ノ由リテ興ル所ナリ之ヲ例ヘハ感覺說及ヒ實質說ノ如キハ五官ノ感觸ヲ以テ諸種確定ノ理ノ由リテ出ル所ト爲シテ智、斷ノ二機能ヲ以テ皆之ヲ感覺ノ中ニ列ス又意義說ノ如キハ外物ノ現象ヲ以テ皆空幻ナリト爲シテ獨リ智慧ノ思念スル所即チ無形ノ意象ヲ以テ確定ノ物ト爲ス又虛靈說ハ感、智並ニ之ヲ取ルヲ茲ニ敘スル所ノ如シ若夫レ確定ヲ以テ有ルヲ無シト爲ス者ハ懷疑說即チ是レナリ後ニ諸說ヲ論叙スルヲ待チテ方サニ明白ナラン

第十章 法 式

人ノ智有ルヤ以テ諸種ノ事理ニ透徹スルヲ得テ學術ノ類斯ニ發生シ斯ニ進闡ス然レモ若シ自ラ其智ヲ用ユルニ於テ法式宜キヲ得サルハ如何ニ聰敏ニシテ如何ニ勤勉ナルモ終ニ事理ニ透徹スルヲ能ハスシテ已マンノミ是レ論理家法式ニ於テ大ニ意ヲ致ス所以ナリ

法式ノ類頗ル多端ニシテ或ハ考 驗エクスペリヤンヲ主トスル有リ或ハ推 理レイゾンヲ主トスル有リ或ハ類 別クラシフィカシヨヲ主トスル有リ學術ノ目的トスル所異ナルハ用ユル所ノ法式モ亦隨フテ異ナルハ自然ノ理ナリ但何ノ法式ヲ問ハス必ス缺ク可ラサルニ事有リ何ノ謂ソヤ曰ク分析ト總合トノ二者是レノ

分析トハ一事一物ニ就イテ其複雜ノ處ヲ分析シテ之レカ研究ヲ易クスルノ謂ナリ醫師、生 理フィジヨロギヲ講求スル者臟腑神經ノ屬ニ就イテ各々固有ノ職ヲ搜索スルカ如キ及ヒ物化家六十五原質ヲ發見シ水、空氣等ノ物ニ就イテ其包ム所ノ諸質ヲ究ムルカ如キハ皆分析ノ法ニ類ル者ナリ又理學家、精神ノ機能ヲ分チテ智、感、斷ノ三ト爲シ及ヒ此三者ニ就イテ又諸種ノ用ヲ別ツカ如キモ亦分析ノ法ニ是レ由ル管此ノミナラス吾人日常瑣細ノ事ノ間知ラス識ラス此法ヲ用ユルヲ往々ニシテ然リ即チ一室ニ入り几案上雜置スル所ノ物ヲ見、某ハ書冊タリ某ハ筆墨タリ某ハ紙絹タ

ルヲ知リ又碟中ノ食物ノ如キ某ハ甘ナリ某ハ辛ナルヲ知ル凡ソ此レ皆分析ノ類ナリ之ヲ要スルニ分析ハ複雜ヨリ單純ニ入ルノ謂ナリ聚合ヨリ單個ニ赴クノ謂ナリ
總合トハ既ニ分析スル所ノ衆質ヲ合シテ再ヒ一體ト爲スノ謂ナリ故ニ總合ハ單純ヨリ複雜ニ入リ支節ヨリ全體ニ赴キテ正サニ分析ト表裡ヲ相爲ス者ナリ生理學家^{フィジヨロジスト}人體ヲ剖分シ頭、腦、臟腑其他諸種ノ官能ヲ窮究スルハ是レ分析ノ法ナリ既ニ然クシテ了リテ衆官能ノ相待チテ用ヲ爲ス所以ノ故ヲ究メ以テ一身調營ノ理ヲ得ルハ是レ總合ノ法ナリ
生理學家既ニ反求ノ智ニ頼リ人心中諸種ノ現象有リテ各々相異ナル所以ヲ知リ然後此等現象ノ盡ク統屬スル所ノ本根有リテ乃チ所謂精神ナル者ノ存スルヲ知ルカ如キモ亦總合ノ法ナリ分析ノ法ニ非サレハ以テ衆理ノ細ヲ得ル無シ總合ノ法ニ非サレハ以テ一理ノ統ヲ得ル無シ二者必ス相待チテ用ヲ爲ス者ナリ

○選降ノ法式

法式ノ類大別シテ二箇ト爲ス選降ノ法式ナリ選昇ノ法式ナリ前ニ舉ル所ノ分析總合ノ二者ハ何ノ法式ヲ論セス皆此レヲ以テ條目ト爲サ、ル莫シ若夫レ選降ト選昇トハ法式ノ名ニシテ分析總合ノ二者ト相混スルヲ得ス故ニ選降ノ法式中或ハ分析スルヲ有リ或ハ總合スルヲ有リ選昇

ノ法式ニ在リテモ亦同シ

選降選昇ノ二者ハ前ニ既ニ之ヲ論セリ即チ一大理ヨリ選ニ降リテ衆小理ニ入ル之ヲ選降ト謂ヒ衆小理ヨリ選ニ昇リテ一大理ニ入ル之ヲ選昇ト謂フ此二法式皆各々條則有リ先ツ選降ノ法式ヲ論シ然後選昇ノ法式ニ及ハン

選降ノ法式ハ一大理ヨリ下リテ衆小理ニ入ルヲ以テ^{カテゴロム、チアライノシヨウ、レロウム、チアノストロウ}法言、釋義、三句法、證、徵ノ三者ヲ以テ材料ト爲ス以下順次ニ此三者ヲ論セン

法言トハ理ノ最明白直截ニシテ既ニ考驗ヲ要セス亦議論ヲ須イスシテ即チ衆理ノ繫屬スル所ナリ之ヲ例ヘハ「凡ソ事皆原因無キハ莫シ、是レ法言ナリ」「善ト惡トハ混スルヲ得ス、亦法言ナリ」「事物皆宇宙ノ中ニ存シ永劫ノ間ヲ經、亦法言ナリ」「二ト二トヲ合シテ四ヲ成ス、亦法言ナリ」是ニ知ル凡ソ學術ノ類ハ各々皆一法言有リテ之レカ根基ヲ爲シ以テ衆理ヲ綜フルヲ即チ論理ノ學ノ如キモ亦一法言有リ曰ク凡ソ事物同時ニ有リテ且ツ無キノ理無シ

所謂「凡ソ事物同時ニ有リテ且ツ無キノ理無シ」ノ一語ハ卑近ニシテ笑フ可キカ如クナルモ言論文章ノ大法實ニ此レニ外ナラス蓋シ文章ノ妙ナル者、波瀾錯綜變化極無シト雖モ細ニ之ヲ察スルハ一意貫串シテ首ヨリ終ニ至リ斷絶スルヲ無クシテ其間衆意思ノ錯綜起伏スル有ルハ要スルニ本旨ヲ明ニスルノ具タルニ過キササルノミ若シ然ラスシテ首ニ論スル所

ト尾ノ結フ所ト意旨相容レサルキハ是レ正サニ事物同時ニ有リテ且ツ無キナリ豈理ナラン哉

是故ニ所謂法言ハ明言ニシテ思考ヲ須イサルノ理ナリ但尤モ慎戒ス可キ者蓋シ二事有リ一ハ明白ノ理ニ非サル者ヲ認メテ誤リ明白ノ理ト爲スナリ一ハ眞ノ明白ノ理ニ就イテ強イテ解釋ヲ施スナリ古昔學術蒙昧ノ時往々一時ノ謬見ヲ誤認シテ明白ノ理ト爲シ此レニ據リ傳會シテ諸種ノ說ヲ爲セリ又眞ノ明白ノ理ニ就イテ強イテ解釋ヲ施スルハ其言必ス迂陋ニシテ人ノ笑ヲ取ルニ至ル之ヲ例ヘハ二ト二トヲ合シテ四ヲ成スノ理ノ如キ將サニ如何カ之ヲ解釋セントスル乎
釋義トハ言辭若クハ事物ニ就イテ其意義若クハ狀性ヲ解釋スルヲ謂フ是レナリ
事物ニ係リテ解釋ヲ施ス者ハ決シテ自ラ肆ニスルヲ得スシテ凡ソ其事物現ニ有スル所ノ諸性ハ皆之ヲ擧ケサル可ラス若夫レ言語文字ヲ解釋スル者ハ然ラス若シ一字ニ就テ己レ更ニ新意ヲ附シテ前人ノ用ヒシ所ニ依ラサラント欲スルキハ必スシモ爲ス可ラサルヲ無シ但是時ニ在リテハ豫メ之ヲ示スヲ要スルノミ是故ニ人若シ我レ某書ヲ著ハシ其中ニ於テ馬ノ字ノ義ヲ釋シテ牛ト爲シテ之ヲ用イント欲スト曰フモ決シテ事實ニ於テ害スル所有ルニ非スシテ唯人ノ爲メニ怪笑セラル、ニ過キサルノミ
又直チニ物ノ釋義ニ係ル時ニ在リテモ其物若シ新ニ發見スル所ニシテ其有スル所ノ諸質未タ知

ル可ラス又古來用ユル所ノ名稱無キニ因リ別ニ名ヲ附スルキハ是レ其釋義タル既ニ物ニ係リ又名ニ係ルヲ固ヨリ言ヲ待タサルナリ
爰ニ人ニ係ル釋義ノ例ヲ擧ケンニ曰ク「人ハ動物ノ智慮有ル者ナリ」此レ以テ釋義ノ法ト爲ス可シ
凡ソ釋義ノ法ハ其物ノ直チニ屬スル所ノ統名ト其物自ラ有スル所ノ性トヲ擧ケテ之ヲ示スヲ主トス但所謂統名自ラ廣狹ノ別有リ之ヲ例ヘハ物ノ語ハ是レ一統名ナリ動物ノ語モ亦一統名ナリ而テ物ノ語ハ動物ノ語ニ比スルキハ其包該スル所更ニ廣シ草木禽獸人類皆其中ニ在レハナリ若夫レ動物ノ語ハ特ニ血氣有ルモノヲ指スヲ以テ獨リ禽獸人類中ニ在ルノミ故ニ若シ「人ハ物ノ智慮有ル者ナリ」ト曰フキハ物ノ語甚タ適切ナルヲ能ハス「人ハ動物ノ智慮有ル者ナリ」ト曰フニ至リテハ既ニ動物ト曰ヒ又智慮有ル者ト曰フヲ以テ其初ヨリ他ノ禽獸ヲ指サスシテ獨リ人ヲ指スヲ明ナリ故ニ曰ク釋義ノ法ハ其物ノ直チニ屬スル所ノ統名ト其自ラ有スル所ノ性トヲ擧ケテ之ヲ示スヲ主トスト
又釋義ノ法ハ必ス其用イテ以テ釋スル所ノ語ヲ取リテ主ト爲シ更ニ其釋スル所ノ物ヲ以テ賓ト爲シテ而テ意義ノ圓活ナルヲ前ニ擧クル所ト異ナルヲ無キヲ要ス之ヲ例ヘハ曰ク「動物ノ智慮有ル者即チ人ナリ」